
銀の薬師

綾月魁夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の薬師

【Zコード】

N7033G

【作者名】

綾月魁夜

【あらすじ】

今は滅びてしまった銀の薬師最後の一人、紗綾。^{さあや}彼女は、大好きなばあや・夕凪^{ゆうなぎ}と人語を理解する狼・琳^{りん}と一緒にひつそりと森の中で暮らしていた。そこへ、王宮からの使いといいうものが現れる。銀の一族が滅びた本当の理由と、神の関係とは。神は万能ではないそんなお話です。

来訪者

1 来訪者

深い深い森の中。人里からまるで隠れるようにその屋敷はあった。石造りの屋敷は絢爛豪華からはかけ離れている。しかし、そこに住む三人の住人にとっては居心地のよい最高の空間であった。

森の一部をぽっかりと切り取ったような庭には、色とりどりの花が植えられた花壇。さらさらと音を立ててあふれる、澄み切った泉。樹齢何百年という巨木の下でまどろむのは、美しい少女と立派な狼だった。美しい、と言口にしてしまえば、なんとも陳腐なものに聞こえてしまう。その流れる滝のような銀糸の髪、月光を透かしたような白い肌。あどけない寝顔に浮かぶのは、穏やかな微笑。何か夢を見ているのか、小さな唇から声とも寝息つかぬものが零れ落ちた。

「ひいさま、ひいさま」

遠くで声が聞こえる。しかし少女は目を覚まさず、代わりに狼がのそりと首を持ち上げた。

「夕凧。沙綾はまだ眠っている」

不思議なことに、狼の口から発せられた言葉は明確な人語であった。しかも、沙綾と呼ばれた少女を起こさぬよう小さな声であつたにもかかわらず、屋敷の奥にいる女には十分届いたらしい。一度女の声が途切れ、ついで歩み寄る足音が聞こえた。そして一瞬の間の後、苦笑交じりの声がささやいた。

「琳さま、お辛くはありませんか？」

狼に敬意を払う女も珍しいが、それを当たり前に受け取る狼も珍しい。琳は人間でいったなら困ったように笑つて言った。

「辛くないといえば嘘になるが……沙綾を起こすのは忍びない」

自分の背中に体を預けて眠る少女を見る瞳は、優しい。大切に慈

しむべき存在を見守るよつだ。

「よくお眠りですね。ですが……そろそろ田も騒ります」

空を見上げれば、南にあつた太陽はじりじりと西に移動している。

それに伴つて、まだ春先の空気は次第に冷えていく。

「それもそうか。……沙綾、沙綾」

「…………？」

狼にゆすりられた衝撃に、沙綾はゆっくりと体を起こした。小さなあぐびを一つ漏らし、大きく伸びをする。

「おはようございます、ひさま」

「あら……夕凪もきていたの？」

少女は狼から女に目を移すが、その瞳はぼんやりと焦点を結ばない。それでも、夕凪のいる方を違わず見つめるのは長年の習慣ゆえか。

「いつまでたつてもお庭から戻りませんもので」

わざとらしいまでに厳しい声を作つて告げれば、沙綾がごめんなさい、と首をすくめる。もちろん、一人とも本氣ではないとわかっている。

「さあさ、お茶の準備をしますからお部屋にお戻りくださいませ」琳と沙綾に向かつて一礼すると、夕凪はゆっくりと屋敷に戻る。その背を見送つてから琳が先に立ち上がり、沙綾も軽く伸びをして立ち上がつた。

「どれくらい寝ていたのかしら」

「そうだな……もうそろそろ日が傾くころだ」

「どうりで冷えるわけだわ。琳にくつついていたから、全然気づかなかつたけれど」

狼の毛皮は、昼間の光をたっぷり吸つて暖かかった。それゆえ、沙綾もゆっくりと眠ることができたのである。もう一度沙綾はかがむと、その体をぎゅうっと抱きしめる。苦しげに軽く琳がもがき、沙綾は笑つて狼を開放した。

一人並んでゆっくり歩き、時折琳が方向を示唆するよつた。一步前

に出る。その体にぴったりと足をつけ、慣れた道をためらいもなく少女は歩いた。

「琳、花の香りが強くなっているけど、もしかして満開になつた?」

「ああ、綺麗に咲いているぞ」

花壇の前で立ち止まつた沙綾の前で、琳も鼻を突き出すように覗き込む。その眼前には、アネモネやマーガレット、スミレなど色とりどりの花が咲き乱れていた。

「せつかくだから、ばあやに摘んでいこうかしら」

指先で花びらをたどるように触れ、花の形を判断する。彼女の瞳は光を失つて久しく、色の判断をするのは琳の役目だ。

「その奥に紫、手前に赤」

琳の言葉通りに花を手繕り、一輪ずつ丁寧に手折る。まるで見えているようだと琳は感じるが、現実に沙綾の瞳に花の色は写らない。その理由を知つていてるがゆえにわずかに悲しみが胸に宿る。それでも、少女が笑つていてることで琳は哀しみを隠すことができた。

やがて、沙綾の細い腕で抱えきれなくなつたころ、ようやく満足したのか手を下ろす。時折銀に輝く爪先がわずかに緑に染まつていた。

「これだけあれば十分よね」

独り言のようにつぶやき花びらに顔をうずめる。その甘い香りをたっぷり堪能してから、琳が歩き出すのと同時に沙綾も歩き出した。

「ばあや、お待たせ」

「まあ、ひいさま。こんなにたくさん摘んでこられたら、花壇が丸裸になつていませんか?」

「大丈夫よ、ちゃんと琳に見てもらつたから」

笑いながら相槌を求めれば、琳がもちろんとうなづく。その様子を微笑ましそうに見つめ、夕凪はくるりときびすを返した。

「早く水につけてあげましょうね。ひいさまと琳さまは、手を洗つてからテーブルで待つていてくださいまし」

まだまだ子供に接するような夕凪に一人は苦笑し、それでも素直

に従つた。

力チャヤリ、とかすかな音がたつ。田の前に置かれた紅茶は、ミルクティー。蜂蜜たっぷりの夕凪特製ミルクティーは、沙綾のお気に入りだつた。もちろん、添えられたクッキーも。

「琳さまには、ちゃんと蜂蜜を抜いてありますから」

銀の器を差し出しながら夕凪が微笑む。この狼が、昔から甘いもの好みないことはよく知つていた。

「甘いほうがおいしいのに」

「もともと私は人と同じ食事をしないからな」

もつたいない、とばかりに嘆く沙綾を軽くあしらい、水しぶきも音も立てずに器用に紅茶を飲む。その横で沙綾も上品にカップを口に運ぶ。口の中で紅茶の味をたっぷり堪能し、ほつと息をついてからふと気づいた。

「ばあや、さつきの花、どこに飾つたの？」

てつくりこのテーブルに飾られるとばかり思つていたのだが、花の香りがしない。不思議そうにきょろきょろと辺りを見回すと、夕凪が微笑を含んだ声で告げる。

「琳さまとひいさまのお部屋と、私の部屋に飾らせていただきました。残りは応接間に」

「ちよつとたくさん摘みすぎちゃつたかしら？」

「いいえ、部屋が華やかになつて、とてもうれしいですよ」

よかつた、と安堵する沙綾の隣で、狼が一瞬ピクリと耳を動かす。そして音を立てずに立ち上がると窓辺に向かつた。普段の琳は滅多なことで食事中に立ち上がらない。そう、沙綾の母親にしつけられていたからだ。そんな極めて珍しい行動に夕凪がまず眉をひそめる。「琳？」

空気が動く気配で少女も気づき、振り返る。もし、沙綾の瞳に琳

の姿が映っていたならば、その珍しい表情に驚いたであろう。何かを警戒するような、けれど、どこか戸惑うようなその双眸に。

「夕凪。馬が近づいてくる。一騎……いや、二騎か」

「ひいさまはここを動かないでくださいまし」

琳の言葉にすばやく立ち上がり、夕凪は厳しい表情で部屋から出る。その緊張した様子に不安がこみ上げてくるのをとめられず、沙綾は琳に駆け寄った。もうどこに何があるか熟知している部屋ではあるが、視界の利かない沙綾にはわずかに走ることも危険だ。

「沙綾、走ると危ない」

少女が抱きつぐままに沙綾を受け止め、琳は諭すように言葉をつむぐ。しかし、沙綾はその言葉が聞こえないかのように、ただきつくな琳を抱きしめていた。

柔らかな銀の体毛に体をうずめながら、思い出すのはあの日の夜。光を失い、逃げるように村を出た恐怖の記憶。夕凪の暖かい手のひらだけを頼りに、真の暗闇の中を子供は足早に歩いた。

「沙綾、大丈夫だ」

琳の優しい言葉に、びくりと体を震わせ沙綾の意識が浮上する。そして扉の外に意識を向ければ、緊張してはいるが争いの気配は一切ないと安堵した。

「大丈夫。何があつても沙綾は私が守る」

「…………うん」

ぎゅっと琳にしがみつき、沙綾は深く呼吸する。その一呼吸ごとに早まつていた鼓動は元に戻り、震えていた体も、やがて徐々におさまつていった。

しばらくそうしてじつとしていると、扉が開く気配がする。ぱたんとすぐに閉じられてしまった扉の向こう側は、視力のいい琳でも確認することができなかつた。

「ひいさま……琳さま……」

困ったような、泣きそうな口調で夕凪が歩み寄る。いつものかくしゃくとした足取りはなく、ようよろとくず折れるように一人の前

に跪いた。その背中を優しく撫で、沙綾ははやる気持ちを抑えながらなるべくゆっくりと言葉を紡ぐ。

「ああやっ？どうしたの？」

「ひいさまを、王宮へと」

「王宮？」

普段人とのかかわりを滅多に持たない沙綾には、王宮という言葉に耳なじみがない。どこか遠く、異国のように思える。そんなところへいったいなぜ、という思いと、なぜ自分のことを知っているのかという不審がじわじわと胸に広がった。

「なぜ？」

「ひいさまの、お力が……」

敬愛する彼の人から預かっている、大切な子供。いつしか、自分の子供のように思っていた。己の一族の、大切な大切なその力をどこでかぎつけたのか。

ぎりりと音がしそうなほど唇をかみ締め、夕凪はうなだれる。いつものおつとりとしたばあやのただならぬ気配に、沙綾は慌てた。なだめるようにその背を軽く撫で、一度抱きしめる。

「……話を、聞くだけ聞いてみるわ」

硬くこわばった表情のまま夕凪につげ、沙綾は立ち上がった。琳も従つように沙綾の足に寄り添う。一人になる心細さに、愛おしい子供を送りだすことに、夕凪は泣きそうな声で琳を呼んだ。

「琳さま……」

「大丈夫だ。夕凪は落ち着くまでここにいるといい」

歩き出した琳は立ち止まり、振り返り告げた。その力強い言葉にほつと安堵し、夕凪は目を閉じて手を組む。

「神よ……」

どうか、あなたの愛し子に辛い試練を与えないでください。あの子は、十分に苦しました。今もなお、苦しんでおります。どうか、どうか

パタン、と音が聞こえ、沙綾と琳が手の届かないところへ行つた

のを、知つた。

「私に御用と伺つてまいりました」

琳を従え、沙綾は背筋を伸ばして客人に目を向ける。もちろんその姿を見ることはできないが、その気配からどのような者が訪れているのかを知つた。

「あんたが、薬師の姫君か？」

ぶつきらぼうな口調が耳に届き、彼に向き直るように体ごと向ける。琳が警戒を解かないで、緊張したまま一つ息を吸つた。

「私は一介の薬師。姫などではありません。そして、すでに薬師としての生業を止めたもの。あなた方の求めるものは何もありません。今すぐお引取りください」

ぴん、と筋の通つた紐のような、けれどすぐに切れてしまいそうな危うい響きをもつたまま、沙綾はぐるりと部屋を見回す。声は一つしか聞こえていないが、氣配は三つ。どれも研ぎ澄まされた刃のような鋭い気配だ。たぶん、武器をたしなむものたちなのである。『申し訳ありませんが、そのお言葉は聽けません。我々には重大な使命があります。あなたが断ろつとも、どうしても王宮に連れて行かなければならないのです』

先ほどの声よりも幾分やわらかい。それでも、どこか上から命令するような響きは隠せない。その口調にほんのわずかに眉をしかめ、沙綾は声のほうに視線を投げる。胸を張り、小柄な少女だと侮られないように毅然とした口調で告げた。

「残念ですが、私に権力はききません。私はこの国の住民であつて、国民ではない。なので、あなた方の言つ重大な使命も私には関係がないことです」

そうきっぱりと言い切れば、最後の三つ目の気配が動いた。がたん、と大きな音を立てていすが蹴倒され、空気が動く。ずかずかと

歩み寄つてくるのがわかつたが、沙綾は動かない。動いたのは、足元の狼。

「グルルウウ」

牙をむき出して威嚇する琳に、気配が一瞬たじろぐ。その隙を見逃さずに、沙綾が口を開いた。

「近づけば、攻撃します」

「ちつ！」

前傾姿勢で今にも飛び掛るうとしている琳に、さすがの男も舌打ちして止まる。その様子を傍観していた最初の男が、どこか面白そうに告げた。

「わかつた。こっちが悪かつた。とりあえずお姫さんも座らねえか？」

「……わかつた」

レイと呼ばれた男は素直に戻り、椅子に座る。それを待つてから、琳がそつと足元を離れた。沙綾は一步、二歩と警戒を解かないまま歩き、言われたとおり腰掛ける。

「さつきのばあさんには話したけど、あんたには詳しく話してなかつたみてえだな。まずはこっちの状況からきちんと説明しよう」

そこで言葉を区切り、沙綾を伺う。少女は何も言わずに、ただ言葉を待つた。

「事の発端は、一ヶ月前にさかのぼる」

この国には、賢君と呼ばれ、国民から親しまれている国王がいた。しかし、国王は老いた。やがて老いは病を運び、国王は病に倒れる。その跡継ぎとなる王子は一人いた。第一王子ルーク、第二王子シド。一人ならば何も問題はなかつたのだが、不幸なことに二人いたのだ。

この国をすべる王族には、古くから慣わしがある。生まれた王子が一人以上ならば、そのうち光をまとうものが次の国王になると。

代々その選定は現国王が決めていた。有事の際は、それを神官が代弁する形になつていて。

過去にも何度か現国王の変わりに神官が次代の選定を行つていた例があつた。国王は病にたおれ、言葉をつむぐのも難しい状態である。なので、今回も過去の例に倣い神官が次代を選定することになった。しかし、それが問題であつた。

有事の際に次代を決めることができる神官は、三人いる。三人が一致したときに初めて国王となれるのだ。だが、大神官が現在不在の状態であり、神官は一人。その一人は、それぞれ光の意味をこう告げた。

一人は、光とは金の色を持つものだという。

一人は、光とはそのまとう王氣のことであるといふ。

そして、王宮は二つに割れた。金の色を持つ第一王子を推す一派と、王氣を持つ第二王子を推す一派と。やがて争いは熾烈になり、とうとう第一王子倒れた。それも、原因不明の眠りの病に。誰がやつたか確証はなく、解毒薬も手に入らない

「あんたは薬師だ。國中の薬師を呼んだが、だれも解毒をできなかつた。もう、あんたしか頼るものがいないんだ」

そういうて、男は苦しげに顔をゆがめた。主を救うために、自らのプライドを捨てて頭を下げる。他の二人も、それに習つて神妙に頭を下げた。

本来はプライドの高い人たちなのである。どこか憤然とした気配が残つているが、その潔さに沙綾の心はゆれる。

本音を言えば、沙綾は宫廷の争いごとなどどうでもよかつた。国王が変わろうが、第二王子が次の国王になろうが、自分の生活に何も変わりはない。夕凪と琳と、静かにこの森の中で暮らしていくだけだ。平穀に、穏やかに。

けれども、彼女の中の、薬師の血がざわめく。今まで近隣の村人

をたびたび救つてきた。そのたびに感謝され、その救ける喜びに心底薬師であることを誇りに思つていた。もし、今ここで彼らの頼みを引き受けなかつたら？ そうして、そのままもしも救える見込みのある王子が亡くなつたら？

そう考へると、胸の奥に冷たい石の塊ができたような気分になる。

重たい沈黙が続く中、琳の尻尾がそつと沙綾の足をなでた。思つたとおりに行動したら言ひと、勇氣付ける。

「……わかりました。診てみましょう」

ようやく沈黙を破つた沙綾の言葉に、男たちの表情が明るくなつた。これで主は助かるかもしけないと。希望の光を胸に灯す。

「ただし、いくつか約束してほしいことがあります」

「きけるものであれば」

条件をつけられるのは承知のうちだ、と男が笑つた。

「一つ。あなた方が主人が一命をとりとめた後、一切私にかかわらないこと。二つ。私の存在を公にしないこと。三つ。琳を、狼を王宮内へ入れてくれる」と。四つ。万が一、私があなた方の主人を助けられなかつた場合、私を含め全員に咎が及ばないこと。もちろん、そのときも一つ目の条件と同様に私たちに一切かかわらないこと。この条件を飲んでくださるのであれば、王宮へ参ります」

「わかつた。約束しよう。必ず守る。……心配なら後で書面にするか？」

最後に茶化すように付け加えるが、彼は約束を破らないだろう。なんとなく、沙綾はそう思つ。軽く微笑をたたえて首を振つた。

「……いいえ、ここにいるあなた以外の方と琳が証人です。書面はいりません」

一瞬琳が沙綾に視線を向けるが、うなずくことで大丈夫と示した。男が面白そうに笑う気配が届く。それをきっかけに、場がわずかに和んだ。そうしてはたと気づく。そういえばまだ名前も名乗つていなかつたのだと。

「申し送れました。私の名前は沙綾。最後の薬師です」

やや緊張氣味にそれでもなんとか微笑を作り、沙綾は立ち上がり軽く一礼をした。不思議な物言いに男が首をかしげる。

「最後？」

「はい。私で、最後です」

男が意味を問うが、少女は答えない。男は深く追求せずにただうなずいた。そうして沙綾を座るように促し、同じように席を立つ。もともと礼儀正しいのか几帳面なのか、わざわざ面接式の丁寧な礼まで添えた。

「俺の名前はレオン。こっちがレイで、ここからはリリ」

「……申し訳ないのですが、私は目が見えません。声を聞かせていただいてよろしいですか？」

たぶん、レオンは手で示しただけなのだろう。頭を下げる気配はあるが、なじみのない彼らの区別はまだつかない。わずかにためらつた後、沙綾は申し訳なさそうに言葉をつむぐ。てっきり彼らは気づいているかと思ったが、そこまで観察されていなかつたらしい。そう思うと。小さな苦笑がもれる。

「おっと、これは悪かった」

軽く驚いた気配が返ってきた。やはり、沙綾が思った通り彼女の双眸が光を失っていることに気づかなかつたようだ。他の二人も同じだつたようで、近づいた男でさえ気づいていなかつた。それほどまでに彼らも緊張していたのだろうか。

そんなことを頭の片隅で考へていると、思考をさせざるよつて声が届く。

「ミラといいます」

「レイだ」

口調は丁寧だが、どこか冷たい感じのあるミラ。ぶつきらぼうだが、leonに通じる温かみを感じるレイ。そして、彼らのリーダー格なのであるミラ。面白い三人組だなと、琳はかすかに鼻を鳴らす。自ら挨拶をしようとしたし、それを沙綾に止められた。

「今準備をしますので、もうしばらくお待ちください

軽く会釈を残し、沙綾は琳を伴つて部屋を出る。その拍子に、扉にすがつていた夕凪が転ぶように後ずさつた。

「まあや……」

「失礼かとは思いましたがお話を聞かせていただきました。……お行きになるのですね」

そこに彼女がいることに気づかなかつた沙綾は驚くが、諦めにも似た口調が驚きを消し去つた。それに疑問を感じるが、それを口に出す前に琳が言葉をつむぐ。

「行かなければならぬだらう」

「……はい」

琳と夕凪の視線が交錯する。それに気づけないまま、沙綾は動いた。彼らの話を聞くに、時間はあまりない。

「準備をするわ」

そうして沙綾が場を離れた瞬間、夕凪が悲しそうに視線を落とす。諦めとやるせなさとかすかな憤りが混じつた、複雑な表情。

「私は……また、あの子を護れないのでしょうか」

「夕凪……」

「また、あの子に哀しみを背負わせてしまうのでしょうか」
王宮へ行くということは、図らずもあの人には出会つのではないかと。もしも出会い、そして眞実を知つたとき。

がり、と小さな音がし、夕凪の手元を見れば爪が床板に食い込んでいる。その痛みがないわけではないだろうが、夕凪はひたすらこぶしを強く握り締めていた。

「大丈夫だ。あの子は、何にかえても私が護る」

「琳さま……」

「あの子が悲しむからおやめなさい」

そつと鼻先を夕凪のごぶしつつけ、促す。それだけで夕凪は力が抜けたようにごぶしを開いた。

「どうか……どうか、あの子をよろしくお願ひいたします」

「これ以上哀しみを背負わないよう」

これ以上涙にその瞳がぬれないようだ。

2 王宮

琳と沙綾は、賓客用の部屋に通された。甘い香りのする紅茶と焼き菓子を出され、部屋には一人だけになる。もちろん、扉の外に衛兵がいることは間違いないのだが。

「琳……私に、できるかな」

きゅっとスカートの裾を握り締め、沙綾が小さくつぶやいた。今更ながらに、王宮にいるという事実が彼女を萎縮させている。もしも琳が一緒ではなく、一人であつたならまともに薬を選ぶこともできなくくらい緊張していた。

「大丈夫だ。沙綾ならできる。……沙綾にしか、できないんだ」

「……私にしか、できない」

足元に座った狼の柔らかな体温。幼いころから共にすごし、そのぬくもりがそばを離れたことは片時もなかつた。家族のような、体の一部のような琳が大丈夫というのだ。きっと大丈夫なのであるう。そう思つことで沙綾は小さく息を吐いた。緊張をほぐしておかなければ、身が持たない。

コン コン

少し間延びしたノックが聞こえた。居住まいをただして座りなおす、琳は口を閉じる。こちらの返事を待たずに入ってきたのはレオン。

「ひつちだ」

言葉少なに合図をする。沙綾は立ち上がり、支えるように琳が足元に寄り添つた。琳についていく形で部屋を出て、右へ左へと複雑な道を歩く。その際一言もレオンは言葉を出さず、また沙綾も無言でついていった。

「ひつちだ」

案内された場所は、王宮の奥深く。衛兵の気配はするが、彼らは何もしゃべらない。ただ一礼を返し、彼らのために扉の前からわずかに退いた。

一つ息を吸つてからレオンが扉を開けた瞬間。誰かが勢いよく飛び出してきた。

「レオン！今までどこをほつき歩いていたんですか！」こつちはものすごく大変なことになつていて、今まで一人で王子の面倒を見ていたんですよ！レオンがいなだけで兵士の士気は下がるし王子は相変わらず目覚めないし陛下の容態は悪くなる一方だし王妃は王妃でああだし…………って、こちらのお方は？」

立て板に水の「」とくまくし立てていた男は、あっけに取られている沙綾と琳によつやく気づく。まず琳に驚いたのか、ぎよっとしたように軽くのけぞつた。しかし逃げ出しあはせず、次いで沙綾を見つめレオンをじつと凝視する。その細い双眸でまっすぐにみつめられたレオンは、苦笑して扉を閉めた。衛兵たちが一生懸命何もなかつたふりをしてくれる、その気持ちを汲んだのだろう。

「フィージ、少し落ち着け。お姫さんたちがびつくりしているだろう？」

くしゃり、と淡い茶色の髪をかき回し、慣れた仕草で肩をたたく。そうすれば、優しげな面立ちにふわりと微笑が浮いた。

「姫……？ああ、申し訳ございません。あなたが件の薬師殿ですね。申し遅れました。私、王子付きの教官でフィージと申します。レオンが何か失礼をしませんでしたか？」

「おい、それはどーゆー意味だよ」

にこやかな笑顔で挨拶したフィージとは対照的に、レオンの青い瞳が剣呑に細められる。しかし、その表情とは裏腹にレオンの口調は笑いを多分に含んでいた。どうやら彼らは旧知の仲のようで、レオンも本気ではないというのは初対面の二人でもすぐにわかつた。「そのままの意味ですよ。口が大変悪いですが、根はいいやつなんでおろしくしてやってください。ああ、すみません、大切なお客様

を戸口で立たせっぱなしにしてしまって、私としたことが不明でした。少し急がなければならぬので、お茶の準備を行きたいところですがそこは割愛させていただきますね。すべて終わりましたら、ゆっくりお茶でも飲みながらいろいろお話をさせていただければと思いますが、いかがでしょうか？姫君」

どうやらこのフィージという男性はものすごくよくしゃべるらしい。となりでレオンがげんなりしたように彼を見つめ、沙綾は思わず声を立てて笑ってしまった。その途端、全員の視線が沙綾に向いた。

「あの……？」

もしかしたら笑つたらいけなかつたのだろうか？

そんな不安が胸によぎるが、彼らの言葉に不安はすぐに払拭された。
「ずっと緊張しつぱなしにさせちまつたけど、笑えるなら大丈夫みてえだな」

「レオンが何か悪さをしてそんなにふざきこんでいると思つていたのですが……笑つていただけて本当によかったです」

どうやら傍目にもわかるほど自分は緊張していらっしゃい。それを汲み取つた一人がわざとおどけたように振る舞い、沙綾の緊張をほぐしてくれたようだ。緊張は悪くはないが、しそぎる緊張は悪影響を呼んでしまう。

昔夕凪に言われた言葉を思い出し、沙綾は一度瞬いた。そしてふわりと微笑する。

「大変失礼をいたしました。ご心配をおかけしてしまつたみたいですね。もう、大丈夫です」

「そいつはよかつた。……」この減らず口が役に立つこともあるんだな

柔らかな微笑を浮かべた沙綾にレオンも屈託なく笑つた。あからさまな嫌味はフイージにきかないらしく、笑顔で黙殺される。その二人の関係を少しだけうらやましく感じれば、琳が柔らかな体を押

し付けてきた。どうやら、早く挨拶を済ませてしまえと催促しているらしい。

「申し送れました。私は沙綾。」この子は琳。早速ですが、殿下の具合を拝見させていただいてよろしいでしょうか?」「

「そうしていただけだと助かります。……お手は必要でしょうか?」「

沙綾の目が不自由なことに気づき、フィージが言葉を添えた。それにはこりと笑って首を振り断る。

「琳がいますので……ありがとうござります」

軽く会釈をし、琳を伴つて歩き出した。そのまままっすぐ王子の眠るベッドにたどり着き、膝をついて手を伸ばす。少し離れたところにいる一人には、目が見えないのに治療ができるのかといふ不安が少なからずあつた。しかし、確かに見えてはいないはずなのに慣れた手つきで脈を取り顔に触れ、真剣な面持ちで患者を診る。診察が終わつたのか、沙綾は立ち上がり、難しい表情で一人を見た。

「どうだ?」

焦れて言葉をつむいだのはレオン。強固な意思で焦りや不安を押し殺してはいるが、声音は硬い。

「……最善は尽くします。申し訳ございませんが、しばらくの間お二人は退出していただきてよろしいですか?」「

「見てているだけでもいるのはダメか?」「

「見ていられるのが困るのです」

困ったような顔だが、きっぱりとそういうわれてしまえば二人に断るすべはない。しかし、見ず知らずの者と大事な王子を一人きりにするのも問題だ。何かあつてからでは遅いのだ。彼女が刺客とも限らないのだから。

しかし。

「レオン、部屋を出ましょ。どうせこじても、私たちでは邪魔になるだけです」

「……わかった。ただし、隣の部屋にいるのは譲れない

「もちろんかまいません」

フィージに諭され、レオンはしぶしぶながらもうなずいた。条件をつけることを忘れなかつたのは、さすがといおうか。

沙綾と琳を残して隣室に消えた一人は、やるせなさをため息に乗せる。乱暴にいすに座るレオンに眉をひそめながらも、フィージは棚から蜂蜜酒と焼き菓子を持つてくる。レオンの前に差し出し、自らもその向かい側に座つた。

「そんなにカリカリしなくても大丈夫ですよ。の方は、銀の一族でしょう？必ず王子を助けてください。あなたもそれを見込んで、わざわざあの森を訪ねた。の方に会うために。あなたのすることに間違いは滅多に起こりません。それは私が証明します」

「……わかつちゃいるんだけどな」

「彼女でなければいけなかつた。大切な彼の人を助けることができるのは、世界中でもあの小さな少女だけなのだから。

「あなたには甘いでしうが、少し飲んで休んでください。終わりましたら、必ず起こしますから。どうせあなたのことです。他の人のことなど考えずに馬を飛ばしてきたのでしょうか？あなたも相当参つてるはずですよ。自覚はないのですか？」

「……わかつたよ。頼む」

「ぐじくどと説教されるのは趣味じやない。

顔をしかめると、杯に満たされた蜂蜜酒をぐいっとあおつた。彼には甘すぎるそれも、疲れた体には心地よい。焼き菓子には手をつけずに、そのままソファにごろりと横たわつた。

「あの方が、本当に銀の姫であるのならば……」

「何も心配は要らない。

「……皮肉なものですね」

小さく自嘲した。彼女に頼らなければならなくなつたことを、ちらりと後悔する。それでも、自分の悔恨など小ちなことに過ぎないとフィージは目を閉じた。

隣室では、沙綾が小さな布袋からさまざまな薬草を広げていた。

粉にしたものもあれば粒状のもの、液体、花びらや葉の乾燥したものなど種類はたくさんある。その中からこくつか選び出し、近くにあつた水差し用の器に移していく。

「いつみても沙綾はすこくな」

「どうして？」

「見えていないのに、何でわかるんだ？」

「わかるんじやなくて、薬が教えてくれるのよ」

もう、何回答えたかわからない答え。琳は、沙綾が薬を調合するときは必ず同じことを聞く。そして必ず同じことを沙綾が答える。これは一種の儀式のようになっていた。

「薬はね、目で見てもわからないわ。ちゃんと、相手のことを考えて何が必要か尋ねねば必ず応えてくれるの」

「……そんなものか？」

「そんなものよ」

くすりと笑つて沙綾はさらりと答える。事実、それぞれの薬が入つている小瓶には指で触れてわかるような特徴はない。沙綾にはすべて同じ小瓶に感じられるだろ。それでも、彼女が作った薬例えば傷薬や解熱剤など はどれも格別によく効く。

やがて器の中身は、どろりとした白濁色の液体で満たされた。最後の仕上げにと、沙綾は小さなナイフを取り出し、ためらいもなく指先を傷つける。ほんの一滴。赤い液体が混ざると、不思議なことに濁っていた液体は透き通り、淡い紅色に色づいた。

「ちゃんと飲むかしら……」

何せ、相手は眠っているのだ。口に含ませたとしても転下してくれるとは限らない。それでも、骨ばった手首やことわりゆきく脈打つ心臓に時間はないと悟る。

静かに頭を持ち上げ、そつと口元に器を当てるといつくりと液体を流し込む。幸いなことに、彼は少しずつではあるがきちんと飲み込んでくれた。

「琳、一人を呼んできてくれる?」「わかつた」

ほつと安堵した沙綾の要望に快くうなずき、琳は軽い足取りで歩き出した。さすがに大きな体を持つ琳でも、重たい扉を開けることはできない。前足でカリカリと扉をひっかけば、すぐに開いた。

「王子は?」

「容態はいかがですか?」

心配顔の一人が駆け寄つてくるには、薬はすべてなくなりていた。沙綾はにこりと微笑むと大丈夫とうなづく。

「早ければ今日の夜にでも、遅くとも明日には目覚めるかと」「そうか……」

ひとまず安心はしたが、肝心の王子はいまだ目覚めていない。まだ気は抜けないとレオンはひそかに氣を引き締める。

「姫君、お疲れでしょうからどうぞこちらの部屋へ。今温かいお茶を用意させますので。……指先をどうされたのですか? 先ほどは気づきませんでしたが、怪我をされていたのですね。申し訳ございません、すぐに薬をお持ちしますので」

ふと、薬師に薬を出してもいいものかと疑問に思つフイージ。首をかしげて考え込んでしまった彼に、沙綾は笑つた。

「これくらいの小さな傷ならたいしたことありませんので。見苦しいものをお見せしました」

布袋の中から止血用の布を取り出すと、細く切り裂く。それを片手で器用に巻きつけ、床に散らばった小瓶を片付け立ち上がつた。

「殿下の容態は安定しているとは思いますが、ご迷惑でなければしばらく様子を見させていただきたいのですが……」

「もちろん!」じからお願いしようと思つていたことです。部屋の準備は後で用意させますので、どうぞじからく」

恭しく沙綾の手をとり、フイージは隣室へ歩き出す。と、歩みを止めレオンを振り返つた。

「どうしますか?」

「ここにいる」

「いつ王子が目覚めてもいいようにとのことなのだろう。職務熱心なだけでなく、レオンと王子は年の離れた兄弟のようでもあった。それだけ、彼のことが心配なのだ。

レオンとも王子ともかれこれ十年来の付き合いとなる。一人の関係もレオンの気持ちもよくわかるフィージは、穏やかに表情を緩めてうなずいた。親友をそのままに、沙綾を伴つて歩き出す。と、何かに気づいたように振り返った。

「おや？」

当然ついてくると思った狼が歩みを止めてしまったので、フィージは数歩戻ると狼と目線を合わせるようにかがむ。少し迷つてからまじめな口調でどうするかと尋ねた。狼にまじめに話しかける人間は珍しく、沙綾は少しだけうれしそうに笑う。そうして、口を開かない狼に変わつて少女が返答を返した。

「琳にミルクがたっぷり入つたお茶をいただけるなら」

「それはもちろん。大切な恩人のご友人であらせられるからね。」

「おや、人ではないから友人ではないのかな？友犬、いや狼か。友狼？しつくりこないな。この場合はやつぱり友達になるのかな」

生真面目な顔で琳を評するフィージを、当の狼がまじまじと見つめた。まるで今まで見たことはない不思議な生き物を見るように。さらに、フィージの後ろでは沙綾があっけにとられたように彼を見つめ、レオンにいたつてはうつむいて肩を揺らしている。

友人のおかしな言動には慣れてはいたが、それが人に對してだけ発揮されるものではないと気づき、笑いのツボにはまつてしまつたらしい。そんな彼らの様子に気づいたのか、至極まじめな顔でフィージは周りに尋ねた。

「何かおかしなことを言いました？」

「いや、私に対してもここまでまじめに考え込む人間は、そつ多くないからな」

声がどこから聞こえたのか一瞬わからない。問いかけたフィージ

も、そばで聞いていたレオンも、ぎょっとしたように琳を凝視した。琳が言葉を発したことに沙綾も軽く驚き、ついで眉をひそめる。

「琳」

「大丈夫だ」

心配する沙綾をよそに、琳は楽しそうに答える。この一人は信用できると。

「……いやあ、驚きましたね。鳥がしゃべるのは見たことありますか、狼がしゃべるのは生まれて初めてですよ」

驚きのあまり、言葉が出てこないらしい。饒舌すぎるほど饒舌なフィージにしてはめずらしく、言葉が少なかつた。同様に、レオンは言葉も出ないほど驚いているらしい。王子のそばから離れ、まじまじと琳を真正面から見つめた。

「……狼、だよな？」

「無論」

田の前でしゃべられれば信じないわけにはいかない。自分たちの常識にはきっと当てはまらない者たちなのである。

そう結論付ければ、もともと頭の柔らかいフィージである。細い田をさらに細めてにこやかに笑つた。

「姫君の話では、君はミルクたっぷりのお茶を飲むそうですね。今甘い焼き菓子と一緒に用意しましょう。姫君も一緒に、隣の部屋でお待ちいただけますか？」

「お言葉に甘えまして」

沙綾もにこりと笑うと、フィージとレオンに軽く一礼を返してから琳を伴つて隣室へ行く。残されたレオンは奇妙な表情のまま、それでも王子の枕元へと戻つた。

「……なんか、あんまり驚いてねえんだな」

ベッドの端にどっかりと腰をかけて友人を見つめる。細い田の青年はそれは意外だと表情を変え、飄々と返事をした。

「いいえ、ものすごく驚いていますよ。でも、納得はしました。」

「これで、彼女が本物であると」

「…………」

「さて、私はお茶の準備をしてきます。あなたも何か飲みますか？」

「頭がすつきりするようなのを頼む」

「では、すぐにでも」

にこやかな笑顔を残してフィージは部屋を出る。相変わらず眠り続ける主を苦い顔で見つめ、黒髪の青年はつぶやいた。

「俺は時々、あいつが怖いよ……。お前ならどう思う……？」

普段は軽い調子だが、ひとたび剣を取れば冷静沈着、向かうところ敵なしと恐れられるレオン。その彼ですが、フィージが怖いと思うときがある。もう、長い長い付き合いになるが、あの穏やかな笑顔の裏に隠されたものは自分と十分通じるものだ。

「早く起きろよ、ルーク」

祈るように組んだこぶしがきつく握り締め。今はただ、神に祈る。

目覚め

3 目覚め

癖のない黒髪を、誰かがいじつている。少し硬質なまつすぐな黒髪は、昔は姉たちのおもちゃだった。そのせいか、今も誰かに触られるのが嫌いだ。

うつとうしく思つて頭を軽く振るが、指先は一瞬離れただけですがにまた絡まってくる。その感触を楽しむように。

姉とは違う、少し無骨な細い指。触られるのは嫌いなはずなのに、なぜか心地よい。そう、昔、まだ自分が本当に小さな少年のときにな

「…………誰だ……」

夢うつつのまま記憶を手繕るが、幾度も髪を引かれる感触に記憶は砂のように零れ落ちる。それは形にならずに、結局眠りを妨げられてレオンは目を開けた。

「おはよっ」

「…………おはようじやねえだら、ルーク」

湖の瞳が、ようやく自分を見つめた。青く、碧いその眼差しは自分が求めてやまなかつたもの。今は少し疲れに翳つてはいるが、日の光に当たればきらきらと湖面のよつと輝くその双眸。よつやく見つけた、自分が仕えるべき主。

けれどその瞳が自分を映す喜びよりも先に、あまりののんきなこ

脱力感がレオンを襲う。

「私は、どれくらい眠つていた?」

「一月経つくらいか」

体を起こそともがくルークに手を貸し、レオンはその背中に枕をいれて掛布を丸め、彼が楽なように整える。にこやかに礼を述べるが、その顔色は明らかに悪かった。

「待つていろ、今フイージを呼ぶから」

「レオン、待て」

部屋を出て行こうとするレオンを制し、ルークは思案するようにうつむく。何か言葉を紡ごうとするが唇をなめては飲み込み、言葉は音にならない。そんなルークを覗るように見つめ、レオンは数歩進んだ足をまたベッドに向けなおした。

「ルーク？」

「フイージは……いや……大丈夫、なはずだ……」

「一人で抱え込むなって、何度いえばわかるんだ」

敬愛する主人であると同時に、弟のような存在だ。悩むルークの頭をぽん、とたたき、レオンはベッドに座りなおした。そして視線で話を促す。

「どうした？ 何を悩む」

「……私が倒れたのは…… フイージが入れたお茶を飲んだ後だつた」

「何？」

思わずルークの発言に、レオンは驚きを隠せない。フイージは、レオンの無二の友人であり、ルークの忠実な臣下で教師だ。それに、当の本人からそんな話は一言も聞いていない。普通に考えれば自分が疑われるようなことを他人に話すとは思えないのだが、ことがことなだけにレオンの眉間にしわがよつた。

「どういうことだ？」

「あの日……父上の代わりに仕事をしていたのは知っているな？」

もちろん、とうなづくレオンから視線をそらし、ルークは迷うようにはじをなめる。それからしばらく沈黙し、やがてレオンが焦れたころ再び口を開いた。

「その日は、西の地方で洪水があつて、人手がすごく少なかつた。

私とフイージと、数人しかいなかつたんだ」

彼が倒れた日は、レオンもよく覚えていた。確かにその日、連日の豪雨で川が氾濫し、西の地方に大人数が借り出されていた。その

中にレオンもいたのだから間違いない。ひどい土砂降りで、前もよく見えない中で懸命に作業をしていたのだ。

小さな村一つが水没するような大規模な氾濫だった。大勢の人が亡くなり、ようやく水が引いたときには果然とする人々の姿でいっぱいだつた。彼らを叱咤し、どうにか立ち直らせるころにはもう日付が変わっていた。結局宮廷に戻つたのはその翌々日で、その時にはすでにルークは眠りについていた。

「そろそろ日暮れも迫つていて……昼食をとる間もなかつたから、フィージが軽食とお茶を持ってくれた。フィージはいつも隣でお茶を入れていた。そのときも、隣の部屋にはフィージだけしかいなかつたはずだ」

過去にさかのぼる記憶をルークの言葉が現実に引き戻す。その言葉の意味に気づき、ますます眉間にしわを寄せた。

「……眠つたのは、その直後か？」

「いや、もう少し後だつたと思う」

「なら、フィージのお茶とは限らないな。一緒に何か食べただろう？それが原因かもしねない」

しかし、とも思う。自分が帰つてきたときには、すでにルークは眠りについていた。眠りにつく直前の話を聞いたときも、ルークが何か口にしたとはいわなかつた。ただ単に忘れていたとも考えられるが、何せルークが目覚めなかつたことで一時騒然となつたのだから、フィージがそういう「抜け」をするとは思わない。自然、ある仮定が浮かび上がつてくる。

「……あいつを疑いたくはねえが……とりあえず、あいつのことは俺に任せとけ。お前はもう少し休んでろ」

話し疲れたのかルークの顔色が一段と悪くなつたことに気づき、レオンは彼を半ば無理やり横にする。ゆるく抵抗するその体に布団を直すことで押さえ、やがてルークが眠りに落ちるまで穏やかな顔で付き添つた。しかし、彼が眠ると一転して表情が険しくなる。何事を考え込むが、一つ大きくかぶりを振つて隣室の扉を開けた。

規則正しい寝息を止めないように、レオンは息を殺して歩く。もともと剣をたしなむ身だ。気配を殺すことなど造作ない。そつとナイフを抜くと、フィージの首筋にあてがつた。

ナイフの冷たい感触に眠りを妨げられ、紅茶色の双眸が開く。眠りが浅かつたのか、すぐに自分の置かれている状況に気づいた。

「何のまねですか。悪ふざけにもほどがありますよ」

ナイフが首筋に触れているといふのに、フィージはいたつて冷静に言葉を紡ぐ。相手が顔見知りということ、ナイフを突きつけられる理由が思い浮かばないからかもしれない。

時に自分以上に冷静に状況判断をするフィージに、レオンは無性に腹立たしく思った。もしもここでわめくか何かしてくれれば、もつと自分は冷静になれたのにとハッパたりめいたことを考える。そんなことを考える自分は、冷静なのかそれとも多少なりとも混乱しているのかわからず、「内心苦笑した。しかし表情には一切出さずに、静かに告げる。

「残念だがふざけているわけじゃない。……ルークが目を覚ました」

「本当にですか！」

今にも飛び起きそうなフィージを、レオンの刃が制する。フィージの眉間にすっとしわがより、いい加減にしろと視線が語った。もちろんそれだけではレオンの刃は離れずに、怒ったような困ったような、どこか泣きそうな情けない顔でつぶやくように問う。

「なあ、フィージ。どうしていわなかつた？」

「何をですか？」

「ルークが倒れる前に、お前が持つてきたお茶と食事を取つたことを」

一瞬、フィージの双眸が見開かれた。そして迷うように視線をさまよわせ、何度も口を開閉させる。が、やがてあきらめのため息をつく。

「それは……王子から話を聞いたのですね？」

「ああ。場合によつちやあ、このまま……」

ぐつと刃を押し当てる手に力をこめれば、ぶつりと皮膚の敗れる感触。そのまま一筋赤い筋が首を汚した。血の流れる感触に顔をしかめ、馬鹿なことを言うなと怒りを表す。

「冗談よしてください。私が王子を裏切るはずがない。王子を殺したいなら、あなたがいない間にさっさと終わらせていましたよ。眠らせるなんて生ぬるいことはせずに、さっさと殺して誰の手も届かないところに逃げますよ。いわなかつたのは……いえなかつたのは

」

確かに、何事も完璧を追求するフィーリーはこんな中途半端に終わらせることはしないだろ？ 薬物ならばすぐに足がついてしまう。剣のたしなみはあまりないとはいえ、新米兵士を相手できるほどの腕前だ。油断している丸腰の相手ならば、手間取ることもないだろう。彼の思考回路はある意味わかりやすい。もしも自分で手を下したならば、証拠を残さずにさっさとこの国から姿をくらませているはずだ。

それならば、答えは一つ。

「誰をかばつてた？」

「……巫女を……リコです」

「何？」

思わず耳を疑つた。もつとも容疑者から遠い人物の名前が飛び出してきたからだ。

「本当か？」

「ええ、本当です。嘘を言つてどうなりますか」

確かに、彼女ならばフィーリーがかばう理由は十分にある。今は巫女となり神に身をささげたが、もともとは彼の妹だ。その仲のよさは宮中にお墨付きで、フィーリーが時間を空けてはリコの元を訪れていることは有名だ。しかし、何よりもリコの悪いうわさを聞いたことがない。それに、リコならばレオン自身もよく知っている人物だが、彼女がどういう人物かよりも今は巫女であることが問題だつ

た。

「けど、リコは……巫女だの？』

「そうです。あなたもご存知のように、巫女は一日の大半を祈りの間で過ごします。巫女は神に身を捧げたもの。俗世の仕事をできるはずがありません。けれど……現に、リコから受け取った料理とお茶で王子は倒れてしまいました。リコから誰からもらつたものか問い合わせましたが、なぜかそこだけ記憶が曖昧なのです。それはすなわち

』

彼女の身を危険にさらすもの。

それだけは許せるはずもなく、フィージはやむなく隠蔽した。幸い、ルークが食事を取つたことを知つてているのは自分だけだ。しかも、食事を取つた直後ではない。ならば自分にも妹にも疑いはかかるないだろう。

苦悩に顔をゆがめたフィージに、レオンがため息を漏らした。そのまま無造作にナイフをしまうと苦い顔で告げる。

「お前が妹をかわいがつてるのはわかるが……」ことなどだけに、黙つていられるとな。とりあえず、そのお茶は調べさせてもらひうだ

「あ、レオン。お茶の葉からもあの時王子が食べた食事の中からも薬は見つかりませんでしたよ」

「…………なんだつて？」

あつけらかんとした口調で悪びれもなくいうフィージ。思わずレオンは聞き返すが、フィージの微笑みは何を当たり前なことを、といわんばかりだ。先ほどの苦悩に満ちた声は演技だったのかと疑いたくなるほど飄々と続ける。

「私がそのまま放置しておくと思いますか？いくらリコがかわいくても、あの子が利用されているとわかつたなら容赦しません。翌日に調べましたが、何も出ませんでした。……まあ、それもあつたら誰にも言わなかつたんですが」

呆れ果てて脱力し、レオンは疲れたよつてベッドの端に腰掛けた。一瞬そのよく動く口を縫つてやりたい衝動に駆られるが、恨みがま

しい視線でフイージを責めるだけにとどめる。

「お前なあ……そつならそつと早く言えよ。紛らわしい。口はよく動くくせに、肝心のところはしゃべらないのはいい加減に止めろ」「そつは言われましても……敵を欺くなら味方からと」

「状況を考えろ、状況を」

布団の上から一度フイージの腹あたりを半ば本氣で殴り、怒りもあらわに立ち上がる。ぶつぶつと文句をつぶやくと、振り返りもせずに部屋を出た。

残されたフイージはゆっくつと体を起こす。何気なく窓の外を見れば、ぼんやりと輝く淡い月が目にに入った。その光から視線をそらし、乾きかけている血を無造作にぬぐう。赤く染まった手の甲を自嘲気味に見つめ、困ったように笑った。硬く閉ざされた扉を見つめながら、ため息のよづに言葉を紡ぐ。

「レオン。申し訳ありませんが、私は誰も信用していないんです」

もう、長い長い付き合いであるあなたさえも。

「の方を守るためであるならば……」

吐息にまぎれた言葉は、静かに夜の闇に消える。

言葉は誰にも届かない。ただ、闇だけが聞いていた。

翌朝、まだ田が昇つたばかりの時間に沙綾は田が覚めた。いつもと違うベッドで寝たせいだろうか。眠りが少し浅く、けだるい感覚が体を支配している。

「もう起きたのか？」

「ええ、なんとなく目が覚めてしまつて……」

空はまだ薄ぼんやりと明るくなつたばかりだ。いつもならもう少し眠っているところだが、眠気は訪れない。それならばと起き出し、用意されていた水で手を洗う。

昨夜はフィージの部屋から戻るなり、緊張と疲れで着替えるもなく眠ってしまった。頭に触れればとこねじりで髪がもつれ、顔

に触れた感触で肌が汚れていることに気づく。

「琳、私、ひどい格好をしていないかしら？」

「……家にいるときよりは、確かにひどい格好だな」

「やつぱり……。お湯を使わせてもらいたいなんて贅沢は言わないから、水をいただきたいわね」

自分の目が見えなくてもやはりそこは女心。できる限りの身だしなみは整えたいと思うのは当たり前だろう。

「香りの葉は持つてきていのいか？」

「そういえば……」

何気なく問われたことにはつとして布袋を探る。天に願いが届いたのか、はたまた沙綾の無意識からか、一瓶だけ香りの葉が入っていた。

「よかつた……。琳、ありがとう」

きゅっと琳の首を抱きしめると、さっそく水差しから新しい水を器に注ぐ。その中に香りの葉といくつかの薬草を混ぜると、昨日切った傷口をもう一度開く。ちり、とした痛みを感じると、ぷくりと赤い玉ができた。それを水の中に入れれば、なんともさわやかな香りがほのかに漂う。その出来ばえに満足して笑い、備え付けてあった化粧箱から櫛を拝借した。

もつれた髪を丁寧にすき流し、香水に浸した手巾で幾度も顔を拭う。それから首筋、腕と順に布を滑らせた。最後に髪を布で包みこめば、艶が増してまるで絹糸のように滑らかになった。

「もう大丈夫かしら」

「大丈夫、いつもの沙綾だよ」

鏡代わりとなっている琳に尋ねねれば、太鼓判を押したような返事が返ってくる。

ようやく人心地つき、さて着替えようかと服を手にした瞬間、沙綾は思わずため息をついた。用意されていた服は、沙綾の着たことがない形の服だった。着替えの服は持ってきておらず、昨日着たままの服ではさすがに居心地が悪い。

「困ったわ……。まさか琳じゃ手伝えないし……」

「さすがに沙綾に服を着せるのは難しいな。もう少し待つてから、誰か人をよんだらどうだ?」

「そうね、そうするわ」

あきらめて服を元に戻し、窓を開ける。心地よい風とともに、かすかな雨の香りが部屋を満たした。

「……夕凪は大丈夫かしら」

今まで近くの町に出たことはあっても、必ずその日のうちに返つてきていた。夕凪一人を残したことではなく、不安が沙綾の胸をふさぐ。

「夕凪だってたまには一人のほうが気楽かも知れないよ?」

「……そうね、ずっと私の面倒を見てもうっているんだものね。たまには羽を伸ばしているかしら」

くすりと笑つた沙綾にほっとし、琳はその足元に擦り寄る。窓辺に押し付けられる形となり、沙綾は笑つて琳の頭をなでた。そのまま床に座り込めば、甘えるように琳が顔をなめる。

「くすぐったいよ

くすぐすと笑うが、なかなか琳は止めようとしない。そういえば、この香りは小さいころから琳の好きな香りだったなと思い出す。昔から、この香りをつけているときはまるで犬のように琳は甘えるのだ。

「琳は……帰りたくないの?」

琳の頭をぎゅっと抱きしめることでなめるのを止めさせ、沙綾は少しためらつてから言葉を紡ぐ。

琳とであったのはもう大分昔のことになる。いつも自分の傍らに寄り添つてくれる狼は、すでに沙綾の一部といつても過言ではないけれど、時々思う。琳は、かつて住んでいた場所へ帰りたくないのだろうかと。

「私のいる場所は、沙綾の隣だよ。銀歌様に命じられたことであつても、私は沙綾が好きだ。だから、そばにいる

少しだけ怒つたように沙綾の胸に頭を押し付け、白い指先を甘がみする。琳の気持ちがうれしいと同時に疑つた自分をわずかに恥じた。

「「めんなさいね。あなたは私の大切な家族。ずっと、ずっとよ」

いずれ、自分も琳とともにに行くことになるだろう。あのお方の場所へと。けれども、そのときになつても決して自分と琳は今の関係を崩すことはないだろ?」

「沙綾、そろそろみんな動き出したみたいだ」

琳がそういうと同時に、部屋の扉がたたかれる。一瞬迷つてからショールを羽織り、扉を開けた。

「おはようござります、お早いですね。今人を呼びますので、もう少しお待ちください。ああ、王子が目を覚ました。あなたのおかげです。心から感謝いたします。……まだ少し顔色が悪いですが、食事も取られるとのことなので、よろしければ同席していただけませんか? 嫌いなものがなければ同じ食事を用意いたしますが、いかがしますか?」

「おはようござります。えと……殿下が目を覚まされたのですか。薬が効いたようで、本当にようございました。それから……特に好き嫌いはありませんので、失礼に当たらなければ一緒に緒させていただきたいと思います」

フイージの話し方にも慣れたつもりではいたが、やはりいつぶんに問いかかれると何から答えていいのか戸惑つてしまふ。それでもどろにか笑顔で答えた。

「では、お一人の食事を用意いたしますので、もう少々お待ちください。なるべくあなたの姿を人目に触れさせたくはありませんので、不自由をかけてしまいますがお許しください。私の妹を連れてきますので、気兼ねなく世間話でもしていただければ。ああ、それとリン殿は何を食べられますか?」

「人と同じ食事は好みない。ミルクの入ったお茶だけもらえればそれで満足だ」

「わかりました。そうしましたら、リン殿にはそのよつじしますので。もうじばらへいらっしゃりでお待ちください」

「お心遣い、ありがとうございます」

では、トフィージが出て行くのにあわせてパタンと扉が閉じた。その後ろでほつと小さく息をつく。

「沙綾はトイージが苦手そうだな」

「苦手どころか……何から話していいかわからなくなるわ」

淡い苦笑を浮かべ、緊張に乾いてしまった喉を冷たい水で潤す。グラスをテーブルに置くと、控えめなノックが聞こえた。

「どうぞ」

「失礼します。お初にお目にかかります、リコと申します。しばらくサーヤ様の身の回りをお世話させていただきますね」

おつとりとしたしゃべり方は、兄のトイージとはあまり似ていない。けれど、かもしだす雰囲気はよく似ていた。そして、好奇心旺盛な紅茶色の瞳も。トイージよりはやや遠慮がちに、それでも沙綾と琳をじっと見つめる。その視線に淡い口調を混じらせて微笑み、沙綾は軽くお辞儀した。

「はじめまして、リコ様。よろしくお願ひいたします」

「まあ、私のことはリコと呼んでくださってかまいませんわ。敬語も必要ありませんよ」

沙綾の丁寧な口調に驚いた表情を浮かべるが、次の瞬間笑う。そうすると、兄とそっくりになることに気づいたが、琳は賢くも沈黙を守った。

「ええと……失礼に当たらないかしら？」

「ええ、もちろん」

「それなら……リコ、よろしくね」

ぎこちないがそれでも碎けた沙綾の口調に安心したのか、リコが笑う。同じ年頃の少女と接した記憶がない沙綾には、少し新鮮な感覚だった。琳に対する愛情とは違う、好ましい感情。うまく名前は付けられないが、心地のいいその感覚は嫌いでない。

「まずは着替えをお手伝いさせていただきますね。昨夜はお着替えにならずに？」

「ええ、ベッドに横たわつたらそのまま寝入つたしまつたみたいで……」

「森からいらして、すぐに殿下を診て下さつたのでしょうか。お疲れで無理もありませんわ」

恥ずかしがるように沙綾が告げるが、リコは別段笑うでもなく真顔でうなずく。

森までの距離は正確にはわからないが、かなりの距離があると認識していた。しかも、レオンに連れられてきたと聞いている。といふことは、彼と同じ速度で駆けたのだろう。手加減されたとはいえ、相当負担がかかつているだらうことは簡単に予測できた。

「セーヤ様は珍しい形の服をお召しになられているのですね」

興味深そうに沙綾のいでたちを眺め、リコは人形遊びよろしく沙綾をいじる。手を上げさせたり後ろを向かせたりと、何事にも熱心になるところは兄そっくりだ。

「珍しい……かしら?」

沙綾にとつては「ぐう正常的な服だ。幼いころから大きさは変われど、基本的に形は変わっていない。元々女性は子供にあまり手をかけられない一族であつたため、彼女の服は人手のかからないローブのような形だ。」

夕凪はあれこれ世話を焼いてはくれるが、昔から自分のことは自分でする。それが沙綾の信条であるため、服を着るのにいちいち人手がいるのは好まない。そのため、ただ被つて腰の辺りを帯でくるだけの、簡単なものだった。

「珍しいといいますか……もつと華やかな服をお召しにならないですか?」

「私の仕事は薬草を摘んだり薬を煎じたりすることだから、綺麗な服は必要ではないの」

別段卑屈になつた様子もなく、あるがままのこと当たり前のよ

うに言う沙綾。その素直といつか純粹さに驚き、まじまじと沙綾を見つめる。

「合理的といつか……着飾る」とは、あまり興味がありませんの？」

「だつて……綺麗なものは、見えないから……」

少しだけ寂しそうにつぶやかれた言葉。それにほつとして、失言に恥じる。

「ごめんなさい。……でも、こんなにお美しいのに、ものすごくもつたないですわ」

「沙綾は確かに綺麗だけど、リコも十分綺麗だ。それなのに、リコこそ着飾つたりしないのか？」

不意の言葉にぎょっとして、リコは足元に視線を落とす。不思議そうに自分を見つめる狼は、確かに恐ろしい牙を持っているが、その毛並みの美しさに、澄んだ瞳に恐怖はわいてこない。むしり、この狼がしゃべることは当たり前のように思えた。

「あなたが『リン殿』ね。兄から聞いていたけれど、驚いたわ」

「あまり驚いていないよつた感じはするけど?」

面白がるような琳の言葉にくすりと笑い、リコはかがんで琳と視線を合わせる。深い紅茶色の瞳が琳の姿を映し、琳は一瞬心の中を見透かされるような感覚を味わった。

「私は巫女。神の言葉を聞くものよ。だから、狼のあなたがしゃべることに何の不思議もないわ」

「巫女……それなら、私のそばにいるのに差支えが……」

「お兄様とルーク様のお言葉ですから。それに、お世話といつても夜と朝の着替えのお手伝い、あとはおしゃべりをすることですし、私はぜんぜんかまいませんわ」

心底沙綾と話せることが嬉しいといつその口調に、ようやく不安が消える。ほんのわずかに自分の目が不自由なことを後悔したが、その後悔もリコの笑顔の前では長続きしなかった。

「ありがとうございます。改めて、よろしくお願ひします」

「うひひひひひ。そろそろ女度を整えないと、レオン様の雷が落ちてくすくすと声を出して笑うと、綺麗にたたまれた藤色の衣装を手に取る。広げて形を見ると、ヒーリと笑った。

「きっとサー・ヤ様によく似合いますわ」

4 出会い

背中の部分にクッシュョンを山と積み、どうにか楽な体勢をとつてはいるが、ルークの顔色は相変わらずよくなかった。沙綾を今か今かと気を揉んで待つていると、ようやくノックの音が聞こえる。

「遅かつた

」

乱暴にドアを開け、レオンは思わず絶句した。

美しい娘だと思っていたが、ただそれだけでしかなかつた。王宮の華やかさばかり見ていた彼には、初めて出会つたときの印象はみすぼらしく貧相。ただ、その一言だった。それがなんという変わりようだらうか。女は衣装と化粧で化けるといふが、これは化けすぎだろうと内心つぶやく。

シンプルな藤色のドレスに身を包んだ沙綾は、神々しいという表現が一番ぴたりくる。スクエア型に開いた胸元には一粒の濃い青。透ける素材で作られた袖はぴたりと腕を覆い、きゅっとしぼつた帯はふわりと後ろで大きく結んである。華やか刺繡が施してあるわけでもなく、大きな美しい飾りがついているわけでもないが、逆にそのシンプルさが彼女の美しさを際立たせていた。

さらに、なにやらさわやかな香りが漂つてくるではないか。最初は柑橘系の香りかと思ったが、どうやら違う。森のような、夜のような、言葉では表現できない不思議な香りだ。あまり香水というものが好きではないレオンも、沙綾のこの香りは嫌いになれなかつた。

「あの……？」

「あ、ああ。悪い」

一向に扉の前から動く気配のないレオンの耳に、困惑の声が飛び込んだ。はつと我に返ると慌ててよける。目の見えない沙綾のために椅子を引き、待つことしばし。リコが何か言う声が聞こえ、沙綾

が入ってきた。その姿にフイージもルークも目を見開く。

「大変お待たせして申し訳ございませんでした」

「ルーク様、レオン様。お久しぶりでございます」

沙綾の挨拶に続いてリコも挨拶をし、リコが席に着く。沙綾は琳を従えてまっすぐにベッドまで歩み寄った。

「サーヤ、殿？」

「はい。お初にお目にかかります」

ルークの前でドレスのすそを持ち上げ、誰も見たことない不思議な一礼をする。たぶん、彼女の一族独自のものなのであろう。皆が興味深そうに見つめた。そんな視線も気にせずに、沙綾はただルーグがいるであろう方向をじっと見つめる。

「お体の具合はいかがでしょうか？」

「少しだるくて、食欲はあまりないかな」

元気なふりを装つてはいるが、ルークの声には張りがない。沙綾は視線をそらし、床に膝をつく。手探りでその手をとると、脈をはかり腕に触れ、一言断りを入れて首に顔に触れた。

「微熱がありますね。脈も少し乱れています。後で薬を煎じさせていただきますね」

一通りルークの状態を見終わると、ふわりと安心させるように微笑んだ。軽く目礼を残してようやく席に着く。そして改めて言葉をつむいだ。

「大変お待たせしてしまって申し訳ございませんでした。皆様、だいぶお待ちになられたのでは？」

「だつて、サーヤ様はほんとにお綺麗なんですもの」

沙綾の心苦しそうな言葉にかぶさるように笑うリコ。どうやら遅くなつた原因は彼女にあると見て、フイージがあきれたようにため息をついた。

「リコ。姫君で遊ぶとは何事だ」

「あら、遊ぶだなんてそんな……。ただ、お兄様が用意されたドレスに見合つアksesセサリーを搜していただけですわ」

なるほど、確かによくよく見れば沙綾は控えめなアクセサリーをいくつかつけていた。

一番目立つのは首に飾られた深い青のサファイアだが、髪に隠れた耳には小ぶりの花形をしたピアス、髪には真珠の粉がきらめいている。

「……確かに年頃の女性に贈るには物足りないものでしたね。失礼いたしました」

まじまじと沙綾の姿を観察すると、フイージーは素直に自分の非をわびた。リコの見立ては正しく、アクセサリーをつけていたほうがより上品に、華やかに彼女を見せる。

「そんな……こんなに上等なドレスを用意していただけただけで十分です」

恐縮したように沙綾が答えれば、フイージーはただ柔らかな微笑で返す。そして話題を変えるように声の調子を軽く上げ、不機嫌なレオンをちらりとみた。

「さて……レオンがそろそろ空腹に限界を訴えている」とですし、食事にしましょうか」

そういい、自らグラスに水を次いで回る。ルークには気を利かせて白湯を供し、遅い朝食が始まった。和やかな食事の最中、リコは率先して沙綾の世話を焼く。どうやら兄から頼まれた以上に沙綾が気に入つたらしい。あれこれと食事の説明をし、時には手を出して沙綾を喜ばせた。

「お兄様、どうしてサーヤ様を姫君と呼ばれるのですか？」

ふと、リコが何気なく口にした言葉。その瞬間、場が緊張感を帯びる。それに気づいてリコが戸惑うが、穏やかなルークの声が場を和らげた。

「それはね、リコ。彼女が偉大な薬師の一派だからだよ」

「偉大だなんて……そんな……」

かすかに恥じるようにうつむくその姿は愛らしく、知らず緊張していたり口もほつと肩の力を抜く。そして納得したように笑った。

「そうですね、ルーク様を助けていただいたんですもの。サーサ様は本当にすばらしい薬師ですわ」

心からの賞賛にさらに頬を染め、それでもうれしそうに礼を言つ。ふと、その様子を見ていたレオンが何か思い出したように口を開いた。

「そういうや姫さん。無事にルークを助けてもらつたことだし、報酬をはらわねえとな。依頼人は俺だ。俺にできるものならなんでもいつてくれ」

「そうですね、正当な代価を支払わないと……。薬師は慈善事業できるほど甘いものではありませんからね」

フィージもレオンの言葉にうなずき沙綾を促す。当の本人は軽く首をかしげ、困ったように笑つた。ちらりと足元の狼を見れば、狼も同じように当惑しているのがわかる。

「申し訳ございませんが、報酬は受け取れません」

「何だつて？」

思わず聞き返したレオンに、フィージ、ルーク、リコまでが沙綾を凝視した。彼らの中では、正当な報酬を受け取らずに仕事をするという考え方はない。

「私たち薬師の一族は、以前は報酬を受け取っていたらしいのですが……もう、一族も私一人になりました。夕凪と琳と、三人で暮らしていくぶんには、そんなたいそうなお金がかかるわけでもありません。幸い近くの村の方から好意で食料をいただきますし、薬草は畠や山で取れます。なので、お金の必要性があまりないので」「そりはいつもなあ……。一応、契約を交わしたからには何か報酬を支払わないところの都合が悪い」

苦笑とも取れる笑みを浮かべてレオンがいい、それならとフィージが口を開く。

「しばらく滞在していただく間に、何がほしいか考えていただいたらどうでしょう？もちろんお断りになるときは姫君には申し訳ないですが、私たちで決めさせていただきます」

よろしいですか？とフィージが確認を取れば、沙綾よりも先に琳がうなずく。沙綾に物欲があまりないことを知っているためだ。

沙綾は物語があまりないことを知っているためた
「それでいいんじやないか？沙綾は特にほしいものもないだろう？」

「ええ、やつね……。夕凪になにか買つてこつてあげる」

かしら？」

愛らしく小首をかしげ、真顔で言う沙綾。その純粋さに誰か思わず微笑んだ。

少し不自由な思いをさせるかもしないが……」

「1」心配には及びません。お気遣い、ありがとうございます

につこりと至極樂しそうにリコが続け、笑いを誘つた。そんな和やかな雰囲気の中、ただ一人ルークだけはわずかに表情を曇らせてゐる。体調不良というよりも、何か気がかりなことがあるといった風だが、誰にもそれはわからなかつた。

43

朝食が終わり、リコと連れ立つて沙綾は部屋に戻る。他愛のないおしゃべりを楽しんではいるが、琳が少し不思議そうに問うた。

「リコ、なんで沙綾のことをサーサイって呼ぶんだ？」

「それはですね、都に住む人と発音が違うからですよ。なんていうんでしよう？ サーヤ様もリン様も独特の発音というか……私たちには難しいんですね」

リ「自身もどう説明していいかわからないらしい。沙綾も琳も、彼女の名前が自分たちとは違うことに気づいていたので、そう深くは考えなかつた。

コン
コン

会話の切れ間を狙つたように、控えめなノックが響く。沙綾が立

ち上がりとしたところを制し、リコが応じた。

「はい」

そつと隙間から伺うように扉を開け、相手を確認する。フィージからなるべく人前に沙綾を出さないようにといわれていたことと、この美しい客人と自分の会話を邪魔されるのは嫌だと感じたためだ。隙間から伺えば、そこにはよく慣れ親しんだ相手の姿が見える。黒髪なのに、星の光をまぶしたように時折やわらかく輝く髪。ありきたりな自分の蜂蜜色の髪に劣等感を持つているリコにとって、羨ましくもありほんの少しだけ妬ましくもあるが、相手は嫉妬する対象にはならない。なぜなら、尊敬すべき師であり、男性なのだから。

「アンジュー様。どうなされたのですか？」

「あなたがお世話をしている客人にご挨拶をと思いまして」アンジューに沙綾のことを告げたのは自分だ。フィージから言い付かつたことで、しばらく教会に行くことはできない。ただそれだけを伝えた。それはもちろん、尊敬する師であるこの人に心配させたくないという一心で伝えたものだ。フィージの許可はもらつていなかつたが、彼に黙つて沙綾の世話をするのは難しい。ほんの少しの罪悪感はあつたが、彼ならばいいだろうとリコは良心をなだめた。

ふと、何か違和感を感じる。何故兄に黙っていたのだろう？別段兄に話しても構わなかつたのではないか。

けれどその疑問はすぐに深いところに沈み込み、リコは一瞬の後に違和感を感じたこと事態を忘れてしまう。

「ご挨拶、ですか」

リコは少しだけ迷つてから、あわせるだけならば問題ないと納得する。何も、彼女の素性を洗いざらい自分もそこまで知つているわけではないが、話すわけでもない。ただ尊敬する師である神官に紹介するだけだ。

そう言い聞かせ、にこやかに微笑んだ。

「どうぞ、お入りください」

自ら扉を開け、アンジューを招く。アンジューも穏やかな笑みを浮かべて中に入った。そして、その表情が一瞬こわばる。

「アンジュー様？」

「……綺羅……？」

突然立ち止まつたアンジューに疑問を投げかけるように名前を呼ぶが、返事は返つてこない。

小さな咳きは誰の耳にも届かず、ただ驚きとも困惑とも取れる沈黙が落ちているだけだ。

「どうかなさいましたか？」

「……いえ、なんでもありません。ただし……そう、田の光がまぶしくて」

自分でも苦しいいい訳だと思いつつも、唇を滑り落ちた言葉は取り消せない。しかし、リコは言葉通りには受け止めずに笑つた。

「本当に、沙綾様がいらっしゃると一段と光がまぶしく感じられますね」

無邪気で純粋なりコの性格を、今回ばかりは心底神に感謝する。だが、リコの言葉も一概に間違つてはいない。彼の人も、月光の下では女神のように美しかったのだから。

懐かしさがこみ上げてきて、一瞬目の前の景色が消える。そこは深い森の中。円形の広場で、神の娘が踊る。やわらかく響く豊琴の音と高く澄んだ笛の音が混ざり合い、微かな衣擦れの音と娘の手足についた鈴がなる。なんとも幻想的な空間。その神の娘に、自分はお初にお目にかかります。沙綾と申します。この子は琳。怖そうに見えますが、おとなしいので、どうぞ安心ください」

過去にはせた想いを断ち切つたのは少女の言葉。はつとして陽だまりにたたずむ少女を見る。そんな神官に沙綾は安心させるように微笑んだ。その表情に何かを懷かしむように目をすがめ、彼女の前に立ち止まる。

「初めまして。アンジューと申します。あなたに、神の「」加護があることを」

深く一礼をしてリコにすすめられるままに席に座る。その足元に琳が近づくが、アンジューは恐れる風もなくその頭をそっとなでた。「賢い子ですね。銀色の獣は月の神の僕といいます。どうぞ、大切になさつてください」

「ありがとうございます。この子は、私の大事な家族です」「琳がおとなしくなでられているなら何も怖いことはないはずだ。なのに、胸がちりちりする感覚がさつきから消えない」

うまく表情に出ないように隠し、リコの気配を探す。その仕草に気づいたのか、リコが声を出した。

「お茶の準備をしてきますね。サーヤ様もアンジュー様も、どうぞおくつろぎになつてお待ちください」

「こやかに告げ、足取りも軽く部屋を出る。ためらいのないリコになんともいえない感情が胸に宿るが、それを押し隠してアンジューに声をかけた。

「アンジュー様はカーシャ様をお奉りしていらっしゃるのですか?」「ええ。昔は銀歌様をお奉りしていたのですが、カーシャ様の恵み深さに改宗いたしました」

「そうだったのですか……」

「何も、おかしいところはないはず。改宗することはそういうあることではないが、珍しいことでもない。でも、何かが引っかかる」

「沙綾殿は生まれつきお皿が……?」

「いえ、六つのころまではちやんと見えていました。……事故に、巻き込まれてしまいまして」

「それは……さぞかし大変な思いをされたでしょう。今まで見えていたものが急に見えなくなるのは、とても恐ろしいことです。何事もなく健やかに育ったのは、きっと神のご加護があったからでしょう。……お名前の発音から、銀の信仰をなさつていらっしゃるので

「……？」

「ええ……。家族が……一族が皆、銀歌様を信仰していますので……」

月の神とあがめられる銀歌は、長い銀の髪と黎明の瞳を持つといわれている。銀の豎琴を持ち、足元に銀色の狼を従えた男性像で描かれ、そのことから銀歌を信仰するものは銀の信仰をしていくといわれる。

逆に、金の信仰といわれるのは太陽神カーシャを奉つたものだ。波打つ金の髪に湖の瞳を持つ豊満な女神。金色の杖の上に金色の鷹を従えた姿で描かれ、豊穣を司る神だ。

銀歌とカーシャは双子の兄弟とも恋人とも言われているが、それを確かめるすべは誰にもない。

「そうですか……。一族が銀歌様を奉つていたのですね。あなたの姿は、銀歌様に愛されたような姿ですね。母君に似られたのですか？」

「母様……も、銀の髪で……父様が、銀歌様と同じ黎明の瞳で……私は、どちらの血も受け継いで、性別以外は……銀歌様に似ていらっしゃると……」

ぼうっとしたような口調で、沙綾は神官の問いに答える。いつもはこむめるはずの琳も何も言わずに、ただおとなしくアンジュの足元に伏せていた。

昼間なのに、なぜか薄暗く感じる気がする。もちろん、闇に閉ざされた沙綾の瞳に光は映らない。いつも見ている闇と、どこか違う感じがぬぐえずに、それでも答えるのが当たり前のような気がして言葉をつむぐ。

「母様は、巫女でした。父様は、かんなぎ覗でした」

「……母君のお名前は？」

「母様の名前は、綺羅。その名前とのおり、子供の私から見ても……とても、とても綺麗な人でした。優しくて、舞と歌がとてもお上手で……父様は、その隣でいつも豎琴を奏でていらっしゃいました」

暗闇に、幼いころの光景が浮かぶ。

深い森の中、月光に照らされた広場で母が踊る。銀歌にささげるための神楽舞を。その横で、父が豊饒を奏てる。母のために、銀歌のために。

幼かつた自分は、一番前の特等席でその様子をいつも楽しそうに眺めていた。母の躍る姿は好きだつたし、父の奏てる音色は耳に心地よかつた。大きくなつたら母と一緒にこの広場で踊ると。両親は共に優しく見つめてくれていた。

柔らかな月光が、一転して禍々しい紅に変わる。ちろちろと蛇の舌のような炎が舞い上がり、静かな森に悲鳴と怒声が響いた。わけもわからず、炎からただ一心に逃げた。琳の銀色がすすと焼け焦げに黒く染まる。

涙でにじむ視界に父と母を捲すが、見つからず。何か怖いものが迫ってきた。見たこともない銀色の人間たち。銀色は美しく優しい色のはずなのに、人間たちが見につけている銀色はただ恐ろしかつた。炎の照り返しで赤く染まつていたからかもしれない。

「あ……ああ……」

振り下ろされる刃。

舞い散る血と悲鳴。

銀色の髪。

「母様……！」

そこから途切れた記憶。

気づいたときには暗い闇の中にたつた一人で座り込んでいた。

「沙綾殿」

少し低い、聞いたことのない声が自分を呼んでいる。いや、聞いたことのある声。

「あ……」

相変わらずあたりは闇に包まれている。けれども、この闇を自分が知っている。長年慣れ親しんだ、銀歌の住まう闇だ。

「私……？」

「大丈夫ですか？ほんやりしていたかと思ったら、突然悲鳴を上げまして……」

「……アンジュ、様。……何か、恐ろしいものを見ていたよつな……」

まだぼんやりする頭で考えるが、永い一瞬の間に見たものが思い出せない。きゅっとこぶしを握り、頭を軽く振る。沙綾が不安なときはいつも安心させてくれる琳も、今ばかりは何の応えもなかつた。「お待たせしました。……アンジュ様？ サーヤ様？ どうかなさつたのですか？」

明るい声と共に扉が開き、元気よくリゴが入つてくる。一人のおかしな様子に気づき、茶器を置くと慌てて駆け寄つた。

「サーヤ様？ 大丈夫ですか？ 顔色が……」

「どうやら白昼夢を見られたらしいです。お加減がかんばしくないようなので、私はこれで失礼します。リコ、沙綾殿を頼みましたよ。どうぞ、お大事に」

軽く一礼を残して部屋を出ると、アンジュは薄く笑う。そして、間違いないと確信する。

「ようやく見つけた」

まぶたの裏に浮かぶのは、長い銀の髪の女性。いつも微笑みを絶やさずに、誰にでも平等に接してくれた。そう、自分のように穢れた存在にも。彼女こそ、神に愛された女性だ。

「綺羅……」

薄暗い闇の中に、ただ静かに声は消えていった。

想い

5 想い

そろそろ日課になりつつあるノックの音が今日も聞こえた。毎日決まった時間に三回なるノックの音。

「どうぞ」

明るい声で沙綾が声をかけると、ミラとレイの二人が姿を見せた。二人とも沙綾同様表情は明るい。彼女がルークを助けたことを知っているため、最初の険悪さはすでになくなっていた。

「お嬢ちゃん、今日はちょっと待たせたか？」

すかすかと遠慮もなく沙綾に近寄ると、くしゃくしゃとその頭をかき混ぜる。その後決まってリコに怒られるのだが、沙綾はその仕草がうれしくて仕方がない。もう一十を目前に控えていたが、子供のように扱われることが少しだけ心地よい。身近に男性がいなかつたせいか、レイを年の離れた兄のように感じるときがある。

「リン、お土産だよ」

最初は琳を敬遠していたミラだが、琳がとても賢いことに気づくと、いつも何らかのお土産を持って帰ってきた。

柔らかい栗色の髪の毛に、穏やかな若草色の双眸を持つ彼は、その優しげな風貌から女性受けがいい。その人脈を使い、厨房から琳が好む木の実のパンやクッキーをよくもらってきていた。ちらりと琳が視線を上げると、今日のお土産は鮮やかな色をしたかぼちゃのクッキーだと判明する。

「ミラもレイも、いつもありがと」

もう一週間ほど経つだろうか。沙綾が望んだ報酬は、毎日夕凪に手紙といくばくかのお金を渡してきてもらうことだった。もうあまり若くない夕凪に、力仕事は辛い。琳がいるときは琳と沙綾が手伝つていたが、彼女一人ではなかなかはかどらないことも出てくるだ

るつ。よく近隣の村人に手伝つてもらつてゐることから、彼らを雇う代金をルークに請求したのだ。

「今日のお土産は姫君もあるよ」

そういうて差し出された袋には、夕凪からの手紙と足りないと思われる薬草、それから沙綾が好むお茶の葉だった。

「このお茶……」

懐かしいとも感じるお茶の香りに胸がいっぽいになり、沙綾は袋ごと抱きしめる。そしてそつと手紙を開けば、沙綾にしか読めない方法で手紙は記されていた。

昔、まだ目が見えずに苦労していたときに教えてもらった文字を読む方法だ。そつと指でなぞれば夕凪の優しい声が耳に響く。何事も変わりはないこと、ミラとレイがよく手伝ってくれること、沙綾が納得するまで治療に専念するようにと細やかな気配りがあった。

「いつも夕凪を手伝つてくれていたのね。どうもありがとう」

手紙から顔をあげ、微笑んで礼を言う。二人からは当たり前だという言葉が返つてきたが、沙綾にはそれで十分だった。

「夕凪が作るこのお茶、すごくおいしいの」

ためらいがちにお茶でもどうかといえば、真つ先にミラが賛成する。それに続いてレイもうなずき、それならリコを呼ばう、いやいや、どうせなら皆でとたちまち人数が増えた。そうして結局のところ、一時間後にルークの部屋でお茶会という形に落ち着く。今ではルークもだいぶ調子は戻つたが、まだ執務のほとんどは自室のベッドの上で、という状態だ。油断は許されない。

いつたん解散となつた沙綾の部屋は少し寂しく、それが高ぶつた気持ちを逆に落ち着けてくれた。

「琳、夕凪は元気だつて。村の人もよくしてくれるから安心してつて」

「それはよかつた。ルークの容態も安定しているし、もういい口もす

れば家に帰れるな」

「そう……ね。後は薬をしばらくの間置いていけば大丈夫だと思つ

わ。食欲もずいぶん戻つたみたいだし、安静にしていれば大丈夫ね

「なら、今日皆が集まつたときにも言つか」

「それがいいわね。……ねえ、琳。レイとミラに、お別れがいえな
いけれどもこのまままでいいの？」

琳がしゃべることを知らないのは、レイとミラの二人だけだ。

二人とも琳が賢い狼だと認識しているが、誰も琳がしゃべることを話していない。てっきり彼らの上司に当たるレオンが話しているかと思ったが、どうやら何も話していなかつたらしい。

「ふむ……それは少し寂しいものがあるな。彼らにはよくしてもらつていてる。……沙綾は話してもいいと思うか？」

「ええ、夕凪が安心して任せているようだから、何も問題はないと思わ」

「それなら、今日は少し会話を加わるつ」

済ました顔でそういうが、琳がその会話を楽しみにしている」とはその尻尾が証明していた。

一時間後、沙綾が入れたお茶とリコがもらつてきたクッキーでさやかなお茶会が始まつた。レイとミラはルークとも親しく、皆の間に主従関係の堅苦しい感じはない。

「おいしいお茶ですね。さわやかなのに苦味が少ないし、かといって甘すぎるわけでもない。ミントが入つてているんですけど？すつきりした感じがしますね。どこでとれたお茶ですか？」

さつそく知的好奇心もあらわにフィーディングが沙綾に問つた。沙綾は笑つて乾燥した茶葉をフィーディングに渡す。

「自家製のお茶です。私は家でしか飲んだことがないものなんです」「珍しい形ですね。ミントのようにも見えるけれど、それよりももう少し小さいですね。何かのブレンドですか？いや……一種類ですね。これの種はありますか？」

「今はないですけれども、家に帰ればありますよ」

くすぐすと声を出して沙綾は笑い、その横でレオンとリコは呆れ顔だ。

「お兄様つたら……珍しいものを見るとすぐ『何か探りたくなるのは悪い癖だわ』

「たまには研究抜きで物事を考えられねえのか？」

「私は単純に珍しいものが……」

ムキになつて言い返そつとするが、ルークの朗らかな笑い声にさえぎられた。これは完全に分が悪いと黙り込む。悔し紛れにクッキーをほおばり、おやと首をかしげた。

「リコ、このクッキーは誰が作ったものかわかるかい？」

「え？ ええと……たしか、調理場のアクアだったかしら」

小首をかしげてリコが答えると、なるほどとうなずいてもう一枚食べる。どうかしたのかと皆がフイージを注目すれば、彼は笑つてなんでもないと答えた。

「いつも食べているものより甘くないなと思いまして」

「そういうや、フイージは甘党だったな」

ふと思いついたようにレオンがそうつぶやくと、意外だったのか視線がいつせいにフイージに集まる。それに苦笑し、なんとなく言い訳がましく言う。

「頭を使う仕事は、何かと疲れるんですよ。糖分摂取は仕事の一環です」

「それはフイージの好みだらう？ 私もどちらかといつと頭を使う仕事をしているが、甘いものはそんなに食べないからね」

すかさずルークが少し意地悪く言えば、フイージは言葉に詰まつた。言い返す言葉を捜しているうちに、リコの声が割り込む。

「お兄様の負けですね。ほんと、女の私よりも甘いものがお好きなんだから」

あきれたようにそういうと、いつせいに笑いが起こる。ですがに多勢に無勢、フイージはおとなしく降参することに決めた。と、そのとき。控えめなノックの音が耳に届き、場が一瞬にして静まる。

レオンが立ち上がりうつすのをレイが制し、すつと音もなく扉に歩み寄った。その仕草はさすがに剣をたしなむもので、大柄な体躯とは思えない。

ルークの私室といつて帶剣していないことをわずかに悔やむ。が、そんなことは顔に一切出さずに扉越しに声をかけた。

「誰だ？」

「えと……シドです」

少しだけおびえの混じつた幼い少年の声。一同あっけにとられ、ルークが笑つてうなずいた。

「お一人でいらしたんですか？」

「だつて、誰かに言つたら兄上に会えないもの」

シドと名乗つた少年がするりと猫のようにしなやかな動きで私室に滑り込む。まず体を起こしたルークを見つけ、心底うれしそうに笑つた。それからぐるりと見渡し、琳と沙綾を興味深そうに見る。けれど視線は一瞬で、迷いもなくルークの元へ駆け寄つた。

「兄上、田覚められて本当によかつた」

「心配をかけたね」

ぎゅっと抱きつくその姿は、ルークとは似ていない。ルークが明るい金の髪に対してもシドは赤みを帯びた茶色、その瞳もルークの不可思議な碧の瞳とは違う澄んだ空の蒼だ。けれども、まとう雰囲気はさすが兄弟といおうか、幼さが残るがもう少し年を重ねればルークそっくりになるであろう。

「母上が兄上に会つたらいけないって……。病気がうつるからってそんなことないよね？」と熱心に瞳で問い合わせると、ルークはもちろん、とうなづく。シドの少し癖のある髪を優しくなでると、ちらりと腹心のものたちに視線を投げた。真っ先に気づいたのはリラで、席を立つとシドの元へ歩み寄る。

「せつかくシド様もいらっしゃったのだから、どうぞいらっしゃる」
すばやくルークの意味を解し、一番扉から席が遠い席、すなわち自分の席をシドに譲る。彼は黙つてやってきたとのことだったので、

いつ何時誰が入つてくるかわからない。ルーク同様、皆がシドを愛している。この愛らしい少年を傷つけることはなるべくしたくなかった。

「どうビリラの席は沙綾の真向かいに当たるため、シドは珍しい客人を存分に見ることができた。けれど、彼が何か口を開く前に、当人がゆっくりとシドの前に来る。そして以前と同じように不思議な一礼をすると、シドの目線にあわせるように膝を突いた。

「お初にお目にかかります、沙綾と申します。ルーク殿下の弟君でいらっしゃいますね？よく似ていますね？」

にこりと笑顔で告げられた言葉に、シドも他のものも首をかしげた。外見的特長としてはまず一人は兄弟に見えない。それもあるが、何より沙綾は目が見えないはずだ。何を持って似ているのだろうと。「ルーク殿下もシド殿下も、纏う霧囲気と申しますか……それがそつくりなのですよ」

皆の疑問を解消するように沙綾が言葉を紡ぐ。なぜわかつたのかと不思議がる彼らをよそに、もう一つの声が補足するように聞こえた。

「沙綾は目が見えないから、人それぞれ特有の霧囲気とか、氣で人を区別する。外見はまったく似ていないが、確かに一人は兄弟だな」人間とは違う構造をした器官から発せられる声は、少しだけぐもつていて。けれど聞き取りにくいということはない。初めて琳に会うシドはもとより、しゃべることを知らなかつたミラとレイはぎょっとしたように狼を見つめた。そんな視線には慣れた琳は、別段気分を害するわけでもなくその豊かな尻尾を一振りする。

「君の名前は？」

幼さゆえか、恐怖よりも先に好奇心が勝つたらしい。恐々と琳の頭をなでながら、シドが尋ねる。

「この子は琳。私の大切な家族です」

琳の変わりに沙綾が返事を返し、そのあごの下を軽くくすぐる。気持ちよさそうに目を細める琳に恐怖心は消えたのか、シドも同じ

よう」琳をなでた。

「さすがシド様……。リン様になれるのも早いですね」

くすくすと小さく笑いながら、リコがレオンに耳打ちする。レオンも苦笑を刻みながらうなずき、子供は柔軟性があるとひそかに考える。

神に仕える少女はともかく、自分も友人たちも琳がしゃべるたびに驚き緊張したものだ。それを、子供はすんなりと打ち解けている。見習うべきかと思ったが、さすがに年を重ねすぎていると打ち消した。

「リコ、シド様にもお茶を」

「はい」

フィージに言われ、隣室から予備のカップを手に持つてくる。入れたてのお茶をシドに差だし、ついでにクッキーも皿に取り分ける。

「ありがとうございます」

渡されたクッキーをうれしそうに口に運び、蜂蜜をたっぷり入れたお茶を堪能する。その弟の仕草に微笑をもらし、ふと気づいたよう沙綾に視線を投げた。

「そういえば、サーヤ殿はいつまでここに？」

「そろそろ殿下の容態も安定されてきたので、明後日には帰りたいと思います」

「明後日？それはまた早急な……」

「寂しくなりますわ」

口々に言つが、沙綾はうれしそうに、そして少しだけ寂しそうに言葉を紡ぐ。

「夕凪を一人で残していますし、何より……」には私のいる場所ではございません

ふわりと微笑んだその優い表情に、一瞬目を奪われる。どこかに消えてしまいそうな、どんな表情。そんなことはありえないはずなのに、彼女に関してはそういうきれずに。

「サーヤは、帰っちゃうの？」

ふと、幼い声が沙綾を呼んだ。せっかく仲良くなれると思つたのに、シドは見るからに沈んだ表情をしている。沙綾はシドのまだ

小さじとさえ言える手をそつと握ると、ふわりと微笑んだ。

「さつとまたお会いできますよ。お呼びいただければ、いつでも

「本当に?」

「ええ、本当に。琳もシド殿下にお会いしたいといつてますから」「シドは賢い。私を見ても泣かずについた強い子だからな」

沙綾の言葉を肯定し、琳が柔らかな尻尾を一振り揺らす。その仕草にシドはうれしそうに笑つた。

「約束だよ」

「ええ、お約束します」

シドの明るい笑顔と沙綾の穏やかな微笑に、ようやく一同落ち着いたように息をついた。そこですかさずリコが、

「お茶が冷めてしましましたね。もう一度入れなおしますわ」

にこやかにティーポットを手にする。そして、夕方の執務の時間までお茶会は続いた。

雨がしつとと音もなく降つてゐる。森の葉はみずみずしい緑をぬらし、柔らかな土には水溜りが点々とできている。

「もうそろそろ、お戻りになるころかしら」

窓の外を眺めながら、夕凪は小さくつぶやいた。

思えば、沙綾と一緒に暮らすようになつてから彼女とこれほどまでに離れたのは初めてかもしれない。まだ七つの小さな少女が、あつという間に大きくなつた。

「……ひこさまは、立派な薬師になられましたよ」

そつと服の下にかけられたペンドントに話しかける。大振りの金飾りは開くよつて細工され、中には美しい女性の似せ絵が入つていた。

日の光が当たらないせいか、色あせもなくまるで本人をそのまま写し取つたようだ。銀の髪に、銀の瞳。沙綾をもう少し大人にした
ら、きっと瓜一つになるだろう。ただ違うのは、その髪が緩く波打
つていてるところと瞳が輝いているところだけだ。

似せ絵には、もう一人描かれていた。銀の髪に、黎明の空を映し
た瞳。穏やかな表情で女性と寄り添つてゐる。

「綺羅様。皓貴様。今のひいさまを、お見せしたいくらい……」

そこで言葉を詰まらせると、思わず浮かんだ涙をそつと拭い取る。
また元通りにペンドントを戻すと、氣を変えるように大きく被りを
振つた。

ふと、外から微かな物音が聞こえる。こんな雨の日に、まさか森
の奥深くまで物取りでもあるまいしと怪訝な顔で扉を開けた。

「どなたですか？」

そこにいたのは、見知らぬ青年。黒いフードを被り、顔はよく見
えない。けれど、何か違和感を感じて夕凧は眉をひそめた。

「お久しごりですね」

「誰……まさか……」

聞き覚えのある声。穏やかで、一見優しそうに聞こえるがその奥
に潜むのは冷笑。驚愕に目を見開く夕凧に、青年の口元がゆるくつ
りあがつた。

「まさかこんなところにいるとは……。思いもしませんでしたよ」

「お前は……なんでこの場所を知つて？」

怒りと憎しみに、一瞬夕凧の視界が真っ赤に染まる。けれども一
つ息を大きくすい、落ち着きを取り戻す。

「の方の子供は、私がいだきます」

「まさか……沙綾に……」

「ええ。お会いしましたよ。本当に……綺羅にそつくりで驚きました。……憎らしい相手の血を受けた双眸は、濁っていましたしね。これも銀歌様のお導きでしよう」

「汚らわしい！その口で綺羅様と銀歌様のお名前を口にするな！」

はき捨てるように言つと、夕凪はきつい眼差しで青年を見る。しかし青年はそんなことを意に介した風もなく、余裕とも言える表情だ。

「あの子をこんな森深くにおいておくなんて、もつたいないですよ。銀の姫だけが受け継ぐあの力も、彼女の美しさも。すべて、私がもらいます。もう、国王も長くないですからね」

「まさか……すべてお前が……」

「ええ、そうです。ただ、沙綾に会えたことは奇跡とも言える偶然でしたががね。あの晩、銀の一族は絶えたと思つていましたから」血なら犯した罪をなんとも思つていなかるが、どこか喜んでいる風にさえ聞こえる口調。その恐ろしさにめまいを感じ、夕凪はよろけるよひに一歩後ずさる。その隙間を埋めるよひに、男は一步前に出た。

「いいことを教えてあげましょ。あの子は、私が誰か気づいていませんよ。そして、あの子の父親を殺したのは、私です。あの晩、騒動にまぎれてね」

「あ……皓貴様を……」

田を見開き、その事実に硬直する。そんな夕凪を優しいとさえ思える仕草で男は抱き寄せた。その手に、銀の刃を持つて。

「安心して綺羅の元へいってください。沙綾は私が責任を持つて妻に迎えますよ。綺羅と同じあの子を、ね」

「――」

「ほり、と喉元から熱い何かがせりあがつてきた。彼女の血が男を汚す前に、すっと手を離す。まるで人形のように転がった女を無表情に眺め、ただ一度だけ目を閉じた。そのまま、雨の中をゆっくりと歩き出す。

「ぎ……か……や、ま」

残された夕凪は、薄れ行く意識の中で必死に彼女があがめる神の名を呼んだ。悔しさに涙がにじみ、床をぬらす。

「……ぎ、や……か」

どうか、どうか。

愛しいあの子が眞実を知つて悲しみませんよっ。元気よ。

どうか、どうか。

あの子が苦しみを背負いませんよっ。

「…………きり…………た…………ま…………」

今からあなたの元へ逝きます。

ようやく、あなたの元へ。

最期の頼みを聞き届けられなかつた私を、どうか……

思うとおりに動かない指先で必死に胸元を探る。震える手でペンダントを開けると、似せ絵の笑顔を目にふわりと微笑んだ。

そのまま、夕凪の体は動かなくなる。

それからどれくらいの時がたつたのか。音もなく降り注いでいた雨がいつの間にか止み、空には丸い望月がかかっていた。と、月光が地上の一点へ収束する。その光は人の姿を作り、きりきりと輝く影になつた。

「哀れな子よ……」

影は夕凪の頭を優しくなでる。不思議なことに、夕凪の傷口はふさがり流れた血は綺麗に消える。そのままでは、まるで眠つているかのようだ。

「まだそこにあるのか……」

ふと視線を転じれば、ぼんやりとした淡い影が漂つてゐる。その影に手を差し伸べると、影は生前の面影を残した、若い女性の姿にかわつた。

「あの子は大丈夫。私が必ず守るから、安心おし」

涙ながらに何かを伝えようとする女性を安心させるように微笑む。その微笑にほつとしたのか、女はようやく笑顔を浮かべた。そして深々と頭を下げる。

「さあ、お逝き。お前の待ち人が待つてゐるよ」

すっと影が月を指差した。その瞬間、月光が淡い橋の姿に変わる。女性はその橋に向かつて歩き出し、ちょうど真ん中でぴたりと止ま

つた。何か探すようにあたりを見回し、泣き出しそうな表情をする。

「わかつた。一時だけ行つておいで」

影が仕方なさそうに息をついて許可の言葉を出すと、女は至極うれしそうに笑つた。そしてすっとその姿が消える。それを見送ると、影はふわりと微笑んだ。

「あの子は愛さているようだね。かわいい子。お前はまだ安心できないのか？」

「まだまだ、安心なんかできませんわ。あの子が無事に大人になって、私の元へ来る日まで……」

そこには影以外何もいなかつたはずだが、つぶやきに答えるように柔らかな声が響いた。その声を予想していたように、影はそうか、とうなずく。

「あの子が悲しまないよう……あの子が涙を浮かべないよう……」

「ただ、それだけを私は望みます……」

女性の声が消えると同時に、影の姿も音もなく消える。そこに残されたのは、安らかな沈黙だけだった。

ふと、沙綾は人の気配に目を覚ます。あたりの静けさからまだ朝には程遠い時間だろう。なんとなく目が冴えて眼れずに、むくりと体を起こした。

「沙綾? どうした?」

少しだけ眠たそうな琳の声が聞こえるが、それには答えない。ただ何かを探すように起きよろきよろと首をめぐらせむ。

「沙綾?」

さすがに琳も不審に思つたのか、立ち上ると身軽にベッドに登つた。そして真正面から沙綾の顔を見る。その表情はどこか泣き出しそうな、不安な色を濃く映し出していた。

「ばあやが……夕凪が……」

「夕凪が？」

それだけつぶやくと、唐突に沙綾は立ち上がる。迷いもなく窓際によると裸足のままテラスへ駆けでた。その後ろに続く琳は、訳がわからずに軽く混乱する。

「沙綾！どうした？」

「ばあや……」

琳の言葉をまったく聴かずに、沙綾は暗闇に手を伸ばした。すると、その先に淡い光がともる。もしかしたら目の見えない自分にだけ見えた幻想なのかもしれない。それでも、その光が夕凪であるとなぜか直感的に沙綾は気づいた。

「ばあや……。どうしたの、何があつたの？」

知らずこぼれた涙に声がかすむ。けれど光は何も答えることなく、ただふわりふわりと沙綾の周りを漂つた。そして琳の元へ近づく。「琳様。どうか、どうか、ひさまのことをよろしくお願いいいたします。ひさまが泣かないように、どうか、どうか

「夕凪……」

ぺたりと耳を伏せ、琳はうつむく。そうして、理解した。彼女は最期の願いを自分に託すためにきたのだと。

「安心しろ。沙綾は私が守る」

琳の声に安心したようにちかちかと数回瞬き、やがて光は薄くなる。そのまま闇に溶けるように消えた。

「これは？」

夕凪が消えた後に何か光るもののが落ちている。不思議に思った琳が歩み寄り、沙綾の手元に運ぶ。

「何かしら……」

手に触れた感じでは、冷たい硬質のもの。丸くて鎖がついていることから、ペンドントだと気づく。形を確かめるように触れていると、不意にぱかりとペンドントが開いた。

「綺羅と皓貴だ」

「え……？」

開いたペンドントにはめ込まれていたのは、精緻な似せ絵。色あせもなく、当時の姿そのままに。

「母様と父様?」

そつと指で絵の部分をなぞるが、平らな紙に描かれたものは沙綾には感じることができない。せめてもう一度その姿を見たいと願うが、沙綾の瞳は相変わらず闇に閉ざされたままで。

「母様……父様……沙綾は……」

ひつぐ、と小さくしゃくりあげ、それを機に涙があふれて止まらない。大好きな人がどんどんといなくなり、やがて独りになつてしまふのではないかと、恐怖に体が震える。

「沙綾……」

琳はかける言葉が見つからず、そつと静かに寄り添う。無言で少女の横に座り、ひたすらその涙が止まるのを待つ。闇に落ちた沈黙の中、ただ沙綾のすすり泣きだけが響いていた。

やがて啜り泣きが消えるころ、沙綾のかすれた声が微かに響く。

「……明日、朝に帰るわ」

帰つて、夕凪を眠らせてあげないと。

そうつぶやく彼女の瞳に涙はない。だが、傷ついたガラスのようにな双眸はきらめいている。それが哀しみ故のものと知っていても、琳には美しく思えた。その感情を振り払つよつに一つ瞬き、うなずく。

「明日は早いよ。今日はもう眠ろ!」

そつと誘うように沙綾の足元に寄り添い、琳はベッドの上に丸くなつた。その暖かい体を抱きしめ、沙綾は目を閉じる。

眠気は一向に訪れなかつたが、何も考へる気になれずにただ闇を見つめていた。

「……琳、覚えている?」

「うん?」

「初めて、出会った日の事」

沙綾の言葉にふと、想いを過去に寄せた。そうすれば、まるで昨

田のじとのよに思い出せる。確かあれば、まだ自分も少女も幼かつた日のこと。

深い森の中、まだ悲しみを知らずに微笑んでいた少女。初めて彼女を見たとき、琳は驚きに目を見開いた。主人が寵愛を贈った娘であることが一目で知れて。

「あなたはだあれ？」

静かな湖面に花畠が広がり、その中で少女は一人遊びをしていた。色とりどりの花で冠を作り、首飾りを作り、確かに花束を作っていたときのことだつたと思う。

「沙綾……か？」

「うん、そうだよ。あなたはだあれ？」

同じ言葉を一度繰り返し、黎明の瞳でまっすぐに自分を見ていた。狼が怖くないのかと考え、ふと改める。そういえば、彼女は生糰の銀の一族だ。怖いはずがあるまいと苦笑した。

「私の名前は琳」

名乗り、ゆつくりと少女に近づく。少女は怖がるでもなく、りん、と舌足らずに呼んだ。そうして自分の頭に乗つていた花冠を取ると、琳の頭に載せる。その行動はさすがに予想外で、琳は驚いたように立ち止まった。

「りんに、あげるの。お友達だよ」

そういうてにこりと笑つたその顔に魅せられた。もしかしたらそれは自分を創つた主の想いなのかもしれない。それでもいいと、思う。純粋に自分を慕つてくれる少女を好きになつたのだから。自分でそう感じているだけで、それだけで満足できる。

夕暮れまで沙綾と琳はそこで過ごした。少女は無心に花で遊び、琳は時折尻尾を揺らしながらその様子を眺める。ただ、それだけの時間が至極幸せだった。

「そろそろ帰らなきや。りんは？」

「私は……」

ふと、言葉に詰まる。帰る場所はもちろんある。けれど、主人の元へは一人で帰ることができない。かといって、少女の元へ一緒に行くにはまだ早い。彼の御方ならばためらわずに琳を迎えてくれるだろうが、自分がこの子の元へと来るのはもう数年先のはずだ。

「帰ろう?」

そんな琳の葛藤を知つてか知らずか　たぶん、無意識だらう
沙綾はごく自然に手を差し出した。帰ろうと。

それは、ある意味琳にとっては衝撃的だった。主人が帰ろうとい
うのは当たり前のことで、それ以外に琳に手を差し出す存在は今
までいなかつたのだから。

「りん、おうちに帰ろう?」

につこつと微笑み、沙綾は当たり前のようにもう一度告げた。そ
うして、琳はうなずく。

その背に沙綾を乗せて「家」に帰ると、当然のように驚きが待つ
ていた。出迎えた夕凪と皓貴は目を丸くし、ただ一人綺羅だけは微
笑んでいたことを覚えている。

「今日から家族になるわね。よろしく、琳」

「家族?りんも一緒?」

母に抱きつきながら沙綾は期待に満ちた眼差しで綺羅を見る。綺
羅はもちろんとうなずき、家族、という言葉にただ自分はきょとん
とした。

「家族つて、何だらう?」

「りん、ずーつとずーつと一緒にだよ」

心底うれしそうに笑顔を振りまき、幼い少女は狼に抱きつく。抱
きつかれた琳はなぜか湧き上がる暖かい気持ちのままに、少女の頬
をなめた。最初驚いた沙綾は、それがうれしくて楽しくて、きつく
きつく抱きしめる。幼い力ではただ抱きつかれてるようになしか感じ
なかつたが。

それから何年も時がたち、色々なことを見て、経験してきた。悲しみも喜びも一人で分かち合い、家族として過ごしてきた。きっと、沙綾に子供ができる孫ができるても、自分はそのまま何も変わらぬままこの子と共にすこしすのだなつ。そんな確信に近い想いが琳の胸にはあつた。

「琳、ずーっとずーっと一緒によ」

幼い田と同じ言葉が耳に届き、ふと我に返る。気づけば沙綾の頬はまた涙にぬれていた。

「大丈夫だ。私はどこにも行かないから。ずっと、ずっと沙綾の傍にいるから

何よりも孤独を恐れる子供。

あの日、すべてを失つてようやく笑顔を取り戻したというのに。その笑顔を奪つたものに、琳は初めて殺意に似た憎しみを抱いた。すべてを失つた日は、まだ幼すぎて。憎しみよりも喪失感が強く、こんな感情は知らなかつた。

「沙綾、眠りなさい。傍にいるから」「……うん」

塩辛い涙をペロリと舐め、琳はあやすように尻尾を揺らす。ぱたり、ぱたりと規則正しく揺れる尻尾に、いつしか沙綾は眠りに落ちていた。

ちょうどそのころを見計らつたようにふつと光の残像が室内に現れる。

「我が主」

そつと沙綾を起こさないように離れると、琳は床に座る。軽く頭を下げる間に敬意を示す。その頭をそつと撫でると、銀歌は音もなく沙綾の元へ近づいた。

「たくさん、泣いたか……」

すつと沙綾の頬を撫で、腫れてしまつたまぶたに指先を当てる。赤くなつたまぶたは本来の色を取り戻し、幾分か沙綾の寝顔も楽に

なつたように感じる。

「お前をこの子に託したのは正解だつたようだね」

主人の意図がわからず琳は軽く首を傾げるが、言葉を紡ぐことはしない。そんな琳にふつと小さく笑い、もう一度琳の頭を撫でる。「かわいい子。私の愛し子を慰めておくれ。この子はまだ一人で歩くには幼すぎる。……私の元へ来るにも、もつ少し時間が必要だよ」長い永い時を独りで過ごしているんだ。もつ少し待つても、何も変わらないよ。

「我が君……。あの時、私を止めなかつたのはわざとでしょうか？」あの時。初めて沙綾とであつた時、琳は銀歌に内緒で彼女の元へいつたのだ。本来ならばもう数年先に銀歌とともに出会うはずだった少女。主人が寵愛を与えた娘を、ただ一目見てみたかった。

「ふむ……そう思うならば、そうであろうな」

「……はぐらかさないでください」

「おや、ようやつと大人になつたかい？」

「我が主」

からかうばかりで答えをくれない主人に狼が低くうなる。その様

子でさえかわいいと思うのか、銀歌はただうれしそうに笑つた。

「お前が思うとおりに行動してほしかつたのだよ。私の傍にいるだけでは、お前に本当の幸せは訪れないからね。かわいい子。私はお前の幸せを願つてているのだよ」

「……私は……」

戸惑うように視線を揺らめかせ、琳はうなだれる。けれど、銀歌は微笑むばかりで言葉を紡がない。まるで、狼が自分の意思で言葉を紡ぐのをまつてゐるかのように。そんな主人に、狼は意を決したように口を開いた。

「私は、我が主を敬愛しております。私を創つてくださつたそのことを、何よりも感謝しております。そして……沙綾にめぐり合わせてくださつたことを、それ以上に感謝しております」

「いい子だね、琳。そう思つてくれることが、何よりもうれしいよ。

……私はまだ、沙綾を愛することができないでいるからね。私が愛したのは綺羅であつて、沙綾ではない。……綺羅と私の血を受け継いだこの子を愛おしいと思う。けれども、それだけなんだよ。……琳、私の分以上にこの子を愛してあげなさい。いつか、この子が私の元へくるそのときまで。……もしも、私がこの子を愛して上げられなかつたとしても……お前の愛情は、きっとこの子の力になる」寂しそうに告げる銀歌。その葛藤と悲しみを感じ取り、琳も切ない思いが胸によぎる。

生まれたときから自分のものになるはずだった彼の娘。確かに自分の中になつたはずなのに、彼女もすべてが自分のものだとそういつたはずなのに、解つてしまつた。彼女は自分のものであつて、自分を愛していいないと。

正確にはわからない。けれど、自分以上にあれを愛しているのだと、解つてしまつた。彼の娘が自分に向ける愛情は、あれに向ける愛情とは違う。違いすぎる。それでも、彼の娘を愛している。

「私は、自分が神であることを心底呪わしいよ」

神でなければと何度も願つただろうか。何度も、人の身にならうかと思つただろうか。だが、それはできない。してはいけないこと。だからせめて、彼女の血を欲した。自分と愛しい娘の血を受け継いだものならば、愛せるだろうかと。

けれども、まだ愛する娘の面影が離れずに。死してなお、自分の中にならない彼の娘。それでも、娘が愛おしくて。いつか、少女が大人になつたならば、自分は少女を愛することができるのか

「我が主……私は……」
「何も言わなくていいよ。ただ……私のかわりに愛しい子を愛しておくれ」

「仰せのままに」

銀歌の指先がもう一度沙綾に触れ、そのまま琳の頭に触れる。頭をたれた狼を優しく愛撫し、銀歌の姿は夜の闇に消えた。

銀歌が完全に見えなくなると、琳はするりと沙綾の腕の中にもりこむ。そのぬくもりを感じると、わずかながらこぼつとする自分に気がついた。

「沙綾……。ずっと、ずっと傍にいるよ」

たとえ、愛するこの子が我が主の元へ行いつても。

6 事件

翌日の早朝。まだ朝もやが立ち込める森を一頭の馬と一匹の狼が先を急いでいた。はやる気持ちを抑え、濡れた地面に足をとられないうに急ぐ。

見慣れた家が見えてきた。一週間程離れていただけだったが、なぜだかひどく懐かしく思える。

「夕凪……？」

玄関先に倒れている人影。その姿が見えたわけではないだろうが、沙綾は反射的に走り出した。その前を琳が走り、扉に着く前に沙綾の足を止める。そして彼女が触れるその前に、琳はすばやく夕凪の体を見回した。

「沙綾……」

「ばあや……」

琳が名前を呼ぶと沙綾は弾かれたように夕凪にすがりつく。昨夜流しつくしたと思った涙は、また溢れ出す。

「ばあや……」

冷たくなったその頬にふれて髪を撫で、優しく体を抱きしめる。沙綾より少し背の高い老婦人は安らかな表情だ。

「綺麗なもんだな」

二人を気遣つてかゆつくりときたレオンは、夕凪を見てそういうた。その穏やかな表情を見ていつたのか、清められたその体を見ていつたのかはわからない。ただ一度、夕凪に死者への礼を尽くす。

「沙綾。夕凪を眠らせてあげよう

「……ええ」

うなずき、夕凪を抱き上げようとしたがさすがに小柄な少女には無理があった。たらを踏んだ沙綾をレオンが背中から支え、かわ

りにひょいと抱き上げる。

「ありがとう」

朝早くに黙つて出て行こうとした沙綾と琳に気づいたのは、レオン一人だけだった。正確には偶然廻で出会つただけだったのだが、二人の表情から何かに気づき、無言で同行してくれた。その優しさが沙綾にはうれしかった。

「庭に」

言葉少なにそう告げ、琳と沙綾が先導する。そこは、沙綾が好んでよく眠つていた場所。大きな大木の下に。琳がスコップをもつてくると、レオンと沙綾は無言で穴を掘り始めた。琳も何も言わずに手伝う。そうして、大人一人入れる位の穴が掘り終わると、レオンがそつと壊れ物を扱つようにな夕凪を寝かせる。

「ばあや……ありがとう。お母様とお父様によろしくね」

震える声でつげ、その額に唇を落とす。名残惜しむように一度頬を摺り寄せ、沙綾はきびすを返した。一瞬迷つてからレオンがおいかけ、それを見送つてから琳はじつと夕凪を見つめる。眠つているようなその表情に、心から銀歌に感謝した。

「絶対、あの子を一人にしない。私が守る」

低くそうつぶやくと、沙綾の足音が聞こえた。振り返れば、夕凪が大好きだったあかるい色の花を腕いっぱいに抱えている。

「ばあや、大好き」

もう一度夕凪にキスをすると、沙綾は夕凪の体全体に花をかぶせていく。花だけでは飽き足らずに、雪のような花びらを降らせて。あふれる涙をそのままに、優しく土をかぶせていく。やがて夕凪の姿が完全に隠れると、その場にへたりと座り込んだ。

「琳……どうしようね」

まだ、夕凪との思い出が残る場所にいるのは辛い。庭のあちこちに、家の全てに楽しかった思い出が残つていてるのだから。

ふと、地面についた手に柔らかな花びらが触れた。そつと壊さな

じように指先で触ると、ひらひらと柔らか感触。花弁は細かくた
くさ。きつと色は鮮やかな黄色だ。

「タンポポ……」

種が飛んだのか、もう時期も終わるところのにけなげに咲いてい
た。

「タンポポは……薬にもなるからって……」

まだ幼いころ、タンポポの柔らかな花が好きでたくさんつんだこ
とがあった。それを夕凪は優しく諭した。

『ひいたま、タンポポは薬にもなるとてもすばらしい花なんですよ。
かわいらしい花ですが、無闇とつんではいけません』

せつかく喜んでもらえると思ったのにじょげていたら、夕凪の
柔らかな手のひらがほほに触れる。そつと慈しむように自分のほほ
をなで、こつりと額をあわせた。

『でも、夕凪のために持ってきてくださったのですね。ありがとうございます。
花壇に植わっている花も美しいですが、やっぱり自然
に咲く花は力強く輝いていますね』

「ばあや……」

くつと唇をかみ締め、紗綾は優しくタンポポの花を指先でなでる。
そして硬く目を閉じ、あふれる涙をこらえた。すると、戸惑った気
配のままレオンがそつと近づいてくる。地面に立ち籠をつき、紗綾
の頭にこわごわと触れた。

「姫さん……泣きたいときは思い切り泣いたらいい。そんな……辛
い顔してこらえるな」

健気に涙を飲み込むその姿は、母の姿を思いださせる。父が長く
家を空けるときは、必ず必死に涙を飲み込んでいた母。幼いながら
も、自分は母にこんな顔をさせてはいけないのだと思つたことがある。

姉は女で、男は自分と父しかいない。だから、早く母の涙を受け
止められるようにならなければいけないと、やつ思つた。

「コソ」

尻尾をたらしていいる狼の名前を呼び、レオンはじつと澄んだ瞳を見つめる。そして琳がうなずくのを確認すると、足音もなくそばを離れた。

「紗綾」

「り、ん……夕凪、も、ば、ばあやも……ひ、ひ……ふつひ、ああ
つ！」

琳の首にしつかりと抱きつき、艶のある毛並みをぬりす。涙を流すことができない狼は、ただじつと紗綾が抱きつくに任せていた。声の限りに涙を流し、その涙が泣きじやくりに変わること。ふらりとレオンは戻ってきた。その手には湯気のたつた暖かいお茶。

「勝手に作らせてもらつたぜ」

少しだけ申し訳なさそうな顔でそういうと、田を真っ赤にした紗綾にカップを渡す。かすれて声が出せないのだらう、恥ずかしそうにうつむいて一口飲んだ。

「落ち着いたか？」

カップの中身が半分ほどになるころを見計らつて、レオンが言葉をつむぐ。ほつとため息を漏らし、紗綾は顔を上げた。

「ええ……」「めんなさい、ありがと」

「姫さん。行く場所がねえなら、城にこないか？ ルークもまだ万全つてわけじゃねえし、一度……陛下に会つてもらいう」

「陛下……国王陛下に？」

「ああ。それに……姫さんをもしかしたら巻き込んでしまったのかもしれねえしな」

ぼそりとつぶやくようこいつと、ちらりと横田で狼を見た。琳はその視線を受け止め、思案する。

「そうだな。沙綾、しばらく王宮にこもれ。」「は……もしかしたら、危険かもしない」

「どうこうこと？」

「狙われたのは、夕凪じゃなくて沙綾だつたのかもしない」

琳が告げた事実に、沙綾ははつと息を呑む。こんな深い森の中に

来る人間は、迷い人かよほど醉狂な人間かいに来た人物以外いない。琳が何ものか知っているものはいないので、琳は除外される。夕凪か自分がどちらかといえば、限りなく自分に可能性が高いだろう。

「そう、ね。……王宮へ」

沙綾がうなずくと、どこかほつとしたような複雑な表情でレオンは立ち上がった。一人をおいて先に馬の元へ戻る。

「準備もあるだろ？し、先に戻つてフィージに伝えておく」

「お願いします」

レオンの表情には気づけずに、琳と沙綾はレオンを見送った。

それからしばらくの後、王宮へついた一人は厩でレオンに迎えられた。初めてきたときと同じように人目に付かない通路を通される。待っていたのは、フィージとルークの二人。

「レオンから大体状況はききました。今日はお疲れでしょう。どうぞゆっくりお休みください。部屋は王子の向かいに用意させていただきました。隣はレオンと私の部屋になります。ここならば賊の進入はまず無理です。安心してください」

「……お心遣い、ありがとうございます」

静かに一礼を返すと琳を伴い沙綾は部屋を出た。その姿を見送り、三人は深刻な顔を付き合わせる。

「ルーク。陛下とあわせたほうがいいと思う」

「父上に？……そう、かもしだれない。フィージはどう思う？」

「……彼女には真実を知る権利があります。そして何より、夕凪を殺害したのは間違いなくあの夜の出来事が関係しているでしょう。あの晩の出来事は、陛下が一番詳しいはずです。しかし……陛下の容態を考えると……」

二人の意見に瞑目し、ルークは浮かない顔でため息をつく。父と直に話することはたぶん必要だろう。父には話をしなければなら

ない理由がある。しかし、その理由を知ったとき彼女はどう思うか。「私は……父上に会つていただくべきだと思う。しかし、フイージの言つとおり父の体調はおもわしくない。無理にならなければいいが……」

「それなら、私が陛下にお伺いいたしましょっ」

悩むルークにフイージは告げる。本人が許可を出せば確かに沙綾は確実に彼に会つことができるだろ。一瞬瞑目し、ルークはうなずいた。

「そうだな。後で頼むよ」

彼女は、己の父が犯したおろかな過ちをどう思つだろ。か。

軽蔑するか、憤るか。 絶望するか。

「もう、過去のことですよ」

ルークの気持ちを察し、フイージが言葉を紡ぐ。確かにそれは事実だ。けれども、それは一部の人間にとつてのみ。

「……私たちにとつてはな」

重苦しい沈黙が降りたとき、扉がたたかれる音がした。弾かれたようレオンが扉に向かい、声をかける。

「誰だ？」

「リコです」

なじみのある声にほっと息をつき、レオンは扉を開けた。簡単な食事の載つた盆を持つたりコは、兄と王子の表情に首をかしげる。リコはまだ何が起きたのか知らない。そして、この先の話を彼女はまだ知るべきではない。そう判断すると、誰かが口を開くより先にフイージが言葉を紡いだ。

「リコ、向かいの部屋にサーサ殿がいる。昨晩、サーサ殿の乳母殿が亡くなられた。何か温かい飲み物を持っていてあげてくれないか？」

「まあ……すぐに行きますわ」

兄の言葉に目を丸くし、リコは一礼をして部屋を飛び出す。純粋に沙綾が好きなりコは、彼女が悲しんでいるのを知っていてもたつ

てもいられなかつたのだろう。扉が閉まる音を聞いてから、フイージは隣室へ消えた。少ししてからお茶の乗つた盆を持って戻つくる。

「陛下にお話を伺つてからどうするか決めましょう」

フイージの一言でその話は打ち切りとなつた。あまり明るいとはいえない表情で、フイージがお茶を入れる。

「王子、少し食べておかないと……。まだあなたの体調は万全ではないのですから」

「……そうだな。私が倒れてしまつたら、彼女も危ないだろう」
あまり食欲はないのか、浮かない顔でそれでもパンを一つつまむ。幸いチーズがたっぷり練りこんであるパンはルークの好物だった。それがせめてもの救いと思いながら、一口一口。飲み込んだ瞬間、ルークの手から食べかけのパンが落ちた。

「ルーク？」

最初に気づいたのはレオン。しかし、気づいたときには遅すぎた。顔色をなくし、椅子から転げ落ちるように床に倒れる。

「ルーク！」

「王子！」

フイージとレオンの悲鳴が重なり、それを見計らつたかのようにな扉が勢いよく開いた。色白の貌をむらむら蒼白にし、シドが駆け寄る。

「兄上！」

「シド様？なぜここに？」

「姫さんを呼んでくる」

シドをフイージに任せると、レオンは開いたままの扉を飛び出す。問答無用で向かいの扉を開ければ、リコと沙綾が不安そうな貌で待つていた。

「ルークが倒れた。たぶん何かの毒物だと思うんだが……」

「すぐに行きます」

先ほどのどこか魂の抜けたような表情から一変し、沙綾は薬袋をもつてルークの元へ駆け寄つた。先導する琳に従い、ルークの横に

座る。脈を取り、顔や口内に触れるうちに沙綾の顔色が変わった。

「何を食べたのですか？」

「これを……」

フィージが差し出したパンを受け取ると、『おいをかぎ軽く口に含む。その瞬間吐き出し、手探りで手繻り寄せたお茶で口をすすぐ。同様にルークの口にお茶を含ませ何度もすすぐだ。

「水と桶を一つください。それから急いでベッドを整えて。どなたか、殿下の口を十分にすすいでください」

ただ見ていてことしかできない彼らに指示を出すと、自分は薬袋の中身を床に広げる。一瞬の迷いもなく数種類の瓶を選び、琳が運んできた未使用のカップに中身を入れた。

「水だ」

急いで持つてきただろう。ポットの周りがまだ濡れていたがそんなことはまったく気にもせずに受け取る。少量の水をカップに注ぐと、袋の中から細身のナイフを取り出した。

「姫君？」

真っ先に気づいたフィージが訝る横で、沙綾はためらいもなく手のひらを傷つける。流れ出る赤い液体をカップに落とし、さらに水を注いだ。

「どういってください。一刻を争います」

フィージとレオンが守るようにルークの隣にいる。彼らに険しい視線を投げれば、氣おされたように道を開いた。ルークを前にして、沙綾は一瞬ためらう。けれどそれは瞬きする間のことだ、すぐにカップの中身をあおった。

「待て」

沙綾の意図を察し、レオンが制止をかける。しかしそれを無視する形でルークに薬を流し込み、無理やり飲ませる。その瞬間びくりとルークの体が跳ねた。すかさず体をひっくり返すと、頭を支えて桶を口元にあてる。あまり食べていなかつたのだろう。嘔吐は短く、すぐに終わった。苦しそうにあえぐルークの背中をなだめるようにな

たたき、そつと首筋の辺りを指圧する。すると、もともと意識の混濁していたルークは、すぐにまた気を失った。

沙綾の手際のよさに誰も何も手出しえできずに、ただ見守るだけだつた。どこか苦い表情をしているレオンとフイージに琳は気づくが、素知らぬふりで沙綾のそばに控えている。まるで、何かあつたらすぐに対応するようのこと。沙綾はそんなことにはまったく気づかず、「当たり前のよう」に告げる。

「もう大丈夫です。あとは水をたくさん飲ませて休ませてください。その間に薬を作りますので」

ほつとしたように沙綾が言うと、全員の視線がいつせいに彼女に集まつた。そして、その視線の意味に気づく。

恐れ。

不安。

わざかな畏敬。

自分たちとは違う生き物を見つめるその視線にさらされると、何度も何度も経験してきた。

沙綾は流れ出る血を止めることもせずに、ただ静かに一つ瞬いた。怒りも悲しみもない。わざかな諦めが光を失つた双眸に浮かんでいる。

皆が何か問おうと伺つていたが、湖面のよつに広いだその姿に何も言わずにリコが立ち上がる。

「どれくらい水を飲ませたらよろしいのですか？」

「ティー ポット一杯分を」

「わかりました」

ぐつたりと意識を失つているルークの頭を膝に乗せ、汚れた口元を丁寧にぬぐう。先ほどよりも格段に顔色のよくなつた彼にほっとし、リコは慎重に水を飲ませた。

「沙綾。口をすすぎなさい」

「……ええ」

心配そうな琳の声に、沙綾は無理やり微笑んだ。琳が押しやつた

ティーカップで口をすすぐが、顔色があまりよくない。

「姫君。王子を助けていただいてありがとうございました。申し訳ございません、私たちは何をすべきか、あなたが何をされているのか何もわからないのです。一瞬でも疑つたことをお許しください。手のひらの傷は大丈夫ですか？」

「傷はたいしたことありません。大丈夫です。……」ちらりこそ、取り乱してしまつて申し訳ございませんでした」

いくら一刻を争う事態とはいへ、一人で急ぎすぎた。そのせいで、余計な不安を彼らに与えてしまつたことは薬師として恥ずべきことだろう。軽くうつむいて唇をかみ締め、後悔の念にまぶたを閉じる。けれどそれも一瞬のことと、顔を上げた沙綾はいつものとおりだった。

「薬を作りますので、殿下を休ませてください。それから……部屋を……申し訳ございません」

「そんなこと気にしなくていい。それより、姫さんの体は大丈夫なのか？」

「……先ほどの薬は、嘔吐を促す薬です。少量でも強い力が働くので。……大丈夫です。少し休めばよくなりますから」

「……そうか」

本人にそういうわれてしまえばレオンに紡ぐ言葉はなくなる。心配そうな顔でうなずき、それでも沙綾に言われたとおりルークを抱き上げ隣室に運んだ。その後ろにリコと促されたシドも続く。

「姫君もどうか、隣室へ」

「え、え。でも……もう少しだけ」

「どうやら、立ち上がるのも辛いらしく。顔色が一段と悪くなり、呼吸がわずかに荒い。」

「先ほど王子に飲ませた薬は、本当に嘔吐を促すだけのものですか？」

不意にフィージが沙綾に問いかける。詰問するようではないが、どこか厳しい口調。嘘は許さないという意志の強さに沙綾の体は知

らず震えた。

幾度か唇を湿らせて、何かを探すように瞬きを繰り返す。

「…………正確には、違います。薬となる毒を飲ませました。それによつて嘔吐します。……薬は、今の薬だけではなく、すべての薬は、量を間違えれば簡単に人を死に導きます。私たちが薬と呼ぶものは、すべて毒になりうるのです」

世間一般に流布している常識には、薬が毒になるという発想はない。それは限られたごく一部の人しか知らないこと。それが悲しく、もどかしく、沙綾は唇をかみ締めた。

「…………わかりました。あなた御自身はどうなのですか？」

「私は…………耐性がありますから。少し休めばすぐに治ります。…………怒らないのですね」

「怒る？なぜ？」

「結果的に薬になるとはいえ、私は大切な殿下に毒を飲ませました。それを、怒らないのかと」

目が見えているはずはないのに、まっすぐに自分を見つめる少女。今までただ綺麗としか認識していなかつたが、その瞳の奥に暗い闇があることに気づく。その闇はまだ表に出てはいなかつたが、いつか噴出すことを少女は解っているのだろう。だから、ぎりぎりでそれを抑えている。

「あなたは間違えなかつた。王子は生きている。その事実があるのに、何故怒るのですか？」

子供を諭すように笑いを含んで告げると、沙綾がまじまじとフィージを凝視した。その視線には、不思議でたまらないと表情いつぱいに告げられ、思わず微笑んだ。

「あなたは、一度王子を助けてくださいました。そして、自ら毒であると知つてゐる薬を含んで王子に飲ませてくださいました。そんなあなたに、礼を言えども責めるべき言葉などありません。ありがと「う」やこます」

「…………どうぞ、殿下の下へ。私もすぐ参ります」

沙綾は戸惑つたようにファイージを見つめ、やがて視線をはずす。うつむいたまま促せば、否といわずに彼は部屋を出た。

静かに涙をこぼす沙綾に寄り添い、琳は血の流れ続ける手のひらを舐める。ふしきと血はすぐに止まり、それでも舐められるくすぐつたさに、幾度も響くファイージの言葉に少女は微笑んだ。

「琳……初めてだね」

「そうだな」

毒を飲ませたと正直に言つて怒らなかつた人は。

毒になると知つても礼を言われたことは。

「今までずっと嘘をついてきたけど、あの人は怒らなかつた。私は、「ごく嬉しいの」

「苦しかつただろう?」

「すごく。でも、本当のことと言つともっと苦しいから」

何度も人を助けてきた自分の業。それでも、真実を知ると皆が必ずといっていいほど怒りを少女にぶつけた。たとえ助かつても助からなくても。

助かれば偶然とみなされ、助からなければ毒をもつたと怒鳴られ。助かる見込みがあつても、彼女の作つた薬を飲ませずに助けられなかつたこともある。それもすべて彼女の責任にされた。

やがて少女は嘘をつくことを覚えた。正確には、嘘ではなく真実すべてを話すことを止めた。そうすれば、誰も怒らない。だれも怒鳴らない。けれど、そのことが激のように心にたまつていく。人を救うことができて嬉しいはずなのに、なぜか苦しくて苦しくて。

薬師は、裏を返せば毒を扱う生業。加減を間違えれば確かに誰でも簡単に殺すことができるだろう。事実、一族を抜けてそのまま生業を営むものもいる。けれど、覚えておきなさい。私たちの薬は命を救うもの。決して命を奪うものではないことを。誇りを持ちなさい。薬師の一族であることを、命を助けることができること

幼いころに何度も何度も聞かされた長老の言葉をふと思い出した。

を

そうして、自分はその言葉のとおりに誇りを持って仕事を続けてきた。だから、きっと彼はありがとうといつてくれたのだろう。

「さあ、もう一つ薬を作ろ」

「ええ。救けるために」

薬師として恥ずかしくない仕事を完遂するために。

沙綾が隣室へいくと、皆が不安そうにルークを見守っていた。顔色はだいぶよくなつたとはいえ、容態はかんばしくないのが明らかにわかる。

「お待たせいたしました」

沙綾自身もまだ顔色はあまりよくなかったが、背筋はぴんとのび、その口調にはためらいが一切ない。どこか神々しいとさえ感じるその姿に、皆がしらずに安堵する。

沙綾はティーカップに入れた薬をそつとルークに飲ませた。何事もなく嚥下してくれたことにほっとし、一人ひとりを見つめるようになく首をめぐらせる。

「もともと体力のあるお方です。きっと、今夜には目覚めるでしょう。今はゆっくりと休ませてください」

「それなら、場所を変えましょう。リコとシド様に伺いたいことがあります」

フイージがそう告げ、先導して歩く。その後にぞろぞろとついていくと、シドが心配そうに後ろを振り返った。それに気づいた琳が、沙綾の隣を離れてシドの横につく。

「大丈夫だ。沙綾の薬はよく効く。すぐに目覚めるよ」

「……うん」

言葉少なにうなづき、琳のふわふわした頭を軽く撫でた。先に待つていた沙綾に足早に追いつくと、きゅっと手を握る。

「兄様を、助けて」

「必ず。お約束します」

沙綾の変わらぬ笑顔にほつと安堵の息を漏らし、部屋の外で待っていた皆さん追いついた。

フィージにつれられて、彼の部屋へといぐ。思い思いの場所に皆が座るのを待ってから、フィージが口火を切った。

「シド様。どうしてあのとき、王子の部屋へいらっしゃったのですか？」

「母様が……話しているのを聞いたんだ」

それは、偶然のことだったという。ルークのことを聞きに母の元へ訪れると、中から何か話し声がした。低くてもう一人の声はよく聞こえなかつたが、確かに母はこう言った。

「これでルークは終わりかの。前の眠り毒は失敗したが、今回おんしの渡した毒は確かよの？」

「……も、いません……かです」

ただ一言それしか聞こえなかつたが、それで十分だつた。常々兄を嫌つていた母が、とうとうここまですることは思わなかつた。そして、眠りの病も母が仕組んでいたことを知り目の前が暗くなる。しかし、ここでぼんやりしている時間はない。急いで兄の下へ向かわなければ。

「急いできたけれど……結局間に合わずに……」

唇をかみ締め、シドは必死で悔し涙をこらえる。

母はどう思つているか知らないが、自分は兄が大好きで、王位なんていらないと。そう思つてはいる。けれど、自分の意志が弱いために大切な兄を危うく死に追いやろうとしてしまつた。それが悔しくて仕方がない。

「その証言をしてくれただけで十分間に合ひつ。ルークを助けられる」

「レオン……本当に？」

「ああ、もちろんだ」

自信あふれるレオンの言葉にシドは嬉しそうな笑みを浮かべた。それと対照的に、リコの顔色はどんどん青ざめていく。小刻みに震える手をしっかりと組み合わせ、神に祈るように目を閉じた。

「つ」「。言いたいことはわかるね？」

「……はい、お兄様」

フィージと同じ澄んだ紅茶の瞳を涙で潤ませ、リコはこぶしに力をこめる。そうしなければ、声が震えてしまいそうだつたから。「私に食事を持つていいと頼んだのは……アンジュー様です」やはり、とフィージとレオンは顔を見合させ、シドは驚きの眼差しをリコに向ける。沙綾は一度だけ会ったことのある神官を思い出した。

自分にあつたとき、何かに驚いていた声。何も言わなかつた琳。わずかな空白。

「神官と王妃に会つ必要があるな
けれど、証拠がありません」

ただあるのはシドが聞いたといつ会話をリコが預かつた食事。どちらも知らぬと言わればそれまでだ。

「…………」

完全に手詰まりになつてしまつたとき、今まで黙つていた琳が口を開いた。

「そもそも、何故ルークは王妃に狙われるんだ？」

「それはもちろん、ルークを廃してシドを王位につけたいからどう？」

何を当たり前のことを、とレオンが言つと、そうではないと琳は首を振る。

「それは解る。単純な構図だ。古くから慣わしがあるのだろう？それを決めるのは誰だ？」

確かに、初めてレオンに会つたときに聴いた言葉。

「生まれた王子が一人以上ならば、そのうち光をまとつものが次の国王になる。それを決めるのは三人の神官か、現国王陛下です」

しかし、今は神官の数が足りないと聞いている。ならば、王妃は何故ルークを狙うのか？

「つまり、王妃はルークが次代の国王になると既に知つてゐること

になる。だからそれを覆すためにルークを執拗に狙う
どうやって王妃はそれを知ったのか。答えは簡単だ。

「国王陛下自らがそれを王妃に教えたのでしょうか。既に公布されていると思われているかもしません。たぶん陛下は、この騒動を知りません。もしくは、知っていたとしても何も発言権を許されていないか……」

フィージはそこまで言つと口をつぐむ。それ以上は、臣下として口にしてはいけない言葉だ。

「夕凪が殺されたのは？」

琳が問いかける。ルークが狙われる理由は解った。しかし、まったく関係のない夕凪が殺されたのはどういうわけか。たぶん、王妃か神官が狙つたもので間違はないだろう。しかしその理由がわからぬ。

「夕凪というより、姫さんを狙つたんじゃないのか？」

ルークを目覚めさせた薬師がいなくなれば誰にも王子を救うことできない。けれど、沙綾がまだ城にいることを知らずに訪れたのならばつじつまは合ひ。

「陛下に、ルークが次代国王だと書面をもらおう」

そうすれば、ルークも沙綾も安全になる。

そうレオンが提案すれば、フィージが何か思案した。そうして、しばらくの沈黙の後うなずく。

「そうですね。それが一番確実な方法のようです。シド様、リコ。王子を頼みました」

もしかしたら、眠つてゐるルークが危ないかも知れない。

そう暗に告げ、フィージは立ち上がった。

「行きましょう。どうぞ、姫君も一緒におりでください」

「私も？」

ルークに付き添つてゐるべきだと考えていた沙綾は、フィージの提案に瞬いた。そして、レオンの言葉を思い出す。国王に会つてほしいといった彼の言葉を。

「……わかりました」

これ以上、何事も起きないよう」。

これ以上、彼のお方を危険にさらさないよう」。

これ以上、彼のお方を傷つけないよう」。

それぞれの思いを胸に。

7 過去

朦朧とした意識の中、うつすらと目を開ける。常に視界は悪く、いつも見上げる天井にも黒い染みが点々と散らばっている。

「……」

口を動かしてももれるのは乾いた吐息だけ。一言一言話すだけでも、疲労に意識がゆがむ。

「アッシュ。愛しい人。あの子が来るわ」

ふわりと金色の光が唐突に現れた。光は豊かな金髪にかわり、やがて人の形を作る。

ミルクティーのような色をした肌に波打つ金髪。薄く透ける紗の布を纏つた姿は南にいるという伝説の舞姫を髣髴させる。

金色にきらめく爪先がアッシュの胸元にそっと触れた。その途端、濁つた双眸に強いきらめきが灯る。

「カーシャ……」

「あの子と話をしたいのでしょうか？」

「ああ……。老いぼれの最期の懺悔を……聞いてもらいたい」

目を閉じ、少し疲れたように吐息をこぼす。その様子を包み込むような愛情と、同じくらいの哀しみ、そしてほんの少しの憐れみをこめて見つめる女。母のように、恋人のように、妻のように、娘のように。

「あの子が来るまで、もうしばらく時間があるわ。少しあやすみなさい。私は、もう一人の愛しい子に会つてくるから」

「すまない……」

「謝るのはなしよ。それでいいと、私が願つたのだから」

そつと細い指先でアッシュの双眸をふさぎ、いつくしむように軽く頬を撫でる。そうすれば、年老いた男はすぐに健やかな寝息を立

て始めた。

「愛しい人。あなたは最期まであの子を想うのね」少しだけ悲しみの混じった眼差しで数瞬見つめ、ふわりとその姿は搔き消えた。

まるで死んだように眠る兄を、弟は泣きそうな貌でただ見守っていた。

大好きな兄。いつも優しく、忙しい時間を割いては自分を構ってくれた。母や周りの思惑なんてどうでもいい。ただ、自分は兄と一緒にいたかった。それだけを願った。

「シド様。必ず、ルーク様はお目覚めになりますよ」

きつくかみ締めすぎて唇は色を失っている。握り締めたごぶしも白くなり、そのあまりの痛々しさにリコは思わず手を差し伸べた。強く握られすぎたごぶしをそっと開き、かみ締められた唇を開かせようと声をかける。

「……うん」

心細げな表情でうなずき、また視線をベッドに戻した。と、その視線の先が窓辺に変わる。つられてリコも窓を見れば、見たことのない金色の鷹が一羽。

「まさか……！」

あわてて窓を開ければ、鷹は音もなく入ってくる。何度かルークの周りと回ると、その枕元に翼を休めた。

「カーシャ様の御遣いでいらっしゃいますか？」

「そのとおりだ、巫女よ」

恐る恐るリコが鷹に問えば、鷹は明確な答えを返す。崇敬する神の一部とも言える遣いを前に、ため息のような吐息を漏らす。手を組み、感謝の祈りを神にささげた。

「お初にお目にかかります。私の名前はリコ。カーシャ様を崇敬す

るものです」

「私の名前はキアロ。巫女であるリコよ。その畏敬の念を忘れぬ限り、我が主の加護は永遠となるだろう」

正式な祈りの礼を行うリコの態度を快く想つたのか、キアロは楽しそうに笑つて告げた。そして、真顔 鷹に表情があるかどうかともかく になると、ふわりと音もなく舞い上がる。ルークのちょうど真上を大きく旋回すると、その翼から砂金のような光が降り注いだ。光を浴びたルークは、ゆっくりと目を開ける。

「兄上！」

「ルーク様……」

「シド……リコ……？私は……」

ぼんやりとした表情で起き上がり、枕元に止まっている鷹に目をやつた。そうして、ああ、と小さくつぶやく。

「あなたが……導いてくれたのですね」

起き上がったままの姿で目礼を返し、すっと手を出す。キアロはためらいもなくその腕に移り、真正面からルークの姿を見た。

「ふむ……。我が主の寵愛を一身に受けられたな。……私は主の命に従つたまで。主人はもう一人の寵愛を受けし者の元におられる。行くがいい」

「ありがとうございます」

言葉と共に翼を広げ、キアロは狭い室内をゆっくり旋回する。そうしてから音もなく外へと消えた。その姿を見送ると、ルークは立ち上がる。まだ少し体はふらつぐが、前よりも快調だ。

「父上に、会いに」

そこできつと何もかも終わる。

そんな確信とも取れる想いが胸によぎる。

「ご一緒いたします」

「僕も一緒に行く」

強い決意を瞳に宿した二人に微笑み、ルークはうなずいた。

フィージとレオンに連れられ、沙綾は扉の前に立っていた。威圧感を感じ、なぜか扉に触れるのをためらわせる。

「沙綾」

琳に促され、沙綾は一步前に出た。そつと扉にふれ、ぐっと力をこめる。わずかにきしんだ音を立てて扉は開いた。中からは沙綾がいつも嗅ぎなれた薬の香りがする。そして死の香りも。

「銀の娘よ。来たか」

声は思つたよりもはつきりと聞こえた。病にかすれているが、その声は若いときと変わらぬ魅力を持つている。

「もう少ししたら、我が子らが来るだろう。それまで、その顔をよく見せておくれ」

呼ばれるままにベッドに歩み寄り、手を差し出す。その手を、枯れ木のようにやせ細った手が壊れ物を握るように触れた。

「苦労している手だね。……いや、苦労をさせてしまったのか」

薬草を育てるために畑仕事は欠かせず、粉末状にするために臼も欠かせない。そんな荒仕事を続けていた手は、目立つほどひどくないがマメや手荒れが確実にある。

「綺麗になつたな。綺羅によく似てきた。……光をなくしてしまつたのか……。すまない」

「母を……私を、知つていてますか？」

初めて声を出せば、何故かひどく震えていて。アッシュは安心させるように握る手に力をこめた。そして、沙綾から視線をそらす。「よく、知つているよ」

ため息に似た吐息とともに吐き出した言葉は苦い。黙つて控えていたフィージに視線を向けた。それだけで彼の意を汲み、フィージが口を開く。

「長い話になりそうです。姫君、どうぞおへつらうださい」

「……ありがとうございます」

差し出された椅子に礼を述べて座り、沙綾は暗闇に問いかける。

このまま彼の話を聞いていいのかと。けれど、なんど問い合わせても話を聞く以外に選択肢は見つからない。聞くことが何故怖いのか解らないまま、沙綾はただ待つた。

「父上」

短いのか長いのか、時間が流れ声が聞こえる。アッシュが何か答える前に扉は開き、ルークとシド、リコが姿を現した。

「父上、お加減はいかがでしょつか？」

わずかに緊張したようにルークが聞えれば、アッシュが微かに笑う。そういえば、我が子と話をするのはいつぶりだりうと軽く思案した。そして驚く。記憶にないほどはるか昔だと。

「カーシャのおかげで今は大丈夫だ」

「そうですか……」

ほつと安堵したその表情は複雑だ。今は、とわざわざ告げた意図は、裏を返せばもう長くないということになる。きゅうとうぶしを握り締め、ルークは言葉を待つ。

「シド、おいで」

「はい」

父に呼ばれ、兄のそばからゆつくりと離れる。恐々と衰えた父を覗き込めば、意外な眼差しの強さとぶつかった。

「シド。お前は王になりたいか？」

「僕は……」

突然の質問にシドも含めて全員が驚いた。その危うい質問の内容にルークの体がこわばる。それに気づいているのかないか、シドは何度か瞳を揺らめかせた。

「母上が、僕を王位につけたがっていることは知っています。でも、僕は、王になりたくないません。ただ、兄上の……兄上の隣にいたいです」

幼いながらに必死に考えた答えだった。母から毎晩のように聞かされる言葉よりも、兄が名前を呼んでくることのほうがとても魅力的で大切に思える。

途切れ途切れに選んだ言葉だが、その意志の強さを感じさせるには十分だった。アッシュもルークも、どこかほっとしたように表情を緩める。

「そうか……。少し、昔話をしようつか」

まぶたを閉じ、昔を思い出すように静かに国王は語り始めた。

深い深い森の中。アッシュは一人で牡鹿を追っている。数名の供と狩りにきたのだが、夢中で鹿を追いかけるうちにばぐれたらしい。あと一息。もう少しで「が届く。

そんなときだつた。森の木陰から出てきた一人の少女に馬が驚き、アッシュは落馬した。幸いやわらかい土の上だつたことと、彼が類まれな乗馬の素質を持っていたために大きな怪我はなかつた。

「ごめんなさい！大丈夫ですか？」

最初、少女を見たときアッシュは目を疑つた。その、あまりの美しさに。妖にだまされているのかとも思つたが、少女は駆け寄つてくるともう一度アッシュにたずねた。

「まさか、人がいるとは思わなくて……。ごめんなさい、怪我はありますんか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

そういうて立ち上がるうとしたとき、足首に鋭い痛みが走る。どうやらひねつたらしく、立ち上がることは難しそうだ。それに気づいた少女が、眉をひそめてアッシュの足を押さえ込む。か細い腕のどこにそんな力があるのか、押さえ込まれたアッシュは起き上がることができない。

「動かないでください。失礼します」

一言断りを入れると、少女は手早くブーツを脱がせ足首に触れる。軽く押したり触つたりしていたが、やがてほつとしたように微笑んだ。

「大丈夫、少しひねつただけのようですね。骨に異常はありません。今薬を塗りますので、このままでお待ちくださいね」

持っていた籠から緑色の葉と赤い葉を数枚取り出す。腰に下げていた筒から綺麗な水で丁寧に葉を洗うと、細かくちぎって手のひらでよく揉み解し、ぺたぺたとアッシュの足首に貼り付けだした。ひんやりとした心地よい冷たさにほつと顔が緩むと、少女と視線が合う。

「ようやく笑つてくださいましたね。……こんな森の中で、自分でも怪しこそと思つような人に笑えなんていえることではありませんけど……笑つたほうが魅力的ですよ」

くすくすと冗談めかして告げると、アッシュも緊張が解けたのか頬が緩んだ。そして、少女の手元を覗き込みながら感心したように言つ。

「器用なものだな。薬師か？」

「はい。森に住む薬師です。……人を相手にすることは滅多にありませんので、外から来た人は少し珍しいんです」

「森に住む……銀の一族か？」

不意に、少女の手が止まつた。その双眸がまっすぐに、探るようにアッシュの目を覗き込む。まるで何もかもを映し出す湖のように、少女の瞳は深く澄んでいた。その瞳を真正面から受け止め、アッシュは初めて気づいた。少女の髪も瞳も、見事な銀色だということに。

「……すまない。答えたくないならそれでいい。……名前だけ、教えてくれるか？」

「…………綺羅と申します。……もうじばらぐ休めば、馬に乗つても支障はありません。私の村へお連れすることはできませんので、ここでお別れです」

きゅっと最後の仕上げに白い手巾でアッシュの足首を縛る。そうして、こわばつた顔のままゆつくりと後ずさつた。

「待つてくれ！すまない、言つてはいけないことを言つてしまつたようだ。もう一度と口にしないから、せめてもうじばらぐ傍にいて

くれ

このままここで少女と別れるのは耐えがたかった。何故そんなに心惹かれたのかは解らない。美しく、心優しい少女ならば都に山といる。ましてや、自分の身分ならば引く手数多である。それなのに、なぜか綺羅という少女に惹かれた。

「……銀の一族を知つていらつしやるといつことは、身分のある方ですね」

「違う。身分など……捨ててしまつてもいい」

どうせ自分は必要のない人間だ。

そんな思いとは裏腹に、必要としてほしいといふ想いがあふれ、やり場のない憤りに今日森へ来た。

「……少し、お話をしましようか。あなたが馬に乗れるまで」

アッシュの様子に何か感じたのか、綺羅は困ったような微笑を浮かべて彼の隣に腰を下ろした。

綺羅からは何もしゃべらない。アッシュも、いざ話となると何を話していいのかわからなかつた。ただ無為に過ぎる時間がもつたくなりて、思つままに口を開く。

「私は……必要のない人間なんだ」

「何故ですか？ 必要のない存在など、この世界には存在ませんよ。例えば、小さな虫。この虫ですら、いなければならぬ存在なのですから。あなたが必要ないなら、虫にも劣る存在になつてしましますよ？」

ぐすくすと笑つてそう告げると、さすがにアッシュは顔をしかめる。踏み潰すことも簡単な虫以下の存在にはなりたくない。

「母は……弟ばかりを目にかける。私よりも弟は従順でおとなしくて、かわいいのだろう」

そんな母の言いなりになつてゐる弟も嫌いだつた。後から生まれてきたくせに、大好きだった母を横取り、自分を見下す。弟よりも優れていると証明すれば、母は弟に花を持たせることもできないのかと非難し、弟はわざと負けて母に泣きつく日々。

「あなたは実際、弟よりも優れているのでしょうか？ならば何を卑下するんですか。あなたはただ逃げているだけです。誰も見てくれない、ではなく、誰も見ようとしない。だから、だれもあなたを気にかけない。それだけの存在だと決め付けているんですよ。」

まっすぐに自分を見つめる綺羅の視線に、はつとした。彼女の言うことは、正しい。弟なんかいなくなれと、ただそれだけを願っていた。どうあがいても実際に弟はそこに存在しているのだから、それは消せない事実。それから逃げ回り、周りがすべて悪いと決め付けていた。

「……そう、だな」

「大丈夫。あなたならば立派な王になれますよ」
にこりと笑つて告げる、綺羅は立ち上がりて駆け出す。彼女の言葉に驚いているアッシュをその場に残し、すこし離れた位置に立ち止まる。

「何故……？」

「金の髪。湖の瞳。カーシャ様の『寵愛を受けている』方、立派でないはずはありません。どうぞ、双つの神の『加護』がありますように」

不思議な一礼をすると、綺羅はそのまま森の中へ消えていった。
それと入れ違うように、はぐれた従者が駆けてくる。

「アッシュ様！お一人で先に行かれるから……どうなさいました？」

「……森の、精霊に助けられたよ」

「は？アッシュ様？」

ぽんやりしたその様子と怪我の手当てを見比べ、ただ従者は訝る
ように主人を見るばかりだ。そんな従者の様子にも気づかず、アッシュは綺羅が消えた森をただひたすら見つめていた。

それからしばらくたつた頃のことだ。春が終わりを告げ、夏がやつてくること。アッシュは、どうしてもあの日出会った少女 綺

羅のことが忘れられずに、再び森へと出かけた。うまく森の木陰に供をまき、うる覚えの道をゆっくりと進む。そうして、少女が自分を手当てしてくれた場所までどうにかたどり着いた。

馬をつなぎ、草の上にじろじろと横になる。鳥の声が聞こえ、虫が鳴き、なんとも穏やかだ。木陰に入ればそよ風は涼しく、ついうとうとまどろみ始める。そうすれば、がさりと人の足音が聞こえた。はつとして身を起こすと、剣に手を添えて油断なく見回す。そうすれば、あの日と同じように木陰から少女が姿を現した。

「まあ……またどこかお怪我をされたのですか？」

心底驚いたのか、望月のように双眸が丸く開かれる。少しばかりだよろしく笑うと、ゆっくりと近づいてきた。

「お久しぶりです。今日はどうされたのですか？」

自分にこびるでもなく、ただ自然と向き合ってくれる少女。そうして気づいた。自分は彼女のことが好きなのだと。

「今日は……綺羅に……いや、馬を少し、見てもらいたくて」「変わったお方。馬のためにわざわざこんな森の奥まで来るなんて。昼間は大丈夫ですけど、夜は決して来てはいけませんよ」

足取りも軽くはないある馬に歩み寄りながら綺羅はさりげなく告げた。一瞬言葉を聞き逃すが、何故とすぐに疑問がわく。その疑問のままに問い合わせると、なんていうこともなく少女から答えが返ってきた。

「狼が出ます。私たち銀の民は狼は信頼できる友達ですが、それ以外の方には容赦なく牙と爪をむきますので気をつけてくださいね。

……少し足が腫れますね。手入れは綺麗にされていますけど、無茶な走りかたをしたのでしょうか。もう少しいたわってあげてください

少しだけ怒ったように、しかし馬から目をそらさずに綺羅は告げる。馬に優しく語りかけ、首筋を撫でてから足に薬草を塗りだした。そして、何を思ったのか懐から細身のナイフを取り出すと無造作に指先を傷つける。

「何を　」

「知つていらっしゃるでしょうか。私たち銀の民の血が、何に使われるかを」

少しだけ冷ややかな声。その声に頭の芯がすっと冴え渡り、そういえばと思い出す。

「……銀の神に愛されし者は、その体が薬となる。液体は万能薬となり、肉と骨は若さを、臓腑は永遠の命を『与える』」

「そんなことをいまだに信じていらっしゃるんですね。すべてあとぎ話ですよ。もちろん、血や涙が薬になります。他の薬草に混ぜて使えばたちどころに傷はふさがり、体の痛みはなくなる。けれど、それだけです。永遠の命も若さも、そんなものを銀歌様は『与えたりしません。……私たちは薬師の一族。ただほんの少し、銀歌様から恵みをいただき、怪我や病をほんの少しだけ早く治す業を持つているだけです。銀歌様は心優しいお方ですから……』」

何の感情もなく、けれど崇める神の名を呼ぶだけは幸福そうに。淡々と事実だけを告げる少女の顔は、アツシユからは見えない。ただ、その冷たい響きが何故彼女らが深い森の中で生きているのかを語っていた。

「……すまない」

「あなたが謝る必要は何もありませんよ。すべてあるがままに。それが、銀歌様の教えでもあります」

振り返り、にこりと微笑んだその姿は、全く普通の少女に見えた。心優しく、美しい少女。アツシユは綺羅に歩み寄ると、その手をそつと握る。

「綺羅。私の薬師になつてくれないか？」

アツシユの湖の瞳と綺羅の月の瞳がぶつかった。一人とも言葉は口にせず、ただ探るように互いの双眸を見つめあつ。先に言葉を紡いだのは、綺羅。

「殿下。私は、銀歌様にお仕えする巫女。たとえこの世のすべてを持つ国王陛下のお頼みであつても、それは聞き届けられません」

「もし……もし、私が王子の身分を……」

「その先は言つてはなりません。あなたは必ず次の国王になるお方。人々に必要とされるお方です。軽々しくそんなことをいってはなりません」

アツシユの言葉を封じると、綺羅は少し悩むように顔をつつむけ
る。そうして、仕方ないと小さく苦笑した。

「殿下。友達になりましょか。殿下のために薬を煎じる」とはで
きませんが、あなたのために馬を見たり、話をしたりすることはで
きます」

「友達……」

それは、不思議な響きだつた。乳兄弟と呼ばれるものや、従者と
なるものは大勢いたが、友達と呼べるものは一人もいなかつた。そ
れを、綺羅はにこやかに友達にならうといつてくれたのだ。こんな
うれしい申し出は今まであつただろうか。

「そう、友達です。あなたの話を聞くことなら、私はできます」

「……ありがとう」

何よりもうれしい申し出に、アツシユの顔がほころびた。そのく
つたくない笑顔に綺羅も笑い、いたずらっぽく告げる。

「あなたの名前は?」

「アツシユ。ただの、アツシユだ」

「アツシユ。いい名前ね。……満月の日は朝からここに来ているわ」

「わかった」

そうして、アツシユと綺羅の穏やかな日々が始まった。

「それは、永遠に続くと思っていた」

そう、アツシユは続ける。老いた顔は昔を思い出してか顔に赤み
が戻り、幾分若く見えた。

誰も何も言わない。ただ老人とその子供、運命の子らの吐息が響
くばかりだ。

「何度も何度も、綺羅と会つて話をしたよ。それはとても楽しい日々だった。彼女を愛おしいと思っていたが、手に入れようとは思わなかつた。綺羅にとつて、私だけが特別だと……そう信じていたから」

夢のような日々が崩れたその日。朝から小雨が降りしきる、あまり天気のいい日とはいへなかつた。それでもアッシュは馬を急がせ、いつもの場所に着いた。

「アッシュ！ねえ、きいて、とても嬉しいことがあつたの」「どうしたんだ？」

抱きついてくる綺羅を受け止めながら、アッシュは首をかしげる。今までこんなに喜んでいる綺羅の姿は見たことがなかつた。戸惑いと、微かな不安がアッシュの胸をよぎるが、綺羅は気づかない。喜びに頬を紅潮させ、言葉を紡いだ。

「娘にやつと逢えるの。一週間後、娘が三つになるわ。……私たち一族の間では、巫女の子供は三つになるまで他人と交わつてはいけないしきたりなの。その間は月下という身分の女が子を育て、たとえそれが血を分けた両親であつても会つことは許されない。けれど、三つになつたら誰にも邪魔されずに、やつと本当の家族になるの」立て板に水のごとく、喜びを告げる綺羅。アッシュの表情が見る間に変わることにも気づかない。

「娘……？子供が？」

「ええ、そうよ。私の子供。ああ……やつと沙綾にあえるわ」

愛しい子供の姿を思つてか、綺羅の姿は一段と美しかつた。けれど、その姿がアッシュの心に影を生む。

子供がいる。

娘が。

ならば、夫もいるのだろう。

私だけの綺羅。

私だけの、綺羅だった。

「……そうか、それは……嬉しいだろ？。……すまない、今日は少し気分が優れない。戻るよ」

「大変、顔色が悪いわ。『ごめんなさい、自分のことです』」と舞い上がりてしまつて……薬はある？」

「いや、大丈夫。横になればすぐによくなるよ」

心配する綺羅を振り切り、早足で馬に向かつ。そのまま諂ひる綺羅を置き去りに駆け去つた。

どこをどう通つたのかまったく覚えていない。気づけば雨は豪雨となり、ぐしょぬれのまま王宮にたどり着いた。誰もいない抜け道を通り、部屋まで行く。乱暴に濡れた服を脱ぎ捨て部屋着に着替える。そのままベッドに横になると、目を閉じた。

「綺羅……」

名前をつぶやき、顔をゆがめる。瞼の裏に浮かぶのは、先ほどの喜びに満ちた表情。白い頬を紅潮させ、満月のような瞳を輝かせたその姿。その姿を追い払うように頭を大きく振る。けれど幻は消えるどころか大きくふくらみ、やがてもう一つの幻を生み出す。

綺羅に手を引かれた子供。その子供を挟むように立つ夫。やがて綺羅は、アッシュを置いて歩き出した。その後姿に追いすがつても追いつけない。

「綺羅　！」

声に出して名前を呼び、ようやく幻を振り払つた。その額には汗が浮かび、顔色は悪い。雨に当たつたせいか悪寒まで感じてきて、アッシュは苛立つたように起き上がつた。

トン　トン

そんなときだつた。扉をたたく音が聞こえ顔をしかめる。

「今は誰にも会いたくない。帰れ」

不機嫌そのものの声で部屋からお出で上がるが、扉の前にいる人物は気にした風もなく言った。

「国王陛下。今私に会わないと後悔されますよ」

「……無礼者。誰だ？」

不遜な物言いにむつときたアッシュは、乱暴にドアを開ける。そこにいたのは、見知らぬ人物。黒一色でまとめた緩いロープに、目深に被つた黒いヴェール。小柄なその体つきから女かとも思ったが、すぐに違うと気づく。

「銀の一族から参ったものです」

綺羅が初めて見せた不思議で複雑な一礼をすると、ぱさりとフードを下ろした。そして気づく。男に銀の色がなことを。

「本当に銀の一族か？」

文献では、銀の一族はその体に銀色を宿すといわれている。一族のほとんどは髪や瞳に色が現れるが、まれに爪や髪の一部だけが銀色であつたりすることもあるが、必ずどこかに宿しているはずだ。銀は銀歌の色。その聖なる色を宿すものだけが銀の一族となれるとある。

「私は異端のものです。だからこいつもフードを被つているのですよ」

「……入れ」

男を招きいれ、アッシュは黙つたまま椅子に座る。そして、彼の出方を待つた。

「陛下。陛下は巫女が愛おしいのでしょうか？」

「何故……」

ぎくじと体をこわばらせ、真正面から男を見つめた。その深い黒の瞳に吸い込まれそうになり、慌てて視線をそらす。その様子を楽しそうに見つめ、続けた。

「陛下がいつも遠乗りで向かう先は、古の森。あそこには、我らが銀の一族がおります。陛下と巫女がどうやって出会ったのかは解りかねますが、陛下は巫女を愛した。けれど、巫女は陛下を愛してい

なかつた。違いますか？」

淡々と語るその口調に、なぜか恐怖がわきあがる。暗い闇の中に
独りでいるときのような、なんともいえない恐怖。何があるわけでも
ないし、何もないはずなのに、なぜか「怖い」と感じる。それと
同時に、誰にも話していないうことを知る男に興味が沸いた。
「どうやって知った？」

「私は異端の者。銀の一族であり、銀の一族ではないもの。もう一
つの月、新月を崇めるものにござります」

「新月を？」

「はい。銀の一族の中のほんの一握りのものだけが新月を崇めます。
新月を崇拜するものは闇の一族と呼ばれ、薬師の能力を失います。
代わりに、別な力が手に入るのですよ」

ふわりと微笑んだその姿は、美しくそして妖のように魔性を秘め
ている。たおやかな姿に隠された毒に気づけずに、アッシュは言葉
を紡いだ。

「……話を、聞こうか

「ありがとうございます」

ふつと、息を継ぐ音が響いた。その声がかすれていることに気づ
き、フイージは席を立つ。その音で痛いくらいの緊張を帶びていた
場が緩んだ。

「陛下、少しお休みください」

力チャヤリと音を立てて茶器がなり、フイージがいたわるよつに声
をかける。それにつなぎ、アッシュは緩慢な動作で体を起こす。
途端、激しい痛みが胸を襲い、かがみこんで咳き込む。

「父上！」

ルークとシドが同時に立ち上がり、その小さくなつた背をゆづく
りと撫でた。なだめるよつに動く手のひらに、徐々にアッシュの呼
吸が静まる。

「大丈夫だ」

ふー、と大きく息を吐くと、フイージからぬるい白湯を受け取つた。ゆっくりと口の中で転がすようにして飲み込み、呼吸を整える。

「カーシャ、おるかね？」

「もちろん、お傍に」

アッシュが呼ぶと同時にふわりと金の光が舞つた。それは人の姿を形作り、驚く皆にいたずらに笑いかける。

体重を感じさせない動作で床に舞い降りると、心配そうにアッシュの顔を覗き込んだ。

「無理をして……私にも限界があるわ」

「それでも、話さなければならぬうう？」

「……そうね」

すっとカーシャの唇がアッシュの唇と重なりすぐに離れる。その瞬間、目に見えてアッシュの顔色がよくなつた。ほつと安堵の息を漏らす子供たちに笑いかけ、すっと手を伸ばす。

「ルーク。アッシュの次に愛しい子。あなたが次の国王よ。アッシュの変わりに、この国を、私のかわいい子らを導いて」「わかりました」

「いい目をしているわ。アッシュと同じ瞳。……シド。あなたは王にはなれないけれど、決してひがんではダメよ。ルークを、兄を支えなさい。それはあなたにしかできないことよ」「は、はい」

緊張に少々上ずった口調でシドはうなずき、そうして兄を見た。ルークの厳しい目にその重責を知り、必ず兄を助けようと心に誓つ。そんなシドの内を見透かしたようにカーシャは笑い、リコに視線を転じた。

「リコ。いつもあなたの祈りを聞いているわ。あなたの祈りは私の命。ありがと」「い、いいえ！私の祈りなど、些細なもので……私を含めて、民全員がカーシャ様をお慕いしております」

「あなたのその純粋さが大好きよ。だから……どうか、眞実を知つても悲しまないでね」

「え……？」

何を、と問い返す間を与えず、カーシャはすつとり口から視線をはずす。それに戸惑いながらも問いかける機を逃し、リコは唇をかんだ。

金の女神は視線をフィージに向ける。複雑なその眼差しの意味に気づき、フィージはただ首を横に振った。それに少しだけ悲しそうな視線で見つめ返し、レオンを見る。

「レオン。いつもルークを支えてくれてありがとう。これからも、何があつても私の愛しい子を見守つてあげて」

「お約束します」

真摯な瞳でカーシャを見つめ返し、レオンはしつかりとうなずいた。それに満足して微笑み、最期に銀の娘と狼の隣に行く。

「沙綾……ごめんなさい」

「何を……何を、謝られるのですか？」

不安にきつくなぶしを握り締め、沙綾はかすかにゆれる声音で問う。

「あの人を、止められなくて……」

碧い双眸に涙をいっぱい浮かべ、カーシャはうつむいた。その姿にそれ以上問えずに、沙綾は口を開ざす。すると、何もない空間から突然声が降ってきた。

「カーシャが謝ることではないよ」

「兄様？」

カーシャが顔を上げると、沙綾の後ろにいつの間にか影が立つていた。銀色の影はすぐに入型となり、神の姿と変わる。誰もが初めてみるその姿に驚き、やがて慌てて深く頭をたれた。崇敬する神ではないが、それが当たり前のこと。

「お前一人の責任ではないよ。私にも……非はある」

「でも……」

「私は自分の中の欲に負けた。だから、私の愛しい子をいつまでも悲しませている。…アッシュ」

「はい」

カーシャから視線をはずすと、銀歌はアッシュに視線を転じた。老いた国王は、その眼差しを真正面から受け止める。一瞬だけ揺らめいた瞳には罪悪感に彩られていた。

「この続きは、私が話そう」

「……よろしく、お願いいいたします」

ベッドの上から深く頭を垂れ、アッシュは悲しみと後悔に顔をゆがめる。そのままいたわるように横たわらせ、それをみてから銀歌は口を開いた。

「アッシュ、楽にしていなさい。カーシャの加護も、無理をすれば長く続かない」

銀歌の言葉に続き、カーシャがそっとアッシュの背中に手を添える。そのままいたわるように横たわらせ、それをみてから銀歌は口を開いた。

「男とアッシュは、ある一つの計画を立てた」

あの雨の日から、何年も時が経つた。何度も何度も満月は訪れたが、アッシュは訪れない。かといって、綺羅から彼に連絡を取るすべはなかつた。ただ、そこで彼を待つだけだった。

「今日も、来ないかな……」

もうこないかもしれないとそんな思いが何度も頭をちらついたが、最後に会つたときの彼が気になつて仕方がない。もしも、という淡い期待を抱き、結局何度も足を運んでしまうのだ。

綺羅があきらめのため息とともに村へ戻ろうとしたその瞬間。遠くから微かにひずめの音が響く。綺羅はその音へ向かつて無我夢中で駆け出した。

「アッシュ！」

「綺羅……」

少し見ないうちに、彼女はさらに綺麗になつた気がする。うつとりと目を細め、その美貌をしっかりとまぶたに焼き付けた。きっと、自分は彼女に嫌われてしまつだらうから。それでも、それでも

「綺羅、一つだけ頼みがある」

「何?」

「一度でいい。君の家族にあわせてくれないか?」

それは無謀ともいえる言葉。銀の一族は決してよそ者を村にいれない。けれど、もしも、

綺羅が自分を少しでも愛してくれているのならば　たとえそれが、友愛としても。

「……わかつたわ。今夜、望月の祭りがあるの。そのときには……あなたは大切な友人だわ。私の娘を見てもらいたい」

少しだけ迷つてから、綺羅はうなずいた。うなずいて、しまつた。アッシュは一度硬く目を閉じると、ありがとうとかされるような声でつぶやく。そのとき、綺羅は気づけなかつた。友人の様子がかしいことに。

「そうね……月が中天に昇るころ、またこの場所で。あまり早くいつたら、村の人にはれてしまうわ」

くすりと笑い、いまだ馬上のアッシュを見上げる。手綱を取る手にそつと触れ、押し戴くように額に当てた。

「アッシュ、あなたは私の初めての友達よ。巫女である私に気安く話しかける人はいなゐわ。夫を愛している。けれど、それと同じくらいあなたも大切よ」

「綺羅……」

「また夜にね。待つているわ」

何か言いかけたアッシュをその場に残し、綺羅は駆け去つた。その姿を見送り、アッシュは一度天を仰ぐ。唇だけで愛しい人の名前をつぶやき、自嘲するように笑つた。

「もう、遅い……」

星が瞬き、満ち満ちた月が天を飾る夜が来た。綺羅は巫女装束に身を包み、アツシユを待つてゐる。その横には、彼女にそつくりな子供の姿。

「沙綾。これから来る人のことは、誰にも言つちゃダメよ？」

「父様にも夕凪にも言つちゃダメなの？」

小さな手で母の指をしつかりと握り、沙綾は不思議そうに問うた。なぜなら、母は父と夕凪には何でも話しなさいといつも言つていたからだ。いつもといつてることが違うと、不思議そうに首をかしげる。そんな我が子の姿をみて、綺羅は微笑んだ。

「他のことなら何でも話していいのよ。これから来る人は、私と沙綾だけの友達だからよ」

「ともだち？」

「そう、友達。もう少ししたらあなたにも友達ができるわ」

母の言つことは半分も理解できなかつたが、ただこれから来るのは特別な人なのだと。それだけは解つた。だから、沙綾は目を輝かせてうなずく。

「うん、わかつた。母様と一人だけのひみつだね。あ、でも……りんにも言つちゃダメ？」

「琳にはいいわよ。琳に隠し事はできないからね」

くすくすと楽しそうに笑つて母はうなずいた。綺羅の許可をもらい、沙綾は目に見えてほつとした表情になる。そんな娘を愛おしそうに見つめていると、やがて蹄の音が聞こえてきた。けれど、何かが違う。いつもの聞きなれた音ではない。

「……沙綾、村へ戻りなさい。父様のところへ行くの」

「母様は？」

「すぐに行くわ。だから、急いで」

ただならぬその様子におびえ、それでも沙綾は駆け出した。すぐに父に知らせなけれどそれだけを思い、一心に走る。

やがてその姿が見えなくなると、アツシユがやってきた。しかし、

いつもと様子が違つ。硬質なよろいを身につけ、その後ろにも十騎ほどの騎士がいる。

「アッシュ。どうこいつ」と?

「……綺羅、私ときてもらひ。そもそもなれば、このまま森は炎に包まれることになるだら?」

「……なんですか?」

あまりに言われたことが非現実的で、思わず綺羅は問い返した。
冗談だろうと思いたくて、けれども彼はきっと本気だらうとなぜか解る。

「私と一緒に来い。お前が来れば、村も子供も無事だ」

「……アッシュ。本気なの? そんなバカなこと、本気で考えているの?」

「本気だし、バカなことでもない。……最初から、こいつすればよかつたのだ」

「ふざけないで! 私はあなたのものにはならないと最初に言つたはずよ」

「それならば……仕方がない」

アッシュが手を振ると同時に、十騎の馬が一気に森の奥へと駆け出した。それを見て、綺羅も反射的に駆け出そうとするがその行く手をアッシュがさえぎった。

「どいて! そこには私の家族がいるのよ。あなたと一緒に行く気はないわ!」

「綺羅。私のものになれ」

「いやよ! 私は銀の一族の巫女。いつか銀歌様にお仕えするの。あなたの元には死んでも行かないわ」

「そうか……」

どこかが解っていたような、あきらめたような声。その声音に一瞬氣を抜いた瞬間、綺羅は馬上の人となつていていた。無理やり馬に抱き上げられたのだ。

「下ろして! アッシュ、目を覚まして! いつものあなたに戻つて!」

「暴れるな。落ちる」

闇雲に暴れる綺羅を器用に抱きなおすと、馬を走らせる。その先是森の外ではなく中。村へと向かっていた。

綺羅が見た村は、悲惨な状況だった。炎が木々を燃やし、たつた十人の男が村を蹂躪している。幼い女子供は逃げ惑い、男は立ち向かうも人形のように倒れていく。

「ひどい……！」

「お前がしたことだ。お前が素直に言うことを聞かないから、こうなった」

「私のせい……？……アツシユ、お願ひ……下ろして」

涙で顔をぬらし、アツシユを見つめる。その銀色の眼差しに貫かれ、アツシユは一瞬腕の力を抜いた。その瞬間、馬から転がり落ちるよう綺羅は抜け出す。走った先は、愛する家族の元。

「綺羅！」

戻れという男の声を無視し、綺羅はひたすら走った。そして、目を見開く。家は炎に包まれ、その前に倒れているのは自分が愛した夫。

「皓貴！いや……お願い、目を開けて……」

「きら……？」

「じつあー」

「うわー」とのよに名前をつぶやいた男にすがりつき、綺羅は涙ながらに名前を叫ぶ。今から自分の血を飲ませても、間に合わない。もう、命のともし火が消えかかっているのが解つた。

「き、ら。愛しているよ。私はいいから、沙綾を……かわいい私たちの娘を……」

「皓貴……いやよ……」

「綺羅。わがままを言わないで。さあ……」

ぎこちない仕草で涙を流す妻の髪を撫で、促す。綺羅は何度も迷いに視線を揺らめかせたが、やがてその唇に最期のキスをすると勢よく駆け出した。

涙で曇る視界を拭い去り、今はただ愛する娘のことだけを考える。

「さあやー！りん！」

大声で名前を呼びながら走るその姿を、不思議と誰も止めなかつた。もしかしたら、アッシュにそう命じられていたのかもしれない。今はそれが好都合とばかりにひたすら走る。

「助けて！」

遠くから悲鳴のような声が聞こえ、綺羅は足を速めた。遠すぎて娘かどうか判断はできないが、もしかしたらと望みをかける。果たして、そこにはぐつたりと動かない狼の姿と、同じように血を流して倒れている娘の姿があった。そして、そこにさらに刃をつきたてようとする男の姿。

「さあやー！」

綺羅は声限りに叫ぶと、渾身の力で男に体当たりをした。男はよろめき、刃はそれる。その隙に娘を抱きしめた。

「沙綾！」

返事のない娘にさつと顔から血の気がうせる。けれど今はこの場を離れることが先と、娘を抱いたまま駆け出した。

闇雲に走り、大木の陰に隠れる。

「沙綾、沙綾。お願ひ、目を覚まして……」

頬を撫で、綺羅は何度もキスをする。やがてまぶたが動き、ゆっくりと黎明の瞳が母を捕らえた。

「母……様？」

「ああ……沙綾……」

ぎゅっと抱きしめ、もう一度娘にキスをする。それにほんの少しだけ微笑み、沙綾はすぐに意識を手放した。血の気の失せた表情に綺羅は息を呑み、沙綾をしつかりと抱きしめたまま月を見上げる。銀色に輝く双眸でまつすぐに満ちた月を見つめ、静かに祈りを捧げた。すると、銀の光がすっと人型となつておりてくる。

「銀歌様。どうか、この子をお願いします。私は……すぐにあなたの元へ参ります」

さつとやうなるであらうと、どこか確信した口調。それに小さく瞬き、銀歌は軽く吐息を漏らした。

「私の元へきても……私のものにはならないのだろう？愛しい娘よ」

「……私は……皓貴を愛しています。すべてあなたのもの。けれど、これだけは譲れないのです」

「ならば、お前のかわりに娘をもらおう。私と愛しい子と、あれの血が混ざったこの娘を」

「……沙綾の命が助かるならば」

「必ず約束しよう」

「ありがとうございます」

そういうて微笑んだ瞬間、背後に気配を感じた。そのときには既に遅く、痛みというよりも焼けるような熱が背中を襲つた。声もなく沙綾を抱きしめたまま倒れる綺羅。その衝撃か、沙綾の瞳が開いた。

「さあや、怪我はない？」

「母様……？」

「どこも、いたくない？」

かされるような、泣きそうな声で母が尋ねると、娘は精一杯微笑んでうなずいた。なんとか母を安心させたかったのだが、いつもと違うその気配に顔がこわばる。

「痛くないよ。母様が抱きしめてくれるから……どこも、いたくないよ」

「よか……た。……」め、ね、さあや。母様、なにもにしてあげられない。一緒に、いられなくて、ごめん……ね

「一緒に、いられないの？母様……どこかにいったら、やだよお」

ひつゝ、と幼い泣き声が聞こえ、綺羅は困ったように微笑んだ。その双眸から涙があふれ、「ほつといやな音を立てて喉から血があふれ出る。

「泣かないで。父様と……いつも、沙綾を見守っているから」

そういうて、娘に口付けようとした瞬間。意識が闇に落ち、腕が

するりと外れる。

幼い子供には支えきれずに、母の体の下敷きになる。けれどその重みは心地よく、そして悲しくて。沙綾はその体にしがみつくようにして叫んだ。

心からの叫びに、あたりが銀色に染まる。やがて銀白色に森は染まり、光が消えた後には何も残つていなかつた。そう、あれだけ森を紅に染めた炎も、凶刃を手にした男たちも、村人の、母の亡骸も。すべてが何もなかつたように消えうせた。ただそこに在つたのは、小さな子供と一匹の狼、そして間違いを犯した国王の姿。

「これは……」

唐突にすべてが消えてしまつた森の中でアッシュが呆然としている、銀色の光が一つの影になる。それは書物で見たことのある月の神の姿。

「月の……神？」

「哀しきものよ。我が妹の加護を受けし者よ。何故間違いを犯した？」

「私は……私はただ、あの娘がほしかつた。誰よりも私を理解してくれたあの娘が。なのに……娘は私を裏切つた」

怒りのにじむ声に銀歌は悲しそうにまぶたを伏せる。すつと右手をあげると、そこには生前そのものの綺羅の姿が浮かび上がつた。「アッシュ。私は言つたわ。あなたのものにはならないと……なれないよ。私は銀の神に仕える巫女。銀歌様のものよ。皓貴を……夫を愛しているわ。けれど、やがて私は銀歌様の元へいく。それを承知で、皓貴も私を愛してくれたわ」

「月の神の元へ行くのは、お前が死んでからのことだろう？それまで、お前はあいつのものになる。あいつに微笑みかけ、あいつの腕の中で眠る。それが許せない」

悲しみをたたえた綺羅の瞳から、涙が一滴零れ落ちた。その涙はとめどなくあふれ、綺羅の美しい顔がゆがむ。

「私は、あなたのものでもあつたのよ。私に友達はいない。あなた

にもいない。あなたを理解し、私を理解してくれるあなたは、私の
たつた一人の友達よ。なのに、あなたは私のすべてを欲した。
……悲しいことよ」

「何故だ？何故私ではいけなかつた。お前は私を理解してくれて、
私はお前を理解した。それなのに、何故いけなかつた？」

「あなたは、たつた一つだけ理解してくれなかつた。それは、私が
巫女であること。生まれたときから銀歌様のものであることを、理
解してくれなかつた」

アッシュには何を言われているのかが解らなかつた。彼女が銀歌
のものであるということは理解しているのに、何故理解していない
といわれなければならないのか。それが解らなかつた。

「こういえば解るかしら？私と皓貴は清い仲よ。正確には少し違う
けれど……沙綾は、皓貴の血を受け継いでいるけれど、同時に銀歌
様の血を受け継いでいるの」

「…………何？」

「皓貴は覗なのよ。その身に銀歌様をのせることができる人。私は
皓貴と契りを結んだわけではないわ。銀歌様と契りを結んだの」

「なんという男だと、正直な感想はそれだつた。

たとえそれが神だとしても、愛した女を与えることができる男は
そうそういうものではない。もし自分が覗だとしても、決してでき
はしないだろう。神をおろしていいるときの感覚はわからないが、そ
れは自分であつて自分ではないときのこと。そんなときに女を愛す
ることは、自分ならばできない。たとえそれが役目であつても。

「皓貴は、銀歌様のために存在する人。そして、私は銀歌様のもの
なのよ。たとえ、皓貴を愛していたとしても、私は皓貴のものには
なれないの」

「私は…………」

ふらりと揺らめいたその体を、綺羅が抱きしめることはもうでき
ない。手を伸ばしても、その手がぬくもりをつかむことはできない。
それは、自分がしてしまったこと。

「私は……！」

「もう、終わってしまったことよ。だから……」この森には一度と近づかないで。最期のお願いよ

「……約束、しよう」

「ありがとう」

ふわりと微笑み、綺羅は空気に溶けるように消えた。その姿を見送り、アッシュは疲れたように肩を落とす。その姿を憐れみをこめて見つめ、銀歌は告げた。

「今日のことは、誰の記憶にも残らない。すべて夢の出来事となる。けれど……我が妻が許したとしても、私はお前を許すことなどできない」

「……承知しております」

すべては自分の欲から生まれてしまつた悲劇だ。どんなことを言われても耐える覚悟はあつた。

「お前には、今夜のことを克明に……そう、悲鳴のすべてを、木々が燃えるにおいを、人が倒れる音を。すべて覚えておいてもらひ」

「……仰せのままに」

深く頭をたれた瞬間、アッシュは自室に戻つていた。鎧は着ておらず、柔らかなガウンにその身は包まれていたが、血のにおいだけが夢ではないと語つている。

「綺羅……」

愛した女性の名前を小さくつぶやき、アッシュは倒れこむようつて眠りについた。

「眠つて、起きて。あの夜の出来事を知つてゐる者に聞いてみたが、誰も覚えていなかつたよ」

口を開ざした銀歌のあとをつぐよつて、アッシュが言葉を紡いだ。けれど、彼は今でも覚えていると、そつとぶやく。

「沙綾。私を恨んでくれていい。綺羅をお前から奪つたのは、私な

のだから」

「私は……」

責められた顔でアッシュを見つめる沙綾を、銀歌が優しく抱きしめる。そのぬくもりに助けられるように沙綾は口を開いた。

「あなたをそそのかした男は、誰なのですか？」

「あの夜の後、どこへ消えたのか私は知らない。名前は、闇樹といつた」

アッシュのその言葉に息を呑んだのは、沙綾ではなくリコ。真っ青な顔で衝撃と落胆と絶望をない交ぜにしたような視線を向ける。「それは……本当なのでしょうか?」「

「ああ。覚えているよ。黒に銀をちりばめたような髪に、闇のように深い漆黒の目。女のよつに華奢だが……あれは、闇に属するものだ」

「アンジュー様が……」

ふらりとゆれたその体を、いつの間にか背後に来ていたフィージーが支える。リコの様子が腑に落ちず、アッシュは問いかけるようにフィージーに視線を向けた。

「アンジューは……現在、神官を務めております。……王妃様と共に謀なさつて……ルーク様を……」

「そうか……。あれの望みは、たぶん沙綾だろう。綺羅に固執していたからな。……恋敵はなんとなくわかるものだ」

くすりと悪戯に笑い、けれどすぐに笑顔を消すとシドに手を向ける。リコほどではないが、シドの顔色も悪い。

「シド。お前の母親は、本当は心根の優しい女だ。それは私が保障しよう。そこまで気に病むことはない。ルークも、あれを恨んではいけない。……あれは、心根は優しいが少し臆病でな。お前の母親が完璧すぎて、自分もそうでなければならぬともがいているのだが。許しておくれ」

「……昔、シドの……いえ、義母上に、おまえは義母上の子供だとそういうていただいたことがあります。その言葉を信じております」

ルークとシドはうなずくと、それを満足そうに見やり、アッシュ
はまぶたを閉じた。ひどく疲れたのか、顔色があまりよくない。

「アッシュ。そろそろ限界よ。眠りなさい」

優しくカーシャがささやくと、アッシュは疲れたようにため息を漏らす。その姿を見ていた銀歌は、一つ瞬くとアッシュの額に手を伸ばした。

「アッシュ。哀れな子よ。お前はやがてカーシャの元へいく。それでも我が妻が忘れられないか？」

「……カーシャの元へいく、そのときまでは。ビュビュ、彼の人を想わせてください」

「ならば、夢を授けよう。カーシャの元へ行くまで、あの娘と過ごす夢を」

そうわざやくと、アッシュはすつと眠りに落ちた。カーシャはその姿を複雑な眼差しで見つめる。

「ルーク、シド。一週間。愛しい人が、あなたたちとともに過ごせる時間よ」

それは、死を宣告されたに等しい。けれど、一人ともわかつていた。静かにうなずき、シドはルークの手をしっかりと握る。

「兄様」

「解った」

言葉少なに兄弟は視線を交わし、ふつとカーシャの姿は消えた。そして残された銀歌は、沙綾に視線を向ける。

「闇樹の元へ行こうか」

「……はい」

ともすれば足元が揺らいでしまいそうな不思議な感覚。気力だけでしのいでいる沙綾を勇気付けるように、銀歌はその手をきつく握り締めた。

「巫女よ。お前はどうする?」

「私は……私は……」

きゅっと唇をかみ締め、リコはまぶたを閉じた。

聞きたいことがたくさんある。けれども、聞くことが怖い。

迷うリコに、そつとフィージが手を伸ばした。

「迷つているならば、気持ちの整理をつけてから行きなさい。今そのまま彼に会つたら、あつと言いたいことの半分も言葉になりませんよ」

「……はい、兄様。……後から、必ず、いきます」

揺れる瞳のまま沙綾に告げると、沙綾はふわりと微笑んだ。彼女も仄ほの匂い混乱しているだろうに、その強さを羨ましく思つ。

「気をつけて」

ルークの声が響き、その瞬間視界は銀白色に変わった。

ふつと、アンジュは誰かに呼ばれたように視線を上げた。それはその昔愛しい娘に呼ばれたときのような、そんな心が浮き上がる感覚。

「……もひ、そろそろですか」

パタンと読んでいた本を開じると、アンジュはぼんやりと揺らめく灯りを見つめる。オレンジ色に淡く輝く炎は、昔々、まだ自分が闇に魅せられる前のことを映し出した。そう、それは幸せの日々を。

「闇樹。何をしているの？」

後ろから名前を呼ばれ、振り返ればそこには一人の女性。艶めく銀色の髪に、望月の瞳。愛しい人だった。

「綺羅様。薬を、煎じておりました」

綺羅は、自分よりも五つ年上の女性だった。脈々と受け継がれてきた銀の巫女の中でもその力は高く、そして誰よりも美しかった。その姿だけでなく、心根も。

綺羅が生まれてきたときに、枕元に崇敬する神が降り立つたといふ。神は、綺羅をいづれ妻に迎えると、そう告げたらしい。それ以来、綺羅は巫女として、また神の妻としての修行が続いていた。

「闇樹は薬を作るのが上手よねえ。私、薬を作るのが本当に苦手だから羨ましいわ」

闇樹の手元を覗き込みながら綺羅は感心したように呟つ。彼が煎じているのは、解熱と解毒の作用があるきわめて難しい薬だった。「何をおっしゃいますか。綺羅様には尊いご使命がありになります。私が」ときの能力と比べてはいけません」

闇樹は慌ててとんでもないと首を振るが、それが謙遜だということは綺羅はよく知っていた。一族の中でも、彼は薬作りがとても優れていると評判だったからだ。綺羅はくすぐすと笑い、子供にするように彼の頭を撫でる。

「き、綺羅様！ もう子供ではありません！」

「ごめんなさい、あんまりかわいいから」

顔を真っ赤にして怒る闇樹がさらに可愛らしく見えて、綺羅はなおも笑う。そんな綺羅はいつものことだったので、あきらめたよう肩を落とした。少しだけすねたように唇を尖らせれば、綺羅がふわりと微笑む。

「そうね、あなたももう成人の儀を済ませたのだったわね。ごめんなさい」

「いいえ、構いませんが……人前ではしないでくださいね」

「もちろん。わかっているわよ」

なんだかんだいいながらも、闇樹は綺羅に構われることが好きだった。淡い恋心を抱く相手に子ども扱いされるのは複雑な心境だが、それでもうれしい。

「綺羅、ここにいたのか。婆様が探していたぞ」

不意にがらりと扉が開き、長身の男性が顔をのぞかせる。穏やかな黎明の瞳に、柔らかな亞麻色の髪。綺羅の幼馴染だ。

「皓貴。ごめんなさい、すぐに行くわ。またね、闇樹」

会釈で皓貴と綺羅に別れを告げ、闇樹はため息を漏らす。今夜に迫った、綺羅の相手を務める儀式を思つて。

「もしも……」

もしも、自分が綺羅の相手を務めることができたならば。 他には何も望まないのに。

その夜、「婆様の屋敷」と呼ばれる長老の家で儀式が行われた。何を基準で選ばれるのかは解らない。観の素質があると言われた皓

貴、闇樹、そして他に一人の男が横一列に並んで座った。皆一族の正装をしているが、色が違う。皓貴はその瞳と同じ柔らかな黎明の色であり、闇樹は濃い緑であつたりと様々だ。

「今から儀式を始める。既に解っているとは思うが、この儀式で綺羅の現世での夫が決まる。その身に銀歌様をお迎えし、銀歌様のお力を綺羅に移す大切な役目じや。覚悟を決めや」

元は綺麗な亜麻色の髪だったのだろう。ところどころにその名残は見えるが、大半は白く染まつていて、しわくちゃの顔に小柄な体だが、さすがに前代の巫女だけあってその瞳は美しい銀色のままだ。婆の声が途切れると、一段高くあがつた舞台に綺羅がやってきた。その身を正式な巫女の衣装で包み、手に足首に鈴をつけていた。歩くたびにしゃらり、しゃらりと澄んだ音色が聞こえた。しかし、その美しい音色よりもなによりも、綺羅は美しかつた。複雑に結い上げられた髪、ほんのりと紅をさした頬と唇。閉じた瞳が開けば、まるでそこに銀色の花が開いたようで。思わず闇樹は息を止めた。

「我が夫となるものを」

やや緊張した声音で綺羅が告げ、銀歌に捧げる神楽舞を舞う。その表情は、時を経ることにやがて本来の彼女とは違う姿に変わる。否、姿かたちは同じだが、彼女の意思はどこか遠くへと消え、巫女としての彼女が舞う。

シャン、シャン、シャラン

軽やかに鈴の音が鳴り、白い手足がまるで蝶のように。激しく、時にたおやかに。やがて唐突に舞は終わつた。そして、綺羅が跪いた相手は

「皓貴。あなたを、つま我が夫に」

闇樹を含め、残りの男たちもまつすぐに一人を見つめる。そして、その視線の中皓貴は一度だけ瞬いた。

「承りました」

皓貴がうなずいた瞬間、闇樹は思わず綺羅を凝視した。その瞳に、表情に、わずかにでも喜びの色がないかと。彼女の意思で決めたの

ではないかと、探してしまつた。そうすれば、この決定は覆されるのに。巫女 穢れなき乙女ではなく、俗世に在る「綺羅」という女が決めことと言い切れるのに。

「本日より、皓貴が巫女・綺羅の現世の夫となることをここに認め。皓貴よ。おぬしの体はおぬしのものであつておぬしのものではない。巫女も覗も銀歌様であるということを決しれ忘れるなかれ」

「はい」

やがて灯りが増やされ、綺羅と皓貴が部屋を出る。これから彼らが何をするのか知り、闇樹は絶望に落ちる。たとえ、その身に銀歌を宿しているとしても、誰も知らない綺羅を知ることができた皓貴にたとえようもないくらい憎しみが募つた。

あの美しい銀の髪が、柔らかな白い体が、甘い声が。すべて、彼のものになるのかと

どこをどう歩いたのか解らないが、気づいたら村から出て森のはずれに来ていた。そこは、はるか昔から決して立ち入つてはいけない聖域。否、禁忌の地。空には銀色の望月が、銀歌に従う星が輝いているところに、そこだけはぽっかりと闇のよう暗い。

「憎らしいか？」

「誰だ」

どこからともなく、虚ろな声が聞こえた。思わず辺りを見回すが、人気はない。押し殺した聲音で名を尋ねると、声はしばらぐの沈黙の後に響いた。

「誰でもない。何ものでもない。我は闇。人の心に、現世の影に、常世の隅に在る闇」

「その闇が私に何のようだ」

そのとき、不思議と闇樹は怖くなかった。常ならば、この近くに薬草を取りに来るだけでも恐怖と訳のわからない不安に襲われるというのに。もしかしたら、どこか頭の一部がおかしくなっていたのかもしれない。

「お前の憎しみが我を呼んだ。憎いか？恨めしいか？」

「……憎い。恨めしい。綺羅を手に入れることができる銀歌が恨めしい。綺羅の体を抱くことができる皓貴が憎い」

「ならば、我を受け入れよ。さすれば、お前は女を手にいれることができるだらう」「うう

闇のささやきは強い誘惑。抗わなければいけないと云ふ気持ちと、いつそのことゆだねてしまえという気持ちが闇樹を責める。

「本当に、綺羅を……」

「我は闇。我は力。憎しみが強ければ強いほど、恨めば恨むほど我は力となる」

「私は……」

迷いは、一瞬だった。きっと、このまま一度と戻れないだらうとどこかで考える自分がいた。

けれども、それでも。力が手に入るのならば。　彼女が手に入るならば。

「受け入れよう」

その瞬間から、闇樹は聖なる色を失った。

不意に、炎の揺らめきが一段と強くなる。どれくらい物思いにふけっていたのか、気づけばあたりは薄暗い。そして、扉の外に人の気配。

「あいていますよ。お入りなさい」

穏やかとも呼べる声で言葉を紡ぐと、ほんの少しのためらいとともに少女が入ってきた。足元には威嚇に牙をむき出す狼の姿。

「あなたに……訪ねたいことがあります」

「何なりと、銀の姫」

悠然と椅子に腰をかけたまま、闇樹は少女の顔を見つめた。そして、そこにかつて愛した女の表情を見つけ、小さく微笑む。

「あなたは、何のためにここにいるのですか？何のために……一族を裏切ったのですか？」

「そうですね……あえて言うならば、私の中の一部が騒乱を求めるのですよ。闇に落ちた、私の魂の一部が、ね」

「もう……戻れないのですか？」

「戻るつもりはありませんよ。私は綺羅を必ず手に入れる。あなたの母上を……あなたの中に」

そういうて闇樹はすっと手を伸ばした。何かをつかむような仕草をすれば、その手には銀色に輝く短剣。

「夕凪の血をすつたこの剣で、あなたも彼女の元へ逝くがいい。その体には綺羅が入る。意識は二つもいらない」

「夕凪を……」

「そう、私が夕凪を殺したよ。そして……憎らしいあなたの父親もね」

優しいと思わせる笑顔でそう告げると、闇樹は音もなく立ち上がった。あまりの衝撃に動けないでいる沙綾に、体当たりをするように琳が退かせる。威嚇に大きくほえ、闇樹に飛び掛る。しかし、その爪が彼に届く寸前、まるで何かに守られるように琳が弾かれた。

「ぐう……！」

「琳！」

床に思い切りたきつけられ、それでも狼は立ち上がる。訝るよううに彼を見つめて思案すれば、琳が何か言う前に言葉が降ってきた。「私にはその牙は届かないよ。私は新月をあがめるもの。そして、新月の化身が私の中にいる。お前が主に牙を立てられないように、私にも牙を向けることはできない」

琳がうなり声を上げ、沙綾が恐怖に身をすくませる。その瞬間、あたりが白銀に染まつた。そして、闇樹の前に銀歌が立ちはだかる。「ここにいたのか……我が身の一部よ

「銀……歌」

不意に、闇樹の体がぐらりと傾き、長い髪が表情を覆い隠した。そして顔を上げたそこには、闇樹であつて闇樹ではないものが姿を現した。

「久しぶりだな、銀歌」

「黒隸。何故彼に取り付いた?」

「お前が俺を切り捨てたからだろう?」

憎憎しそうに銀歌をにらみつけ、闇樹 否、黒隸は告げる。銀歌の表情に苦惱の色が浮いたことに気がつき、心底うれしそうに笑つた。

「俺はお前が憎らしい。お前の一部であるはずなのに、お前に要らないと切り捨てられた。あの森の中の、暗い暗い闇の中で何度もお前を呪つたことか」

昼間でも日が差さない、鬱蒼とした森の中。神聖なる大木に封印され、来る日も来る日も闇を見続けた。何時しか、光を欲することをあきらめた。何度願つても、かなわぬ望みと。

「あいつがやつてきたときは本当に嬉しかったね。これでお前に復讐ができると。あいつも、それを願つていたからな」

「黒隸……」

男の言葉に銀歌は悲しい表情でまぶたを閉じる。その貌が見えたわけではないだろうが、何かを察した沙綾遠慮がちにそつと銀歌の腕に触れた。

「銀歌様……泣いていらっしゃるのですか?」

「沙綾……」

その仕草は、なんと彼の女性にそつくりなのだろうか。彼女もようく、落ち込む自分の腕に触れてただ静かに時を過ごしてくれた。

「泣いてはいけないよ。いや……泣いていいように見えるのならば、それは後悔の涙だよ

「後悔?」

「そう。私が……私が、未熟だったのだよ」

そつと沙綾の頭を撫でると、銀歌は少女を引き離す。その様子を見ていた黒隸は、くつくつと喉を震わせ、刃を銀歌に向けた。

「お前が後悔? はっ! お前の口からそんな言葉が聞けるとはないが、女。こいつはな、欲望にまみれた汚い奴なんだよ」

「そんなこと……そんなことありません！」

「信じられないなら一つ、昔話をしてやるわ」

そういうて、黒隸はどっかりと椅子に腰を下ろす。刃を銀歌に向けたまま、一瞬だけ遠くを見つめた。けれどその視線はすぐに沙綾に移り、言葉を紡ぐ。

「あれは何時のことだったかな。遠い遠い昔のことだ。俺と銀歌は、一人の人間だった」

一人の人間だった頃の名前は覚えていない。ただ、光と影のように相反する自分たちが一つの器に入っていたという事実だけを覚えている。

「俺たちには、不思議な力があった。自分の血を与えることで病気を治したり、怪我を治したりする力だ。そう、お前が持っているの力だ」

彼ら……いや、彼はその不思議な力を使ってたくさんの村を回った。年老いた老婆の目を治し、生まれたばかりの赤子を病から救い、走れなくなつた少年の足を治し　たくさん、数え切れないくらいの村を回つた。そしてある日気づいた。

「何故私は顔も名前も知らなかつた人々を治療し続けているのだろうか。何故、私は旅をして回つているのだろうか」

そして幾晩も幾晩も考えた。やがて気づいた結果は。

「自己満足だつたんだよ。俺には不思議な力がある。癒しの力がある。だから治してあげよう。そうすれば、俺は認められる」

誰に？

自問自答しても答えは出さずに。また、毎晩毎晩考えた。考えて考えて　考え抜いたある夜、声が聞こえた。

「誰のかわからぬ。けれど、声はこうささやいた。お前の力は人として持つべき力ではない。神の眷属となるか、力を捨てて人の身になるのか、そうたずねた。そして、こうも言つた。人の身になるのであれば、今までの働きを評してお前の好きなものを与えよう。富も名声も女も、何でもくれるといった。しかし、神になれば人と

交わることはできないが、永い命と力を授けよう』

黒隸はそこで言葉を区切ると、黙つたままの銀歌にちらりと視線を向ける。その表情は苦悩に満ちていて、黒い男は満足したようににたりと笑った。

「ここで、俺たちは二つに分かれた。おれは富がほしかつた。名声がほしかつた。今まで散々苦労したのだから、ここらで報われてもいいだろ？ そう考えた。しかし、こいつは違つた。力を失いたくないと。この力がなければ誰も自分を見てくれないと。だから神になり、人との交わりを絶つとそういうんだ」

まっすぐに銀歌を見つめる黒い双眸が、銀色を射抜く。それに恐怖したように銀歌はうつむき、自嘲するように笑つた。

「私は……怖かったのだよ。どこで生まれたのかも解らない。何故、こんな力があるのかもわからない。けれども、この力がなければ誰も自分など気にかけることはなかつただろう。もしもこの力を失つて人と交わり続けたら？ やがて、独りになるのではないかと。怖かつたのだよ」

そういうつてうなだれるその姿からは、神とは想像できない。一人の人間のようで。琳は主の切ない姿に思わず尾をたれる。そしてそつとその手に頭を摺り寄せた。

「琳……ありがとう。愛しい娘よ。笑つてくれていい。神と呼ばれていても、私は愚かで醜い生き物なのだよ」

「銀歌様……」

沙綾にかける言葉は見つからずに、ただごぶしを握り締める。唇をかみ締め、見えない光を探すように視線をさまよわせた。

「こいつは、人らしい欲望をすべて捨てた。いや、俺がすべて持つていつた。富と名声と金と地位と女と……すべて欲した。そんなおれとは反対に、こいつは富みも名声も金持ち芋女也要らないといった。ただほしいのは、愛情だけだと。俺はこいつを憎んだし、いつも俺を嫌つた。嫌い、憎み、要らないと最後に切り捨てた」

自分の影を切り捨てるによつて、銀歌は光となつた。天空へ

と昇り、神となり人を見つめ続けた。

「自分だけ望みをかなえたんだ。もう一つの自分を切り捨ててな。……おれは、あの薄暗い闇の中で何故と考え続けた。今まで散々人のためになることをしたんだ。この辺で樂をしたつていいじゃないか？愛情をもらつたつて腹が膨れるわけでもない、体が満たされるわけでもない。なのに、こいつはただ愛情がほしいと、自分を見つめる視線がほしいといった」

動けない体。見渡す限りの闇。人の声も聞こえず、ただ沈黙だけが支配する真の闇。気が狂いそうになるくらい、果てのない時間。「闇樹は、ある意味俺を救つてくれたよ。自らの体を供し、俺の言葉に素直に耳を傾けた。だから、銀歌の力を失つたこいつに俺は俺の持つすべての知識を与えた。そして俺は、こいつの意識奥深くに眠つた。俺に気づかないまま、すべて自分がしたことと思い込むようになつた」「にやりと笑い、黒隸は立ち上がりとゆつくりと一步踏みだす。銀歌と琳は沙綾をかばうようにその背に押しやつた。

一瞬の、永いにらみ合い。

不意に銀歌は悲しそうに微笑み、一度まぶたを閉じる。何かを決意したその表情に、琳が口を開く。

「我が主」

「琳。お前は沙綾を守りなさい。これは……私がけじめをつけなければいけないことだ」

「ですが！」

「大丈夫。私はいなくなつたよ。私でなくなつたとしても……」琳の頭を一度撫でるとすつと片手を前に差し出す。その瞬間、光の帯が黒隸に伸び、その体をぐるりと囲つた。

「何を！」

「しばらくそのまままでいてほしいからね。……沙綾」

「はい」

銀歌に呼ばれ、沙綾はその白い手をそつと握る。その瞬間、ふわ

りとぬくもりが包み込んだ。そして、耳元で聞こえるほんの少し震えた声。

「許してほしい。わたしは、愛しい娘を……お前の母を助けることができなかつた。私の弱さが……悲劇を招いた。……お前に、光を返そう。せめてもの、償いに」

ぬくもりが離れ、すっとまぶたに暖かな手のひらが触れる。そして唇に冷たい感触。

「目を開けてごらん」

銀歌に促されてまぶたを開けば、目の前に端正な面立ち。母と同じ長い銀の髪に、父と同じ黎明の瞳。穏やかで優しい貌。

「銀歌様？」

「覚えておいで、沙綾。私の愛しい娘。お前の光を奪つたのは私だよ。お前の命を助けることと引き換えに、お前を私の花嫁に迎えるその日まで。けれど、私はお前を愛せない。愛しい女としてみるとができない。許しておくれ。私の心は……あの日から、綺羅にとらわれたままなのだよ」

「何故……何故、銀歌様が謝られるのですか?助けていただいたこの命、そして最後の銀の娘として、私はあなたのものです」

光が戻つたばかりの双眸に涙をいっぱいためて、沙綾は言い募る。それに困つたような顔で何か答えようとした瞬間、低い笑い声が聞こえた。

「くつくつく……。銀歌、今までの報いだな。お前はすべてがほしいといつた俺を切り離してまで愛情がほしいといった。」

黒隸は狂つたように笑い続け、銀歌はきつく唇をかみ締める。何か言い返そうと言葉を捜すものの、黒隸のことばは的を得ているような気がしてならない。その迷いと逡巡に、黒い男は勝ち誇った顔で続けた。

「結局はすべてこいつに自己満足さ。誰にも必要とされないのが怖いから神になつて人から必要とされたい。女がほしいけれども自分は人と交わつてはいけないから間接的に人と交わる。ほしい女が手

に入らなかつたから、代わりに別の女を、ほしい女の血を引いた子供を手に入れる。俺よりも身勝手で傲慢だ。どうあがいても、俺とお前は同じなんだよ

「……そうかもしないな」

銀歌はポツリとそうつぶやくと、動けない黒隸に近寄つた。一度立ち止まり、まぶたを閉じる。そこには、かつて人の身であつた自分の姿。そしてふわりと微笑んだ。

「もう一度、一つに戻ろう。私はお前を切り捨てたことで、きっとどこかが壊れてしまつたのだよ。もう一度、人としてやり直そう」

「……俺を取り込んだら、俺の中の闇樹はきえるぞ?」

何かにおびえたように黒隸は銀歌をにらみつけて言い募る。けれども銀歌は微笑んだ。

「闇樹は消えない。私が、消させない」

そして腕を伸ばし、黒隸をやわらかく抱きしめた。

「お前は私。私はお前だ」

そのまま黒隸は泡がはじけるように光の粒子となり、銀歌の体が発光する。あまりのまぶしさに沙綾はまぶたを閉じ、琳はそれでも主に近づこうと足を前に出す。

「琳。お前はもう自由だよ。行くといい。お前の愛する主人の下へ」「我が主!」

琳が叫ぶと、そこには一人の赤ん坊が残されていた。黒と銀の異なる瞳を持つ赤子と、銀色の瞳を持つ赤ん坊。どちらも無邪気に笑い、沙綾に向かつて手を伸ばしている。

「銀歌様……」

そつと手に触ると、思つた以上の力強さで握り返されて。その生命力の塊に自然と微笑んだ。と、そのとき静かに扉を開ける音がする。

「リ!」

「サーヤ様……お田が……? その赤ん坊は?」

「この子たちは……銀歌様と、闇樹、様です」

そして、銀の瞳を持つ赤ん坊を抱き上げ、リコに歩み寄る。

「闇樹様の生まれ変わりです」

「……きっと、銀歌様のお導きでしょ。私がこの子を育てます」「この子は、正真正銘最後の銀の民。もう、崇めるべき神も……お隠れになりました」

その言葉に、リコは目を見張る。一度強くまぶたを閉じると、少しだけ悲しみの混じった微笑を浮かべた。

「この子に、太陽の加護があらんことを。この子の道行く先が日の光であふれんことを」

そして、無邪気に笑っているもう一人の赤子を見つめる。その視線に沙綾が気づき、そっと抱きあげた。

「銀歌様……いえ、この子はもう一度生をやり直します。孤独で寂しい思いをしたぶん、きっと幸せになります」

「もう誰も……悲しまないといいですね」

リコがそうつぶやき、沙綾がうなずく。ふと、窓の外に目を向けると柔らかな日差しが降り注ぎ始めていた。新しい日差しの中から、女性が現れた。半ば光と同化した、陽の女神。

「兄様は……決められてしまつたのね。いつも私に何の相談もなく……私は、本当に兄様を愛していたのに……。残されたものの気持ちなんて考えずに、いつも自分勝手なんだから」

緑の双眸にたくさんの涙をため、カーシャは無邪気な赤ん坊を見つめた。そしてすっと手を上げるときらきらとした光の粒子が人の形となる。

人の形はカーシャと同じように光と同化していたが、それでも沙綾には誰かすぐにわかつた。自分と同じ銀色の髪。満月の双眸。優しい微笑み。

「……母様……？」

「沙綾……。ずっと、ずっとあなたを見ていたわ。私のかわいいい子供。大きくなつたわね」

「母様……私、わたし……」

ぱろぱろと涙をこぼし、その涙が赤子に降り注ぐ。赤子は不思議そうとした足が止まる。

「銀歌様の変わりに、私があなたを見守るわ。夜空を照らす月となつて。あなたの行く先に暗闇が降りないように」

「いつか……いつかまた、会える?」

「もちろんよ。皓貴と……父様と夕凪と三人で待っているわ。琳と一緒に来るこことを。けれども、すぐはダメよ。あなたはたくさんたくさん幸せになるの。好きな人と結婚して、子供生んで。そして、もう何もすることがなくなつたら会いにきなさい。それまで……あなたはこの地上で幸せになるのよ」

「……はい、約束、します」

涙ながらにそれでも微笑めば、母は満足そうに笑った。ゆっくりと歩み寄り、日差しのよつた暖かさで沙綾を包み込む。

「沙綾。私のかわいい子供。あなたが微笑んでいるなら、私も笑えるわ。あなたが悲しくて涙を流したくなつたら、月を見なさい。私はいつもあなたのそばにいるわ。……沙綾。永遠にあなたを愛している」

そう告げると、愛しい娘にそつと口づけた。その瞬間、光が溶けるように消える。ただ、母親のぬくもりだけを残して。

「母様……。カーシャ様、ありがとうございました」

「兄様の愛した、兄様と同じ血を持つ子。あなたに、光の祝福を。兄様はもう……私のことを覚えていないだらうけれど……兄様をお願いします。私では……ダメだから」

「カーシャ様……。きっと、銀歌様はカーシャ様のことを忘れてはいません。人の身になられても、赤子になつても……きっと、銀歌様のお心にはカーシャ様のことが残っています」

「……そうね。……ありがとう、沙綾」

ふわりと哀しい微笑を残すと、カーシャも光が溶けるように消える。その名残を見送つてから、沙綾はリコに微笑んだ。

「行きましょう
帰るべき場所へ。
待つ人の下へ。

森の中で、沙綾と琳は一人仲良く薬草を摘んでいた。そしてその隣にはどんな魔法か、一年で五つほど年の年頃に見える少年。白金色だった髪は、一年でところどころに金が混じる不思議な髪色になつた。そしてその瞳は黒と銀。二口二口とおとなしく沙綾の姿を見つめている。

「麗銀、もう少し待つてね」

「うん、大丈夫。ちゃんといい子で待ってるよ」

沙綾を見つめるその異色の双眸は愛情に満ち溢れていて。黒隸の悲しみも、銀歌の哀しみも残つていない。そのことが嬉しくて、ふわりと微笑んだ。

ふつと空を見上げれば、夏の名残はそろそろ消えかけている。澄み切つた高い青空にふと、幼い少年の瞳を思い出した。

風の便りにルークが王位を継いだことを聞いた。アッシュは病に亡くなり、空の瞳を持つシドも、ルークが王位を継いだことをきっかけに立派な国王補佐となつたらしい。リコは巫女の職を辞し、闇樹 安寿を育てている。

「またレオン兄ちゃんこないかな？」

「そうね。安寿も一緒に来るといいわね」

時折ふらりとやつてくるレオンさんに、麗銀はよくなついていた。遊び半分に剣の稽古をしてもらつたり、フィージからいろいろな話を聞いたりとせわしない。けれどどれも楽しいのか、普通の子供と変わらずに田を輝かせて話を聞いていた。

空には太陽と月が輝いている。真白い昼間の月は、輝くこともせずただ見守り続けている。けれど、それで十分だった。琳がいて、麗銀がいて、空には父も母も夕凪もいて。

「私は今、とても幸せです」

小さく呴かれた言葉に、真白い月が淡く輝いたような気がした。

以前、某投稿サイトで投稿した作品です。「事件」のあたりに少々加筆しております。

まずは、長編を完読していただきましてありがとうございました！個人的に、終わりのあたり……「過去」～「終章」をもつとうまく加筆修正したいのですが、どこをどうにじつたらいいのか検討がつきません……。ふがいない作者です。どうぞ、辛口批評でも結構でするので皆様のコメントを心よりお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7033g/>

銀の薬師

2010年10月8日13時09分発行